ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 23 号

出土駒から見た将棋の発生……小泉　信吾……1
亀岡市天川遺跡出土遺物について……樋口　隆久・森下　衛……10
宇治市善法古墓の鏡と輸入磁器……八木　隆明・杉本　宏……16
峰山町古殿遺跡の第3次調査……鍋田　勇……20
舞鶴市志高遺跡第7次の発掘調査（A・B地区下層）
……三好　博喜・肥後　弘幸……31
栗ケ丘古墳群の発掘調査……引原　茂治……37
千代川遺跡第12次の発掘調査……森下　衛……43
瓦谷遺跡の発掘調査（瓦谷20番地地区）……戸原　和人・伊賀　高弘……49
―昭和61年度発掘調査略報―……55
12. 西小田古墳群　16. 長岡京跡左京第160次
13. 平山東城館跡　17. 久保田遺跡
14. カジヤ谷古墓　18. 八ケ坪遺跡第2次
15. 尊勝寺跡　19. 木津川河床遺跡
資料紹介　古殿遺跡出土の梯子状組合せ木製品……鍋田　勇……71
青野遺跡第6次調査で出土した磨製石剣について…田代　弘……74
府下遺跡紹介　35. 元稲荷古墳……79
長岡京跡調査だより……82
センターの動向……87
受贈図書一覧……89

1987年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

出土駒から見た将棋の発生

小泉信吾

1. はじめに

考古学において生活基盤である，衣・食・住の三要素については研究され，めざましい発展をとげている。有名な落語「寿限無」の中で，世の中で大事なものは何か？という問いに対して，「食う寝る所に，住む所」という下りがある。これは生活の主要な部分を端的に捉えた言葉であり，至言といえる。たしかに生活にとって欠くことの出来ない要素であり，これからも変わることのない不変の真理であろう。しかし我々の生活において，それだけでは満たされない何かがあり，また我々の祖先も同様であっただろう。有名な社会学者，ホイジンガーは，人類を「ホモ・ルーデンス(遊ぶ人の意)」と定義した。

たしかに遊ぶという現象は，人類だけの特権であり万物の霊長として，そこに存在する意味があるように思える。これまであまりに生活基盤に腰をおろし過ぎたきらいのある考古学にとって，そろそろ「遊び」の要素を加えた考え方も必要であろう。本稿はそういう観点から出土駒を例にとって将棋の発生及び遊戯について考えてみたい。

2. 文献等に見られる遊戯について

わが国で最も古いとされる遊戯についての記録は，『日本書紀』天武天皇紀十四年(685)九月十八日に，「天皇，大安殿に御まして，王・卿等を殿の前に喚して，博戯せしむ」とあり博戯の内容については記されていないが，おそらく雙六の類であろう。また同じく書紀に，持統三年(689)「禁断雙六」の令が出ている。日本の記録ではないが，『隋書』の「倭国伝」は倭国について「楽には五弦琴・笛がある。(中略)棊博や握槊(あくさく)・樗蒲(ちょば)などの遊びが好きである」とし，当時盛んに行われていた様子がうかがえる。棊博はおそらく囲碁であり，握槊(あくさく)，樗蒲(ちょば)は雙六やサイコロ賭博のことであろう。さらに時代は下るが，『万葉集』巻十六，長忌寸意吉麻呂の歌に「一二(ひとふた)の目のみにあらず五つ六つ，三(み)つ四(よ)つさへあり，雙(すぐ)六(ろく)のさえ」とあり「雙六(すぐろく)の頭子(さえ)を詠ずる歌」と題している。この歌は天平十八年(746)のものであるが歌にも詠まれている点からもかなり盛んに行われていたことが知れよう。

伝世品としては，「東大寺献物帳」(国家珍宝帳)に記載があり，その内の大部分は現在正倉院に伝わっており，記載によると次のとおりである。

紅牙撥鏤笒子　百枚。雙六頭　一百一十六具一雙，未造了二具。

雑玉雙子　六百六十九。銀平脱合子　四合。木画紫檀棊局　一具。

木画紫檀雙六局　一具。

とあり，そのうち紅牙撥鏤笒子は伝わっていないが，字の意味から考えて象牙を紅く染め，撥鏤という一種はね彫りの技法を用い細工を施したもので，麻雀の点棒みたいなものであろう。雙六頭はサイコロ，雙子は雙六の駒のことである。銀平脱合子は，献物帳に「各納棊子」とあり碁石を入れる碁笥の用途に使われている。銀平脱には諸説があるが，一応の結論として，銀の薄板を文様の部分のみ切り，器物に貼って漆で上塗りし，その後で上塗りの漆膜を剝ぎおこす技法である。木画紫檀棊局とは碁盤のことであり，紫檀製で盤面は象牙を用い罫線を施し，花形の星が十七個打たれている。「東大寺献物帳」は天平勝宝八歳(756)光明皇后によって東大寺に奉納された際の願文と目録にあたるもので，現存では多少の散佚があるものの，その価値はすばらしい。文献によれば7世紀には，すでに雙六は我国に入りかなりの隆盛が見られ，禁止の令がでるまでになっている。

一方，碁の方では『続日本紀』「天平十年(738)七月丙子，左兵庫少属従八位下大伴宿禰小虫，刀を以て右兵庫頭外従五位下中臣宮処連東人を斫り殺す。初め小虫，長屋王に事えて頗る恩遇を蒙る。ここに至って，たまたま東人とともに比寮に任ず。政事の隙に相共に囲碁す。語，長屋王に及び，憤り発して罵り，遂に剣を引きて斫りてこれを殺す。東人は即ち長屋王の事を誣い告げたるの人なり。」とある。天武天皇の孫にあたる長屋王と，藤原不比等の子，武智麻呂以下4家との対立が，(「長屋王の変」) 神亀六年(729)二月辛未に起り，長屋王が自殺した直後，光明子が聖武天皇の皇后(光明皇后)となり，この結果，藤原四卿(武智麻呂・房前・宇合・麻呂)が政権を掌握することとなった。

「長屋王の変」の後，十年にして上記の小虫と東人の事件がたまたま囲碁の対局中におこり記されているが，事件の前年(737)に藤原四卿が相いついで死んだことも影響があると思われる。他の例としては『懐風藻』に弁正法師が大宝年間(701～703)に唐に入り，「遣學唐國，時遇李隆基龍潛之日，以善圍棊，」とあり囲碁に関しては最古の例である。以上のことから考えて，雙六は遅くとも7世紀には行われており，囲碁は8世紀には確実に我国で行われていたといえる。その他の遊戯については幾分時代は下るが，『倭名類聚抄』承平七年(937)の第四四項，雑芸類には，「投壺，蔵鉤，打毬，蹴鞠，競渡，競馬，鞦韆，囲碁，弾棊，樗蒲，八道行成，雙六，意銭，弄槍，弄丸，相撲，相撫，相権，索道，擲倒，闘雞，闘草，拍浮」と23種類も記されている。この頃には多くの遊戯が行われており，現在でも盛んなものもある。競馬，相撲，囲碁はその例といえよう。

しかしながら，現在，盤上遊戯で囲碁と並ぶ将棋の存在は，10世紀には，伝世品はとも

かく文献にも全く見られない。わずかに『麒麟抄』第七巻に将棋駒に文字を書く場合の書き方が著されている。『麒麟抄』の著作年代は不明であるが，藤原行成が著したとすれば，その没年が万寿四年(1027)であるから11世紀の初めには将棋の存在が推定できる。しかし，その成立は南北朝期と推定されるので(注1)，確実ではない。

また藤原明衡(あきひら)の著とされる『新猿楽記』(康平年間1058～1064にできたもの。)の中で，「十一番目の娘の想い者は，一の宮先生の柿本恒之で管絃と和歌の上手で穴があれば吹き絃があれば奏でる。箏琴，琵琶，和琴，方磐，尺八，囲碁，雙六，将棋，弾碁，□(欠字)鞠，小弓，包丁，料理，和歌，古歌では天下にならぶ者のない名手である。」として記されている。具体的に将棋について記したものでは，『二中歴』という1120年代の終り頃の書とされているものがある。この書物は，諸般の事物の名目を百科全書的に類聚解題し，「掌中歴」「懐中歴」の二書を基として編纂され『二中歴』とされた書である。その第十三博奕歴に将棊として図-1のように記されている。

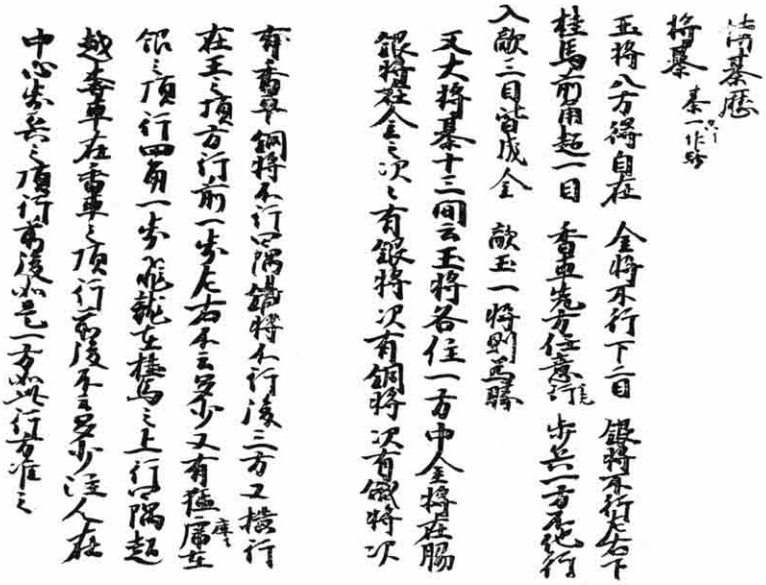


図-1　古写本二中歴（前田育徳財団昭和12年）より複写

この記載によれば，玉将は八方自在を得，金将は下二目に行けず，銀将は左右と下に行けず，桂馬は前角を一目超(こ)え，香車は先方に任意に行く，歩兵は一方で他に行けず，敵の三目に入ればみな金に成る，敵が玉一将になけば則勝と為す。という意味になり図-2のような配置図が考えられる。現在の将棋と違う点は，飛車・角行がなく，駒の再使用もない点である。そのことは，図-1の本文三行目「敵玉一将則為勝」の記載からであり，現在のルールからではとうてい玉が一枚という状態はありえない。ゆえに一度取った駒の再使用

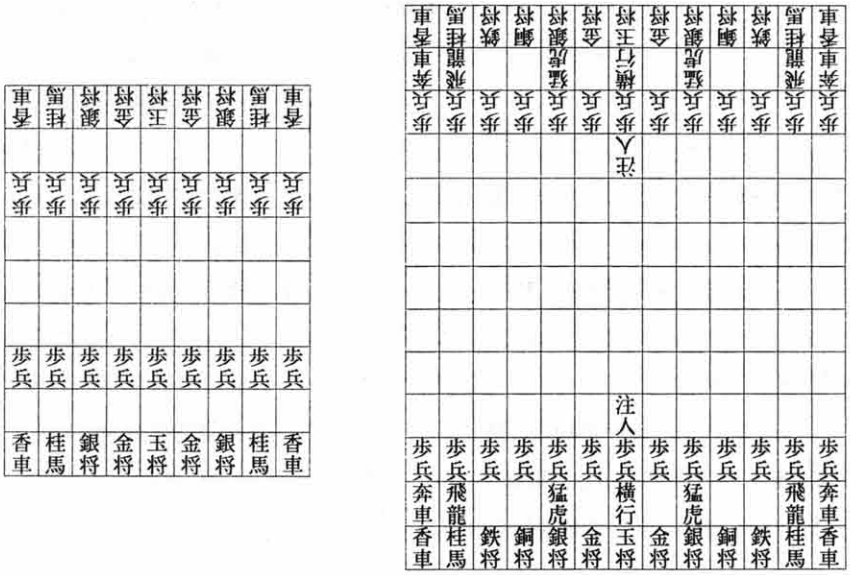


図-2　将棋・大将棋推定復原図

を出来ないルールなら十分ありえるからである。

次に大将棋についての記載があり，初めて二種類の将棋が存在していたことを知る有力な資料である。記載に従うならば，次のような解釈となる。「大将棋は十三間あり，玉将を真中に，金将・銀将・銅将・鐵将・桂馬（文中では欠落）・香車と下段にそろい，次に横行が玉将の上にあり，一つとんで銀将の上に猛虎，二つとんで桂馬の上に飛龍，次に香車の上に奔車がある。またその前列には歩兵がならび，その歩兵の真中の筋に注人がある。

また最後に，「行方，卅の如く之に准らう」とあるので説明のなかった玉将以下歩兵までの駒については，本文三行目の将棊についての行方と同じと考えられ，又敵の三段目に入ればみな金に成り，玉将一枚になれば負ける取捨て制の将棋と思われる。大将棋についての記載では，藤原頼長の日記『台記』康治元年(1142)九月十二日の条に，頼長が崇徳上皇の御前で，師仲朝臣と大将棋を指して負けた記録があり，恐らく図-2の大将棋を指していたのだろう。『麒麟抄』『新猿楽記』『二中歴』『台記』の文献から見て11世紀には将棋が存在し，12世紀には二種類の将棋があったことは，ほぼ確実であろう。

一説[注2]に，『古代から中世にかけての将棋には，中将棋(縦横12目・駒92枚)・大将棋(縦横15目・駒130枚)・大々将棋(縦横17目・駒192枚)・摩訶大々将棋(縦横19目・駒192枚)・泰将棋(縦横25目・駒354枚)などがあったというが，後世はそれらが整理され小将棋となった。』という見解があるが，事実誤認も甚だしい見方で資料についての研究不足といえる。やはり12世紀までには図-2にある二種類の将棋しか存在しなかったといっても過言ではな

い。

以上やや恣意的に文献を羅列して，遊戯及び将棋の発生時期についての下限を模索したが，ほぼ大過ないと考えている。

3. 出土駒から見た将棋発生の下限

前述の文献から考えて，将棋の発生を11世紀に下限を置くとして，それでは考古資料となると次のような出土例がある(表-1参照)。現在，年代的に明確な例で日本最古と考えられるものに，兵庫県城崎郡日高町松岡・日高遺跡出土の駒があり，以下日高遺跡について説明する。

日高遺跡 〔**所在地**〕 兵庫県城崎郡日高町松岡

〔**調査年度**〕 昭和61年 〔**調査機関**〕 兵庫県埋蔵文化財調査事務所

〔**遺跡の種類**〕 但馬国府推定地 〔**遺跡の年代**〕 平安時代を中心としている。

〔**遺跡及び出土駒について**〕 調査地は但馬国府推定地とされるだけあって豊富な遺物が出土しており，極めて細かい灰色シルト層という粘土質の土層から多量の木製品といっしょに出土した。その中でも1094年～1095年頃の年代を示す木簡と出土した意義は大きい。木簡の記年銘については，今後の資料整理の段階で明らかになると考えられるので本報告を待ちたい。駒の大きさは，縦3.6cm・底部幅1.9cm・厚さ0.9cmを測り，遺物としての残存状態も良好といえる。駒の表は，やや薄くなっているものの墨書の痕跡がはっきり確認できる。表面右上部に欠損があるが「歩兵」と判読できる。裏面は，肉眼では全く確認できない。調査者によると，初めは題籤の一部と思われたが，よく観察すると底部の面はきれいに整形されており「歩兵」の文字が読み取れることから将棋の駒と断定したとのことであった。同時代のものとしては，これまで報告された，山形県・酒田市城輪遺跡出土のもの(図-4)や京都市・鳥羽離宮第77次調査出土のものと比較しても少し大型で，厚さもぶ厚い。1例だけで何とも断じがたいが，ひょっとすると，題籤の転用の可能性もある。年代的に日高遺跡のものほど絞れないが，今の所，平安時代後期と推定される例は，前掲の城輪遺跡及び鳥羽離宮第77次調査のものであり，以下，この二つについて説明を加える。

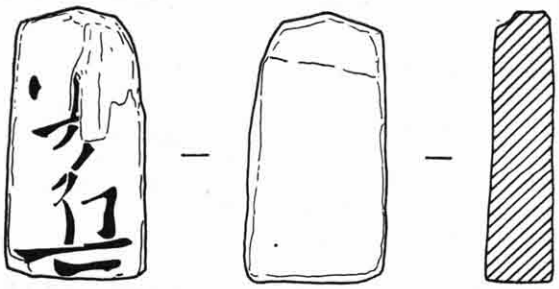


図-3 日高遺跡出土駒 S＝1/1

表1　出土駒一覧表

番号	遺跡名	時代
1.	兵庫県・日高遺跡	平安時代後期(1094～95年頃)
2.	山形県・酒田城輪遺跡	平安時代後期
3.	京都府・鳥羽離宮第77次調査	平安時代後期
4.	兵庫県・玉津田中遺跡	鎌倉時代初期(13世紀初頭)
5.	神奈川県・今小路周辺遺跡	鎌倉時代後期(13世紀前半)
6.	神奈川県・千葉地遺跡	鎌倉時代後期(13世紀末)
7.	京都府・鳥羽離宮第59次調査	鎌倉時代頃
8.	韓国・新安沖海底船	鎌倉時代末期(1323年頃)
9.	神奈川県・鶴岡八幡宮	鎌倉時代～南北朝
10.	京都府・上久世城ノ内遺跡	鎌倉時代末期～南北朝
11.	京都府・鳥羽離宮第54次調査	鎌倉時代～桃山時代
12.	長野県・塩田城跡	鎌倉時代頃
13.	静岡県・小川城跡	室町時代～戦国時代(15世紀後半～16世紀前半)
14.	京都府・猪熊殿跡	室町時代末期(16世紀中頃)1536～1547年の間 天文法華の乱で本圀寺焼亡以後
15.	島根県・新宮党館跡	室町時代末期(16世紀中頃以前)1554年以前
16.	富山県・弓庄城跡	室町時代末期～戦国時代
17.	福井県・朝倉氏遺跡	室町時代末期(16世紀後半)下限は1567年前後
18.	兵庫県・御着城跡	室町時代末期(16世紀後半)下限は1571年直前
19.	東京都・葛西城跡	室町時代～江戸時代(16世紀前半～17世紀前半)
20.	京都府・平安京西洞院	戦国時代末期～江戸時代初期(16世紀末～17世紀初頭)
21.	京都府・御土居遺跡	江戸時代前期(17世紀中頃～17世紀後半)共伴木簡記年銘より 1654～1675年の間
22.	大阪府・難波宮跡	江戸時代前期以降
23.	京都府・隼上り遺跡	江戸時代末期
24.	岩手県・高水寺城跡	新聞報道及び関係機関によって出土したことは事実であるが 詳細はわからない。

城輪遺跡 〔**所在地**〕 山形県酒田市大字城輪

〔**調査年度**〕 昭和54年 〔**発掘機関**〕 酒田市教育委員会 〔**遺跡の種類**〕 官衙

〔**遺跡の年代**〕 平安時代 〔**遺跡遺物の概要**〕 水田遺構とみられる所の井戸より出土し，共伴遺物に，木簡，灰釉・緑釉陶器がある。その点から考えて平安時代後期の所産とされている。駒の大きさには，縦3cm・底部幅1.5cm・厚さ3cmで，表「兵」裏「々」と墨書されている。「兵」と表記されている点，中国将棋にある「兵」との関連性を惹起させるが，裏面が金の略字「々」と書かれている点から考えて単に「歩兵」の一字を省略して「兵」と表記されたのであろう。

鳥羽離宮跡第77次調査 〔**所在地**〕 京都市伏見区竹田内畑町

〔**調査年度**〕 昭和57年8月3日～11月20日 〔**調査機関**〕 京都市埋蔵文化財調査研究所

〔**遺跡の種類**〕 宮殿跡 〔**遺跡の年代**〕 平安時代～江戸時代

〔**遺跡及び出土駒について**〕 調査地は離宮東殿の推定地にあたる調査で確認された遺構は，溝SD1・2及び柱穴であり，遺構は遺物から見て平安時代後期と考えられる。駒(図-4)は溝SD2より2枚出土し，共伴遺物に土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器がある。木製品では，楽人を描いた板絵・木簡・人形・球・下駄・櫛・箸等を検出している。一枚は，表「歩兵」裏「と」と墨書されている。大きさは，縦2.3cm・底部幅1.5cm・厚さ0.4cmで完存。もう1枚は，墨書が一部に認められるが判読はできない。大きさは一部欠損があるものの，縦2.6cm・底部幅1.5cm・厚さ0.3cmを測る。

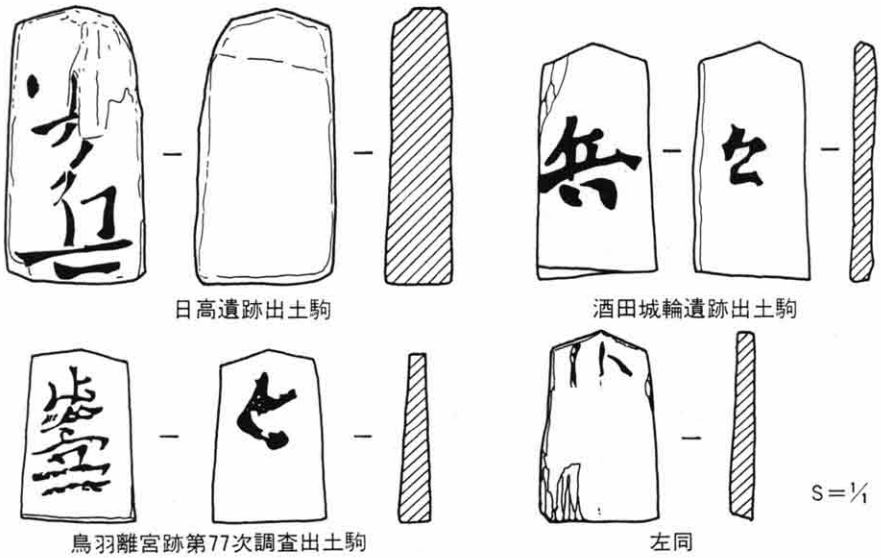


図-4

以上，日高遺跡・城輪遺跡・鳥羽離宮第77次調査の出土例から考えて，平安時代後期には，将棋が存在していたことが確実で，文献史料とも呼応している。ただこれらの３遺跡から出土した駒がすべて「歩兵」である点，『二中歴』の記載にある，将棊・大将棊のいずれに属するかは断定できない。年代的には日高遺跡のものが確実であり現段階では，将棋の発生の下限をさぐる意味でも意義深い。将棋の起源は今のところ，約2000年前ごろの古代インドで行われていた「チャトランガ」(注3)という盤上遊戯に由来していることはほぼ確実であり，インドからアラビア半島を経由しヨーロッパに渡り，チェスに変化し，中国大陸に渡り，幾多の変遷と時代を経て中国象棋になったことは間違いないであろう。

我国の文化に大きな影響を与えた中国文化の中で，将棋だけは日本独特の発達を遂げ，他に例を見ない型を呈している。また中国及び朝鮮からの伝来を受けている囲碁・雙六などとは全く別のルートが考えられ，最近では東南アジアからの説(注4)も有力である。

しかし，中国及び東南アジアルートのいずれかに求めるとしても，伝来の痕跡は今のところ全くない。文献から見ても，出土駒から考えても，11世紀からしか，その存在を見い出すことはできない。それより以前となると皆無である。ただどちらのルートから入ったとしても，日本化し五角形の型になり広く伝播するのには相当の時間が必要であったと考えられ，現段階で最古とされている11世紀よりは１～２世紀は下ると見る方が自然であろう。ただ，将棋の駒が五角形であり，文字が書かれているという認識で考えているからであり，それ以前の発展段階の遺物であれば，かなり見落す可能性がある。いずれにせよ他の遊戯と比較して将棋の存在は特異であり，その発生自体は依然として不明瞭な部分が多い。

（小泉信吾＝将棋博物館学芸員）

注１　『群書解題』雑部２による。
注２　関　忠夫編「遊戯具」(日本の美術12)至文堂　1968年
注３　A History of Chess. H. J. R. Murray, Oxford　1913
注４　増川宏一「将棋Ⅰ」法政大学出版局　1986年３月

＜参考文献＞

「ホモ・ルーデンス」J. ホイジンガ　平凡社　1975年
「懐風藻」(日本古典文学大系)岩波書店　1964年
「麒麟抄」『続群書類従』第三十一輯下・日本書画苑
「二中歴」(古写本二中歴)前田育徳財団　昭和12年５月
御着城跡発掘調査概報　姫路市教育委員会　昭和56年３月
鳥羽離宮跡調査概報　京都市埋蔵文化財調査センター・京都市埋蔵文化財研究所　昭和55年３月
増補改編　鳥羽離宮跡　1984　京都市埋蔵文化財研究所　昭和59年11月

昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要　京都市埋蔵文化財研究所　昭和59年３月
特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡Ⅴ　―昭和48年度発掘調査整備事業概要―
福井県教育委員会　朝倉氏遺跡調査研究所　昭和49年３月
特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡XVI　―昭和59年度発掘調査整備事業概報―
福井県教育委員会　朝倉氏遺跡調査研究所　昭和60年３月
特別史跡一乗谷　朝倉氏遺跡発掘調査報告　Ⅰ　―朝倉館跡の調査―
福井県教育委員会　朝倉氏遺跡調査研究所　昭和60年３月
玉津田中遺跡調査概報　Ⅰ　―昭和57・58年度確認調査概報―
兵庫県教育委員会　昭和59年３月
鶴岡八幡宮　発掘の記録　鶴岡八幡宮発掘調査団　昭和55年３月
掘り出された鎌倉　新発見の鎌倉遺跡と遺物展・図録
鎌倉考古学研究所　昭和56年８月
難波宮址の研究　第７　報告編　財団法人大阪市文化財協会　昭和56年３月
富山県上市町　弓庄城跡　第４次緊急発掘調査概要　上市町教育委員会　昭和59年３月
青戸・葛西城址Ⅱ区調査報告　葛飾区・葛西城址調査会　昭和51年４月
塩田城跡　第一次発掘調査概報　上田市教育委員会　昭和51年３月
新宮谷遺跡発掘調査報告　島根県広瀬町教育委員会　昭和57年３月
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報　1980　草戸千軒町遺跡　―第28・29次発掘調査概要―1980
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　昭和57年３月
第４回　中世遺跡研究集会　中世の呪術資料　1984年６月２・３日
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

亀岡市天川遺跡出土遺物について

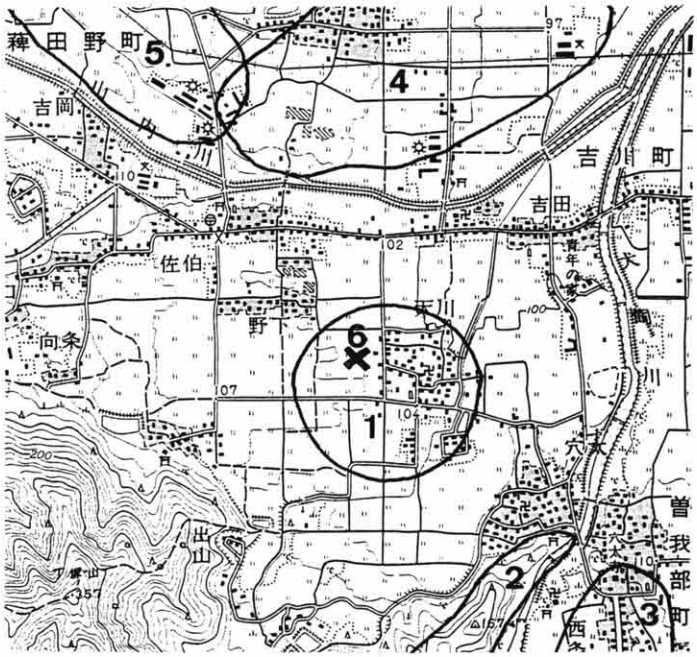
樋　口　隆　久・森　下　　衛

1. はじめに

昭和60年1月，亀岡市稗田野町天川で行われていた農道新設工事に際して多量の遺物が出土した[注1]。場所は，天川集落の西方約100mの地点で，出土遺物はほぼすべてが中世(鎌倉時代)に属す瓦器椀・土師器皿などであった。亀岡盆地を中心とする口丹波地方では，近年の調査例の増大に伴って，徐々に中世の資料も蓄積されつつある。また，これらの資料をもとに当地域の中世土器の様相などを解明しようとする試みもなされている。伊野近富氏を中心に進められた瓦器椀の編年的作業[注2]や，近年の調査で多くの中世資料を得た北金岐遺跡の報告で示された基本的な食器組成についての見解等[注3]である。ただ，現在までのところ，良好な状態で出土した資料は北金岐遺跡例のみと言ってよく，多くの場合断片的なものであるため，今後の資料増加を待つところが大きい。

これらの状況の中で，本資料は，上記の北金岐遺跡の報告の際には多々引用され，幾つもの新知見を提供するなど，非常に貴重な内容を備えるものと思われた。

そこで本稿では，簡単ではあるが，採取遺物の概要を紹介し，今後の調査・研究の一助としたいと考える。



第1図　位　置　図 (1/25,000)
1. 天川遺跡　2. 穴太古墳群　3. 穴太遺跡　4. 太田遺跡
5. 鹿谷遺跡　6. 遺物採取地点

なお，本稿の執筆は1・2・4を樋口・森下が共同して行い，3を森下が行った。

2. 遺跡の概要と遺物の採取状況

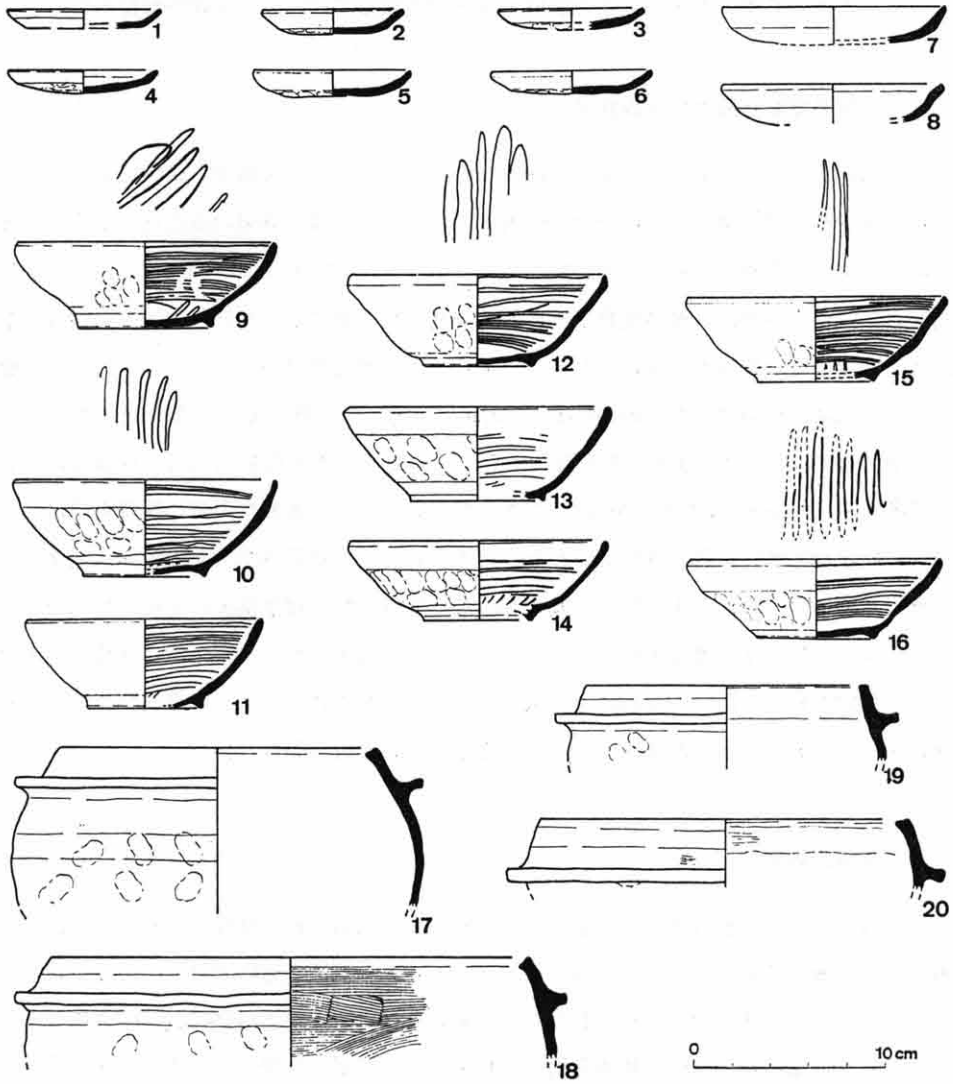
天川遺跡は，上記のように，亀岡市薙田野町天川に所在し，犬飼川と山内川の合流点付近に形成された扇状地上のほぼ中央に位置している。範囲は，遺物の散布状況から，現在の薙田野町天川集落を中心にその西側へ広がりをみせ，およそ600m四方ほどはあると推測されている。(注4) 遺物は，農道改良工事に伴う重機掘削の際に出土した。大半の資料は，既に攪乱を受けた土砂中から採取したものであり，出土層位等は明らかでない。ただ，重機によって溝状に掘削された幅約1mほどの道路拡幅部分を観察すると，現水田耕作土の下に堆積している厚さ30cm程の黒灰褐色土や，その直下の青灰色粘土上面で確認した溝状遺構埋土中に，遺物(瓦器・土師器片)が含まれていることを認めたので，採取遺物は，このいずれかの土層中に包含されていたものと考えられた。青灰色粘土上面の溝状遺構は，現水田畦畔とほぼ重なるように，延長約30m強を確認した。掘削部分に北側の肩部を認めたにすぎず，幅・深さ等は不明である。(注5) しかし，その埋土内から日常生活に使用したと思われる遺物が数多く出土した点は，本遺構が単に水田耕作に伴うような施設ではなく，集落に深くかかわりをもった施設であることを示していると思われた。

3. 遺物の概要

採取遺物には，土師器皿，瓦器皿・椀，瓦質土釜，須恵器ねり鉢などがある。無論，重機によって攪乱を受けた土砂中からの採取品であり単一時期のものではなく，以下に示すようにある程度の時期幅は認められたが，いずれもおおよそ中世(鎌倉時代頃)に属するものであった。量的には全体で整理箱約5箱程あるが，小破片が多く，ここでは遺存状況の良好なものをいくつか図示した(第2・3図)。

1～5・7・8は，土師器皿で，1～5は口径約8cmを測る小皿，7・8は口径約12cmを測る中皿である。いずれも，口縁部をヨコナデ，底部付近を粗いナデで仕上げる。6は瓦器皿であるが，口径・調整手法とも土師器小皿とほぼ同一である。瓦器小皿・土師器中皿は図示したもの以外認められなかったが，土師器小皿は口縁部片で合計16点を確認した。

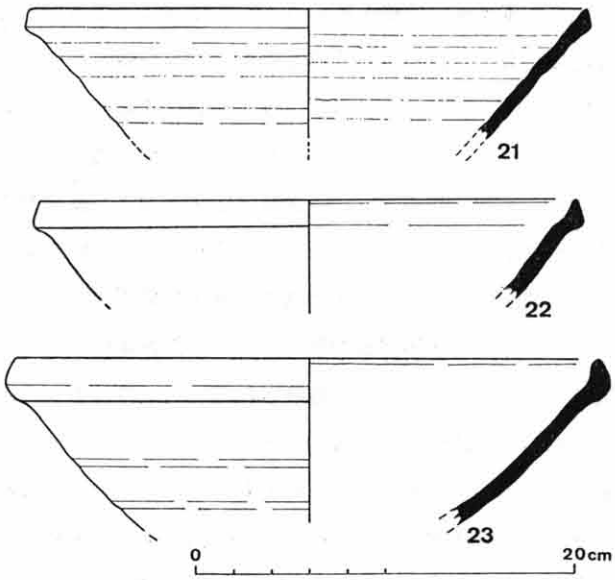
9～16は瓦器椀で，口径約13.2～13.6cmを測る。多くは，口縁部付近が肥厚するいわゆる丹波型と称されるものである。(注6) 形態からは，大きく2種類に分けられるようである。内湾気味に立ち上がる口縁部を有すもの(9～11)と，口縁部が直線的に上外方へ立ち上がるもの(12～16)である。ただし，図示したもの以外はいずれも小破片であり，口縁部の立



第2図　出土遺物実測図(1)

ち上がりの状況が判然とするものは少なく，両者の数量的な比率は算出できていない。いずれも，器壁内面には螺旋文状の暗文を，内面見込みには鋸歯文状の暗文を施す。外面は，口縁部付近をヨコナデ，他はナデで仕上げる。なお，12～16は，口縁端部外面を面取りする。高台部をみると，いずれも断面三角形状の高台を貼るが，高くてしっかりしたもの(9)や，やや低くなったもの(10～16)があり，後者が多くを占めている。このほか，瓦器椀には，器壁の一部に充分炭素が吸着しておらず，土師質のままとなった資料が認められる。ちょうど，重ね焼きを行った際に他の個体と重なった部分に炭素が吸着していない状

況である。破片数にして14点確認した。偶然このような製品ができ，使用するのに不都合がなかったので製品として流通したのであろうか。瓦器椀は小片も含め，約300点を確認した。うち，口径の3分の1以上を残す破片は87点を数える。



第3図　出土遺物実測図(2)

17～20は瓦質土釜である。17は丸味のある体部から内傾してのびる口縁部を有し，口縁端部は内側にやや肥厚する。他はいずれも口縁部片で，やや内傾気味に立ち上がった後，やはり端部が内側にやや肥厚する。いずれも体部外面はナデ，口縁部付近はヨコナデで仕上げる。口縁端部が内側に肥厚気味になるのは，そのヨコナデが強く施されるためであろう。体部内面はナデで仕上げるもの(17•19•20)，ハケ目で仕上げるもの(18)がある。図示したもの以外では，17と同形態のものを1点認めた。

21～23は須恵器ねり鉢である。量的にはわずかで，図示したもの以外には22と同形態のものを1点認めたにすぎない。形態的には，図示したもの各々に認められるように口縁部の形態が異なり，時期幅を示している。21は口縁端部外面に幅約1cmほどの面取りを施すもので，22•23はこれが徐々に大きく玉縁状となるものである。また，22•23では端部付近にヨコナデが強く施され，内面には凹状部が巡るようになる。

これらのほか，図示しえていないが，瓦質の鍋の破片を1点確認している。

以上が採取遺物の概要である。時期的には，瓦器椀の形態が北金岐遺跡井戸跡(SE24)出土資料と類似するものが多く(注7)，およそ13世紀前半を中心として，それを前後する時期のものと考えられる。土釜の形態は，「山城型」と称されるものであり，やはり13世紀頃のものである(注8)。また，須恵器鉢は，平安京周辺の資料と比較してみるとおよそ12世紀末ないし13世紀初め頃から14世紀初め頃に属すものと考えられるようである。

4. まとめ

本資料は，広範囲な天川遺跡の中では，ほんの一画における，しかも偶発的な採取資料

であり，本遺跡の性格を語りうるものではないだろう。しかし，先述のように比較的日常雑器類が豊富に認められる点で貴重な内容を備えている。ただ，本稿で「まとめ」とすべき内容については，その多くを既に北金岐遺跡の報告(注9)において指摘されているので，ここでは，いくつか気付いた点をそれにつけ加えて述べておくことにする。

北金岐遺跡の報告では，当地域の中世における食器組成について，在地産の瓦器椀・土師皿が供膳用具として多くを占め，それに畿内諸国を中心に搬入された煮炊用具としての土釜・調理用具としての須恵器ねり鉢・貯蔵用具としての須恵器ないしは瓦器などの甕，そして少量の中国製磁器が加わるといった基本的なセット関係が示されている。また，瓦器椀については，従来から指摘されていた「丹波型」の瓦器椀の中にも手法・器型等からより細かな分類が可能な点を述べている。これは，今回の資料中にみた口縁部の形態の差異もその一つと理解されると思われるが，細かな検討は行えなかった。煮炊用具としての土釜も，北金岐遺跡では「摂津型」・「山城型」・「大和型」の土釜に加え土師質鍋なども認められている。そこでは「山城型」が主流を占めている点，本資料中の煮炊用具として「山城型」がほぼすべてを占めていることと共通性をみる。しかし，他の型式の土釜や土師器鍋が，北金岐遺跡では少量ずつではあるが共用されていたが，これが時期的な変化なのか他の要因を考えねばならないのかといった点，今後の資料増加を待って検討すべきものであろう(注10)。また，今回の資料中には貯蔵用器としての甕などや中国製磁器を欠いている。これは，本資料が小範囲での採取品であるという性格によるものだろうが，その内容（どういったものが使用されていたか）についても，やはり資料増加を待って考えていかねばならないだろう。

最後に，本遺跡の位置する一帯は，中世には佐伯荘と呼ばれる荘園の一画に相当していたと考えられている(注11)。今後，本遺跡の全容が明らかとされれば，佐伯荘の実態を把握する上で貴重な成果を得ることとなるだろう。なお，本資料は亀岡市教育委員会で保管されているので活用願いたい。

（樋口隆久＝亀岡市教育委員会社会教育課主査，森下　衛＝当センター調査課調査員）

注1　佐伯琴敷農道新設工事に際して，原野初氏より遺物が出土した旨の連絡を受けた亀岡市教育委員会では，直ちに担当職員(樋口)を派遣し，立会調査を行った。なお，本遺跡の名称は，遺物採取時からしばらくの間，琴敷遺跡と仮称していた。

注2　石井清司・弘原茂治・伊野近富「亀岡盆地出土の瓦器について」(『京都考古』37　京都考古刊行会）1980

注3　石井清司・田代　弘・中坪央暁「北金岐遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第5冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1985
本報告書では，天川遺跡を琴敷遺跡と紹介している。

注4　『京都府遺跡地図』第3冊　京都府教育委員会　1986

注5　池状の遺構であった可能性も考えられる。

注6　橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書」(『高槻市文化財調査報告書』第13冊)　1980

注7　注2に同じ。

注8　菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所)　1982

注9　注3に同じ

注10　丹波国分寺跡では，「大和型」の土釜の出土が報告されており，近年の千代川遺跡(亀岡市千代川町所在)でも，土師器土釜や鍋などが出土している。細かな使用状況の解明は今後の大きな課題だろう。
樋口隆久「丹波国分寺第3次発掘調査」(『亀岡市文化財調査報告書』第14冊　亀岡市教育委員会)　1985

注11　細見末雄『丹波の荘園』名著出版　1980

宇治市善法古墓の鏡と輸入磁器

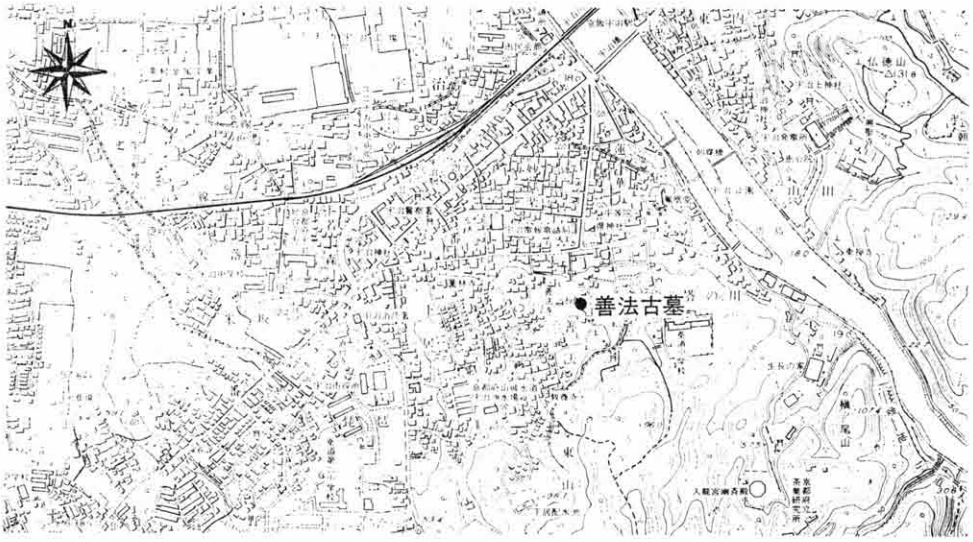
八　木　隆　明・杉　本　　宏

1. はじめに

ここに紹介する鏡と輸入磁器は，約40年前に宇治市宇治善法の善法保育所東側の茶畑より偶然出土したものである。

これらの遺物は，最近，八木が善法地区の歴史資料を調査した際，その存在が明らかとなった所謂埋もれた資料である。したがって，昭和61年に宇治市教育委員会が刊行した『宇治市遺跡地図　改訂版』や昭和60年に京都府教育委員会が刊行した『京都府遺跡地図第５分冊　第２版』には記載されていない。なお，現在，遺物は宇治市教育委員会の所蔵となっている。

これらの遺物が，いかなる性格の遺跡からの出土品であるか，今は伝聞より推測するほかはない。話によると，茶の木の植えかえのために穴を掘っていたところ，地表よりさほど深くない所で土が黒っぽく変化しているところにあたり，そこから鏡・輸入磁器・釘がまとまって出土したという。詳細については，不明な点が多いが，それぞれが完形に近い状態でまとまって出土している点と木目を残す鉄釘が数本伴出している事から考えて，こ



第１図　善法古墓の位置 (1/20,000)

れらの遺物は墳墓の副葬品と見てよい。この遺跡を字名をとって善法古墓と呼びたい。

2. 善法古墓の位置

善法古墓は，平等院鳳凰堂の南南西約300mの段丘上に位置している。地番は，宇治市宇治善法116番地あたりである。現状は畑地となっており，西側に善法保育所が建っている。段丘上の標高は40～50mで，高さ15～20mの段丘崖の下側には宇治市街が広がっている。段丘上からは，この宇治市街を始め平等院，そしてそれらを通して宇治川・宇治橋を一望のもとに見わたせる。平等院鳳凰堂の標高は概ね16.5m程である。

平等院は，藤原道長の宇治第を伝領したその子頼通が永承七年(1052)に寺としたものであり，翌天喜元年(1053)には今に残る阿弥陀堂(鳳凰堂)の供養を行っている。今，平等院は寺域も往時の広さはなく，建物もわずかにこの鳳凰堂だけとなっている。しかし，かつては多宝塔を始め，本堂，法華堂，五大堂，経蔵，不動堂，護摩堂，円堂，東小御所などの諸堂が境内に建ち，南の寺域外にも湯殿などの建物があったことが知られている。善法古墓の北西50mの所にある善法寺付近には善法堂があったとされる。平等院については，考古学的調査が全くなされていず，具体的な内容は良くわからない。寺域外諸堂についても同様である。詳細は今後の調査をまたなければならないが，善法地区を含む平等院南寺域外からは平安後期から鎌倉時代にかけての瓦が採集されており，寺域外諸堂がこの地区に存在したことは確かである。善法古墓のある所は，平等院と関係の深い地区であったと見ることができる。

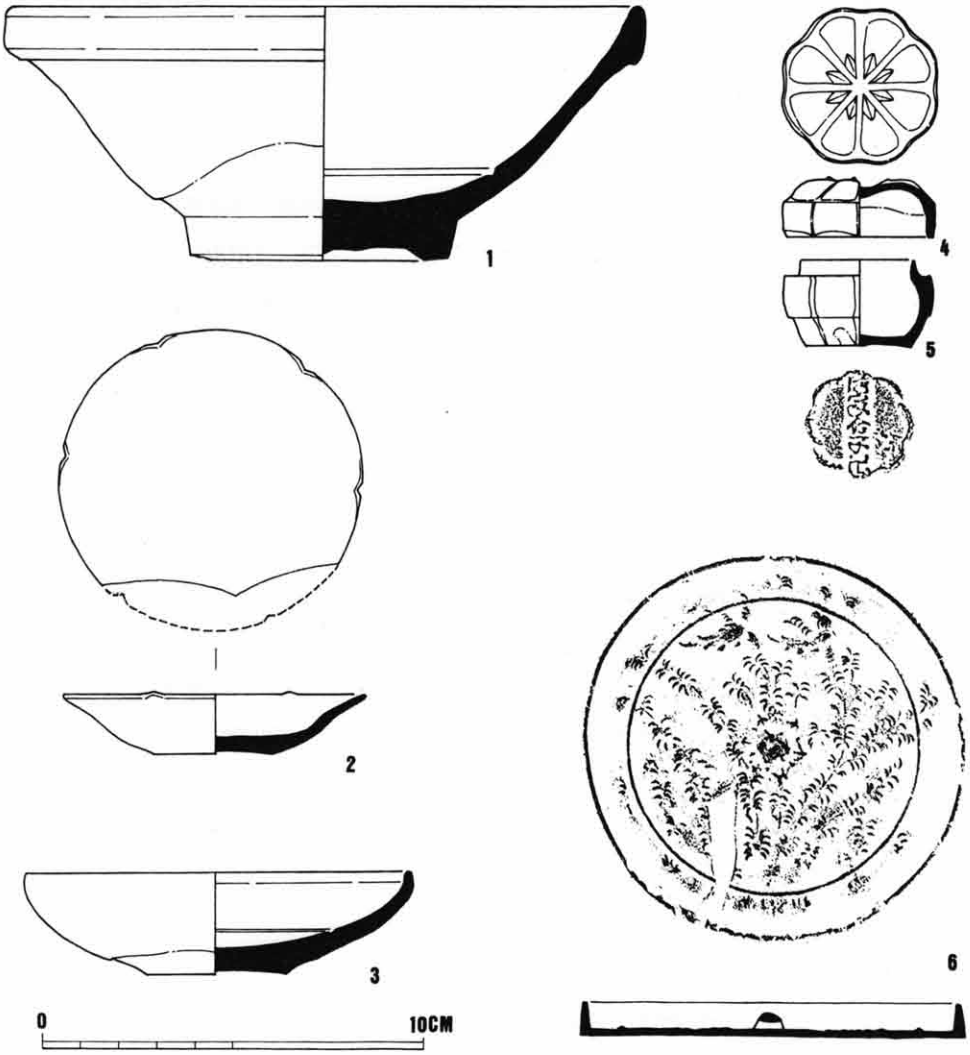
3. 善法古墓の遺物

善法古墓より出土した遺物は，鏡1面，白磁碗1個，白磁小皿2個，白磁合子1対，鉄釘8片である。以下にその概要を報告しよう。

白磁碗(第2図1)　口縁端部が大きく外側に肥厚し玉縁状となる碗である。口縁部直径16.6cm，高さ6.7cm。底に高台がつく。高台は削り出している。高台の直径6.8cm，高さ1.2cm。高台内側の削り込みが浅いため，底部が厚く鈍重な感じがする。体部内面の見込みに一条の浅い沈線がめぐる。胎土の色は白色であり，透明な釉が内面全体と外面上半にかけられている。完形品である。

白磁小皿(第2図3)　口径10.2cm，高さ2.6cm。口径端部が内弯する。底部は平底で，底径3.6cm。内面見込みに一条の浅い沈線がめぐる。胎土の色は灰白色であり，白色の釉が底部と体部下半の一部を除く他の部分にかけられている。完形品である。

白磁小皿(第2図2)　口径8.0cm，高さ1.6cm。口縁端部に現状で4か所，推定で6か



第2図　善法古墓の遺物

所のヘラによるわずかな切り込みがみられる。所謂輪花小皿である。器壁は薄く作られている。底部は平底であり，底径3.0cm。胎土は白色であり，青白色の釉が底部を除く他の部分にかけられている。口縁部の4分の1程を欠いている。これが当時よりのものなのか出土時もしくはその後のことなのか不明である。

白磁合子(第2図4・5)　蓋(4)・身(5)ともに完形である。蓋は，口径3.8cm，高さ1.6cm。型作りで天井部が八花弁状となっている。花弁には子葉をもつ。身は，口径3.0cm，高さ2.2cm。型作り。蓋と同じく八花弁状である。底部に「□家合子□」の陽刻がある。胎土は両者とも白色。釉は青白色。釉調は，前述の白磁小皿(2)に似る。

鏡(第2図6)　鏡面直径10.1cmの銅鏡。鏡背には圏線がめぐり，その内外に文様をもつ。文様は2羽の鳥と複数の笹(竹)である。肉厚は0.1～0.15cm。鈕は，截頭円鈕であり鈕文はない。外縁は直角縁。高さ0.9cm。

前田洋子氏は，この鏡を群笹双鳥文鏡とし，13世紀中頃のものとみる。すなわち，截頭円鈕であること，直角縁で外縁頂部幅が狭いこと，圏線を意識しない文様構成，薄肉で文様の彫りが繊細であること，鳥文様の尾部表現が後世の雀文様と異なり古い様式を残していることから，平安時代の様相を留める鎌倉時代前葉の作例と考えるのである。

また，鏡面の一部に欠けた部分がある。これは発見時の破損である。

3. おわりに

善法古墓から出土した遺物の概要をのべた。以下に気付く点を記しまとめにかえたい。

遺物の年代は，鏡が13世紀中頃，磁器類は12世紀後半と考えられる。伝世を考慮しないならば，善法古墓の年代は13世紀中頃(鎌倉時代前葉)とみてよい。

被葬者の性格については，直ちに明確にすることはできない。しかし，鏡を始め中国より輸入された磁器類が副葬されていることから考えて，一定の経済力を有していた者であることは窺える。平等院との関係が気にかかる。

善法地区は，ここに報告したもの以外にも，しばしば古墓が発見されたという。また，中世から近世にかけての花崗岩製の石仏が多数この地区の墓地に集められている。このことから推測すれば，善法地区は宇治周辺の墓域の一つであった可能性が指摘できる。今，我々はわずかにその内容を知ることができた。今後，実態の究明をする必要があろう。

本小稿をまとめるについては，鈴木重治氏(同志社大学)・前田洋子氏(大阪市立博物館)および伊野近富氏((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)からご教示を受けた。記して感謝する。なお本稿の文責は杉本にある。

(八木隆明・杉本　宏＝宇治市教育委員会社会教育課主事)

峰山町古殿遺跡の第3次調査

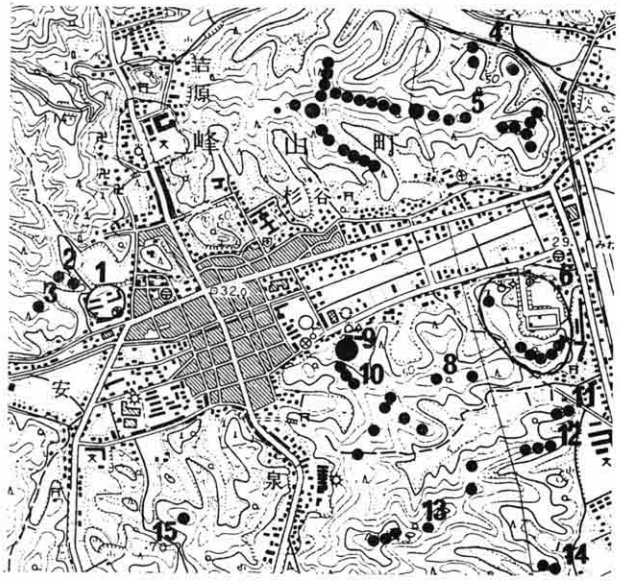
鍋田　勇

1. はじめに

古殿遺跡は，京都府中郡峰山町字古殿に所在する。現在は，府立峰山高等学校の敷地内であり，昭和52年(注1)・57年(注2)に校舎改築などに伴い発掘調査が行われた結果，弥生時代後期から古墳時代前期及び，平安時代から鎌倉時代の集落跡であることが確認されている。

今回の調査は，同高等学校の体育館新設に先立つ発掘調査であり，京都府教育委員会からの依頼を受けて当調査研究センターが行った。現地調査は，昭和61年8月4日に開始し，同年12月2日に終了するまで約4か月を費やした。

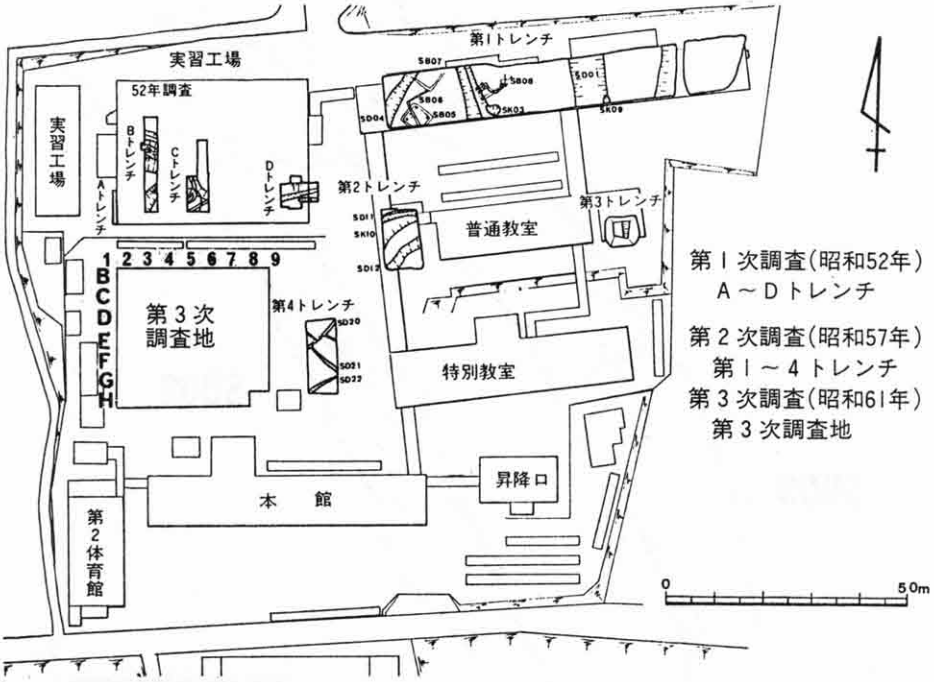
今回の調査では，弥生時代から平安時代までの各時期の溝が検出され，多量の土器及び木製品が出土した。このうち木製品は，古墳時代前期を中心とするもので，保存状態もよく良好な資料である。従って，この報告では，遺構の概要とともに木製品に焦点をあて紹介することにしたい。



第1図　古殿遺跡及び周辺遺跡分布図（1/25,000）
1. 古殿遺跡　2. 丸山古墳群　3. 成家古墳群　4. 小骨古墳群　5. 杉谷山古墳群　6. 扇谷遺跡　7. 八幡古墳群　8. 金刀比羅古墳群　9. カジヤ古墳　10. カジヤ遺跡　11. 七尾遺跡　12. 七尾南遺跡　13. 愛宕山古墳群　14. 小長谷古墳群　15. はせが谷古墳群

2. 地形と層位

古殿遺跡は，竹野川の支流である小西川の沖積平野に面する丘陵最南端に位置する。今回の調査地は，北西から東南にのびる尾根間の谷と北東から南西に広がる谷との合流地点にあたる。従って，当地はこれらの谷が長期間に渡る土砂の堆積によって埋没し，形成された場所であり，黒色粘質土や砂・細礫などが交互



第2図　第１～３次調査トレンチ配置図

に厚く層をなしている。

遺物を包含する層は，地表下約2.8～0.8mで，大きくⅠ～Ⅲ層に分層することができる。Ⅱ層は古墳時代前期に，Ⅲ層は弥生時代末期に概ね想定できる。

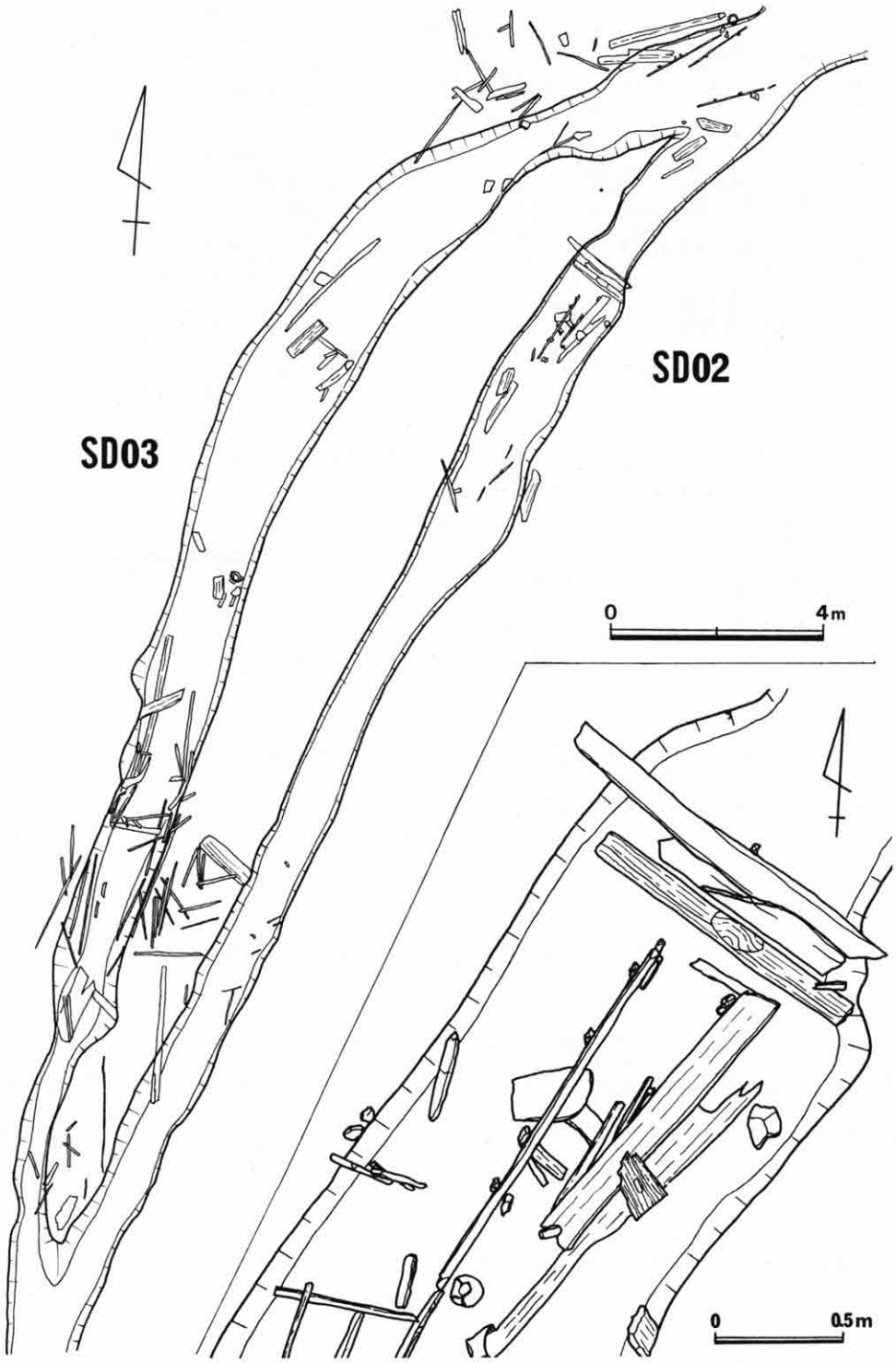
3. 遺　　構

検出した遺構は，溝(SD01～10)・木器溜り(SX01)・土器溜り(SX02)等である。

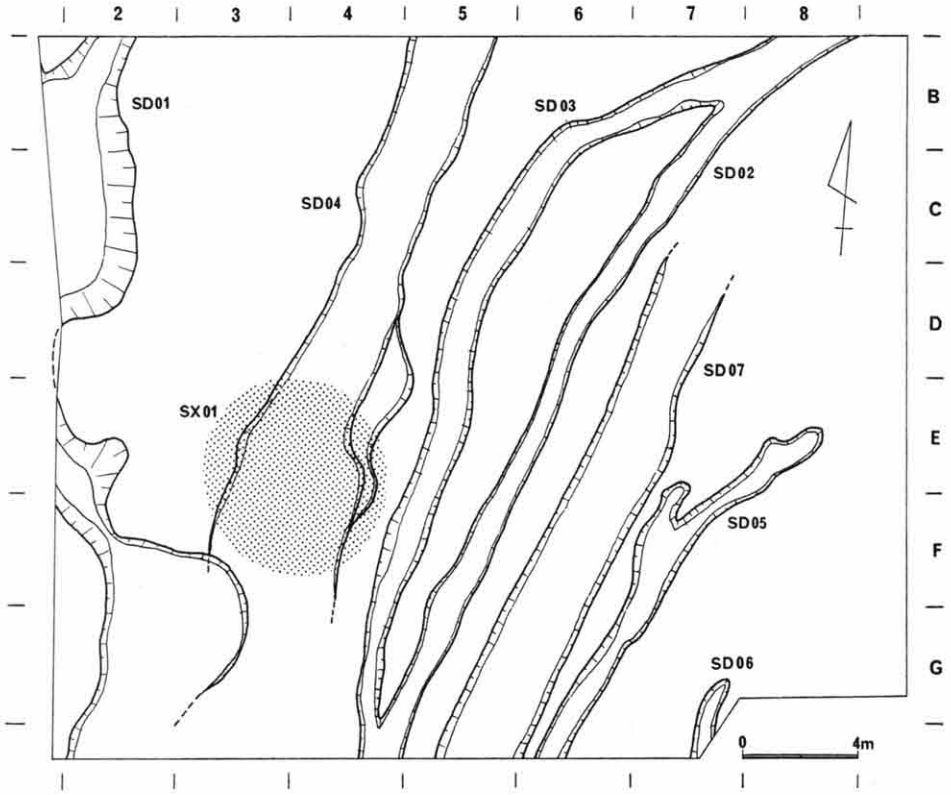
SD01　調査地の西側を北→南へ流れる溝。一部地山を深く抉っており，人為的に削られたものと考えられる。弥生時代末～平安時代の土器が出土している。

SD02・SD03　SD03は北東→南西へ流れる弥生時代末から古墳時代前期の溝。SD02はSD03から分流し，再び合流する溝で，古墳時代前期に掘削されたものと思われる。分流点では，SD03へ主に水流を導くように板を杭で固定した施設が造られており，SD02ではそのすぐ下流に堰が築かれている。

SD04・SX01　SD04は北東→南西への流れをもつ古墳時代前期の溝状遺構。北側で深さ約20cmと浅く，途中で消滅する。SX01はSD04の埋没とともに形成された木器溜りで，おびただしい数の木製品(柱・板・棒・その他用途不明品)が折り重なって出土した。この遺構面では調査地のほぼ全面で木製品が出土している。



第3図　SD02，SD03平面図及び堰(SD02)拡大図



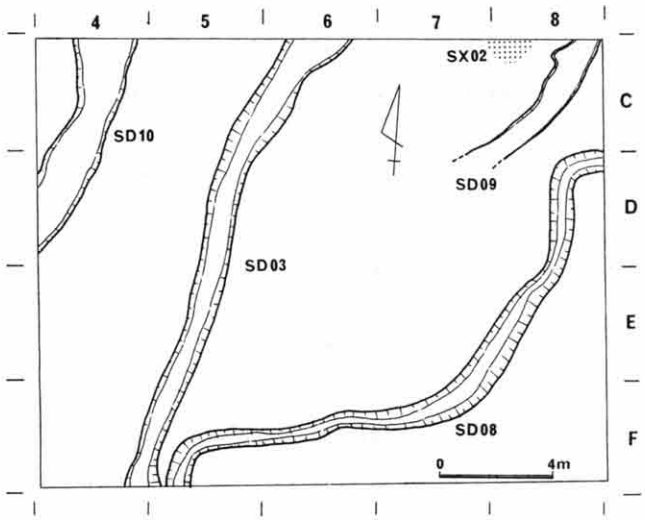
第4図　遺構平面図（上層）

SD05　弥生時代末～古墳時代後期の土器を含む溝。

SD06・SD07　遺物は出土していないが，古墳時代の溝と思われる。

SD08・SD09・SD10　いずれも弥生時代末の溝。

SX02　明確な遺構は伴わないが，土器が密集して出土したもの。第1次調査(注3)で検出されたSX11と同様の性格をもつものと思われる。



第5図　遺構平面図（下層）

4. 遺　　物

今回出土した遺物には，土器・木製品・石器・種子等がある。今回は主要なものにとどめ詳細は次回に報告する。

＜土器＞

弥生時代末から古墳時代前期まで，Ⅲ(a)層→Ⅲ(b)層→SD03→SD02→Ⅲ(c)層と時期的な変遷過程が認められる。包含層及び溝からの出土資料であるため一括性には欠けるが，器種，量とも豊富であり，丹後地方における基準資料になるものと思われる。また，平安時代の土器として，SD01より「今西」と墨書のある須恵器椀が出土している。

＜木製品＞

木製品は，工具・農具・発火具・容器・祭祀具・建築材(柱・板・棒)・土木材(矢板・板・杭)・棒状木製品(有頭棒・尖頭棒)・その他用途不明品と多岐に及び，総数は1,000点以上を数える。これらの多くは，SX01を含む遺物包含層(Ⅱ層)及びSD03内からの出土で，主として古墳時代前期に属するものである。

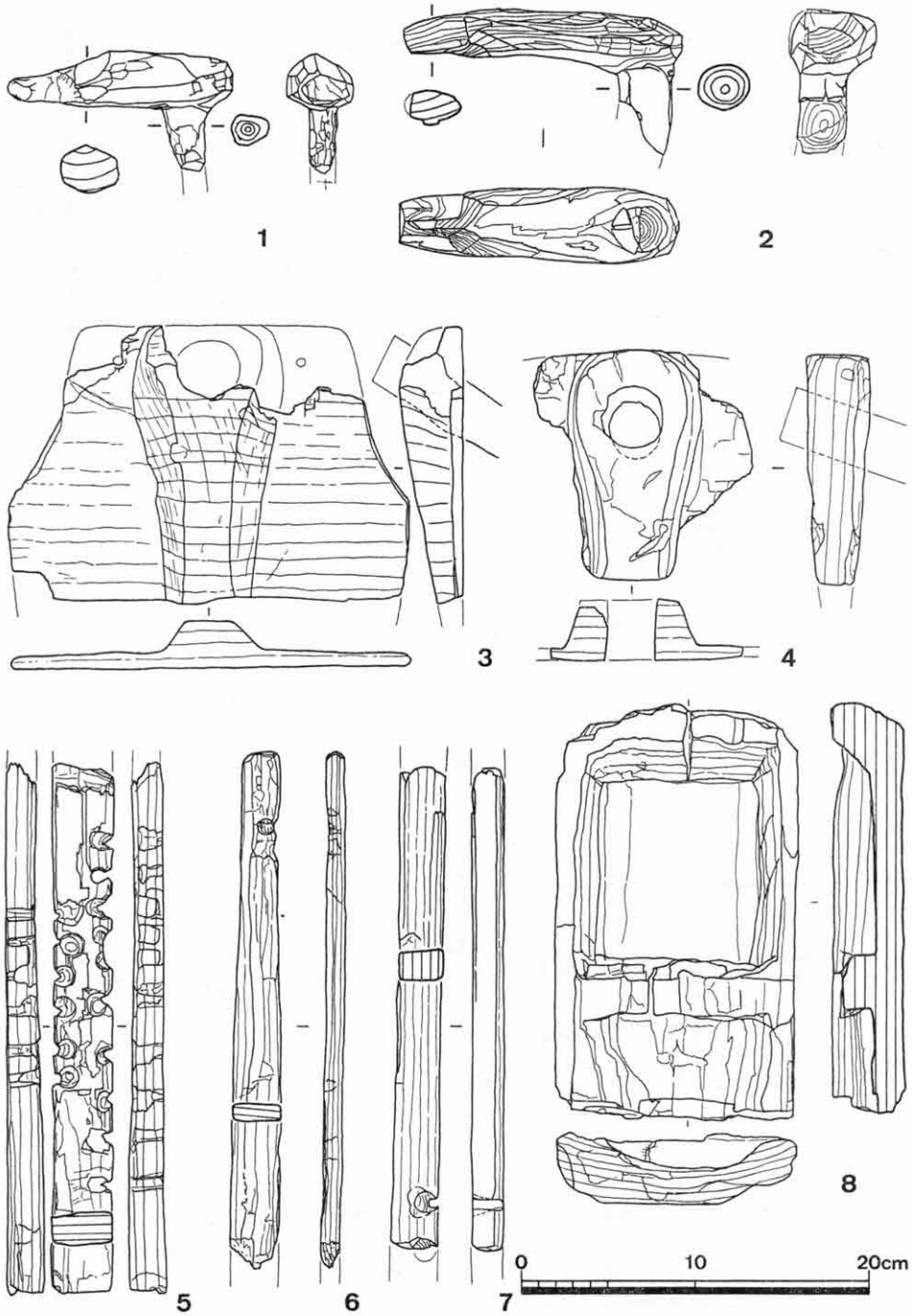
工具　1・2は手斧柄である。いずれも袋状鉄斧を装着し，横斧になるものと推定される。木の枝分かれした部分を利用し，幹の部分を台部，枝の部分を握部としている。1は広葉樹，2は針葉樹と思われる。1・2ともB8地区出土。

農具　3・4は舟形突起を持つ広鍬である。古殿遺跡では農具の出土は少なく，柄と思われるものを含めても，今回数点しか出土していない。3は突起の脇に小孔の穿たれた痕跡を持つ。3はB5地区，4はG6地区出土。

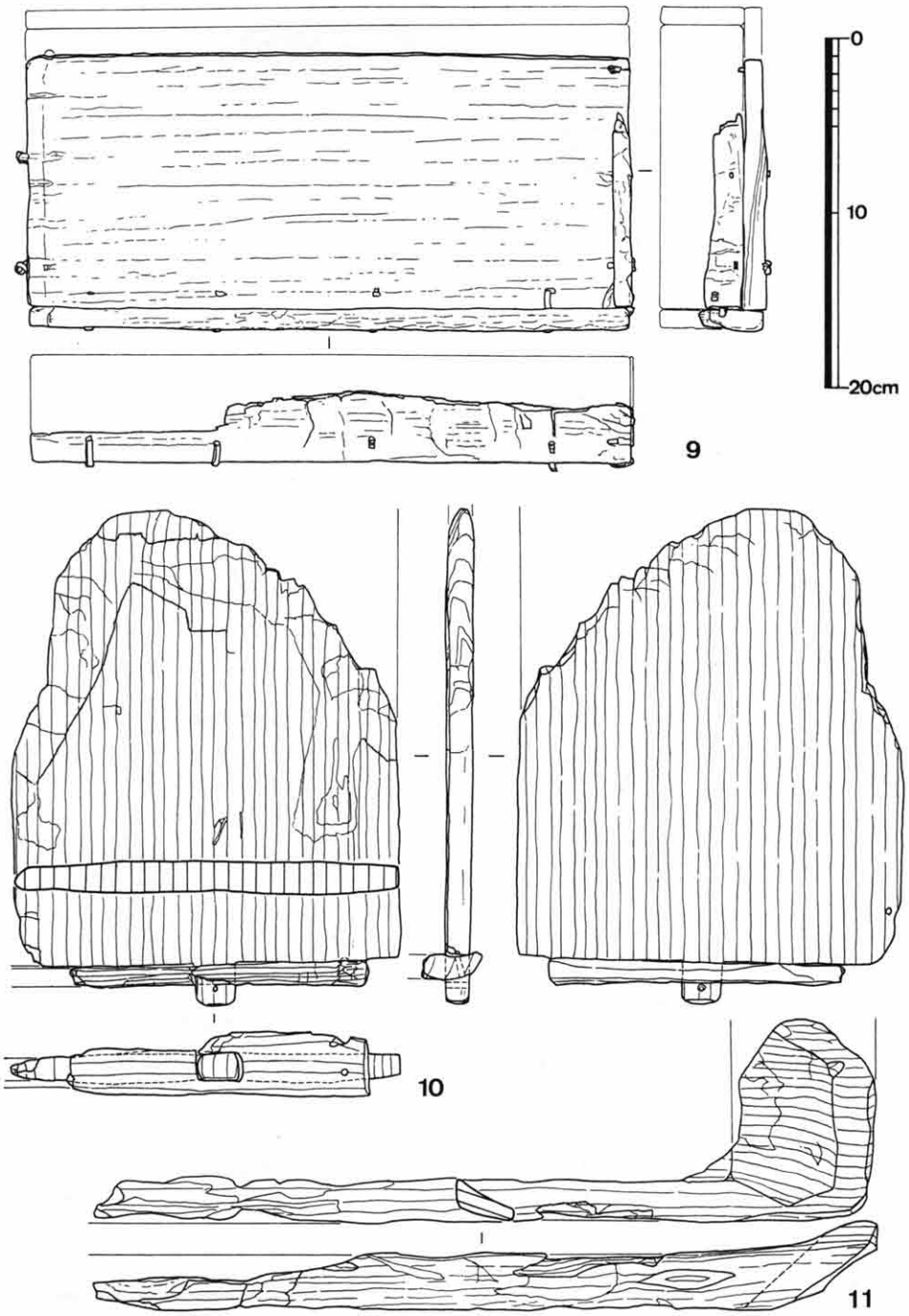
発火具　5・6・7は板材から割出した棒状の火鑽臼。5・6は板目，7は柾目である。5は長辺が2辺とも利用されている。孔の径は8.5～12mmを測り，一部貫通しているものもある。5はB5地区，7はB2地区出土。6は出土地不明。

容器　8は木裏面を上面にする横木取りの容器。短辺の一方はなく，内部の仕切りがその代わりをしている。B7地区出土。9は組合せの箱形木製品。長辺は4か所，短辺は3か所を樹皮によって底板と固定している。C8地区出土。10は枘による組合せを持つ木製品。箱の一部かと考えられる。底・側板とも柾目の板材。SX01出土。11は柾目の板材を刳り抜いた長方形の盤。底は一部しか残存していないが非常に薄い。D6地区出土。15は木表面を上面とする横木取りの槽。内部を深く刳り抜き，底・側板とも薄い。SD03出土。

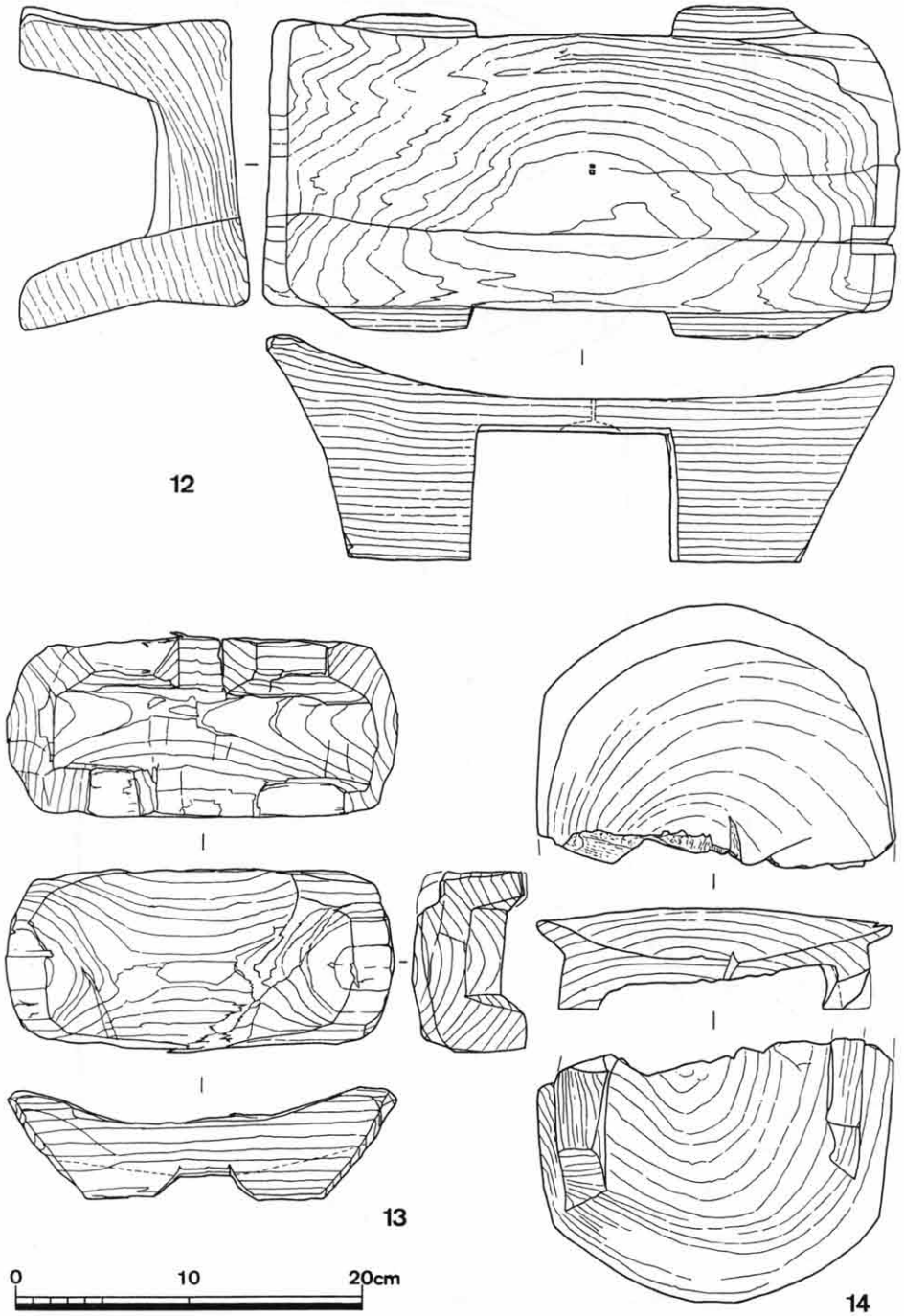
案　12は心をはずし，木表面を上面とする横木取りの案。高い脚部が四隅に配置され，上面は緩く湾曲する。縦方向に2つに割れており，SD03内の別地点より出土したものである。13は木裏面を上面とする横木取りの案で，形態は12と類似している。E8地区出土。



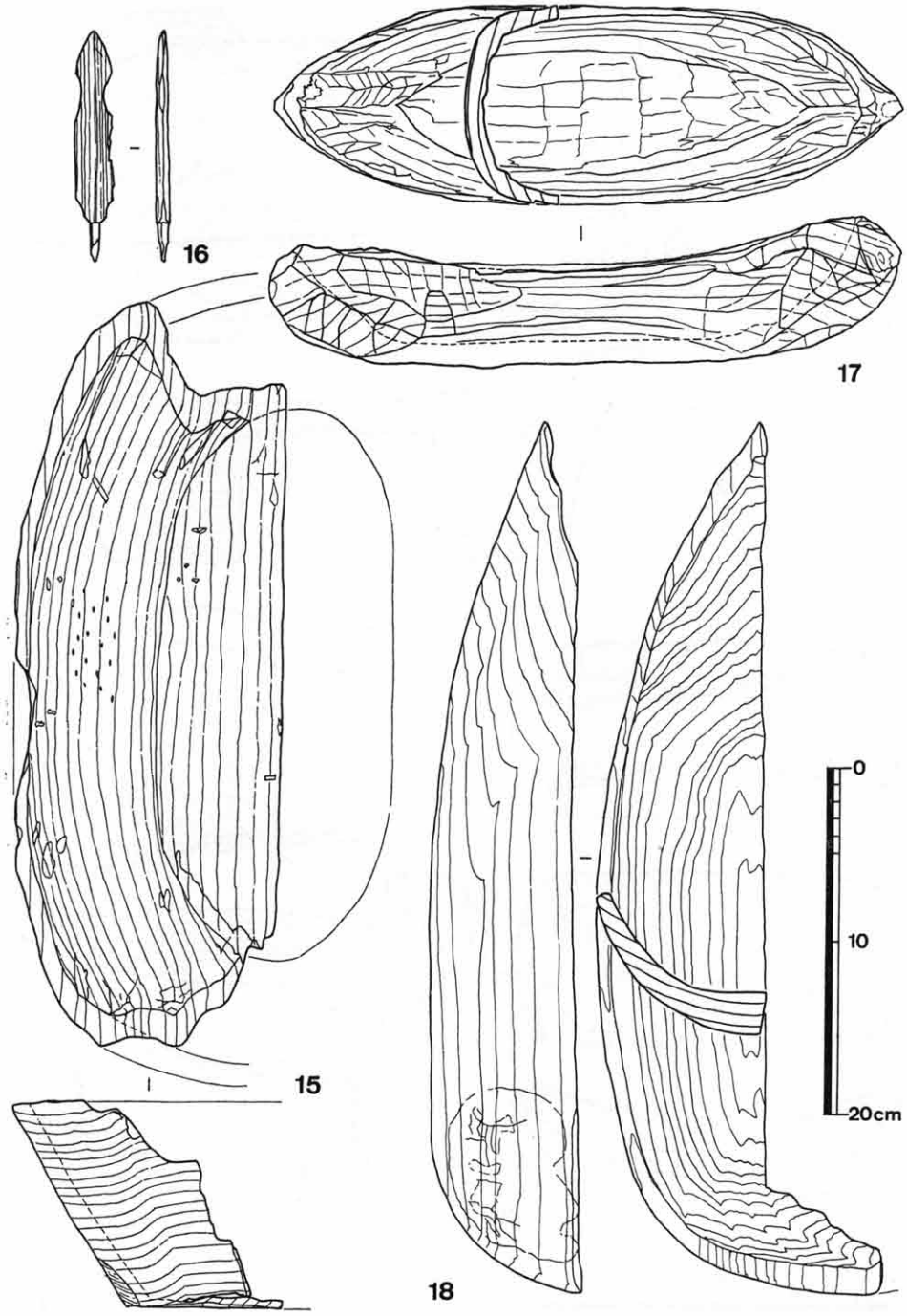
第6図　木製品実測図(1)



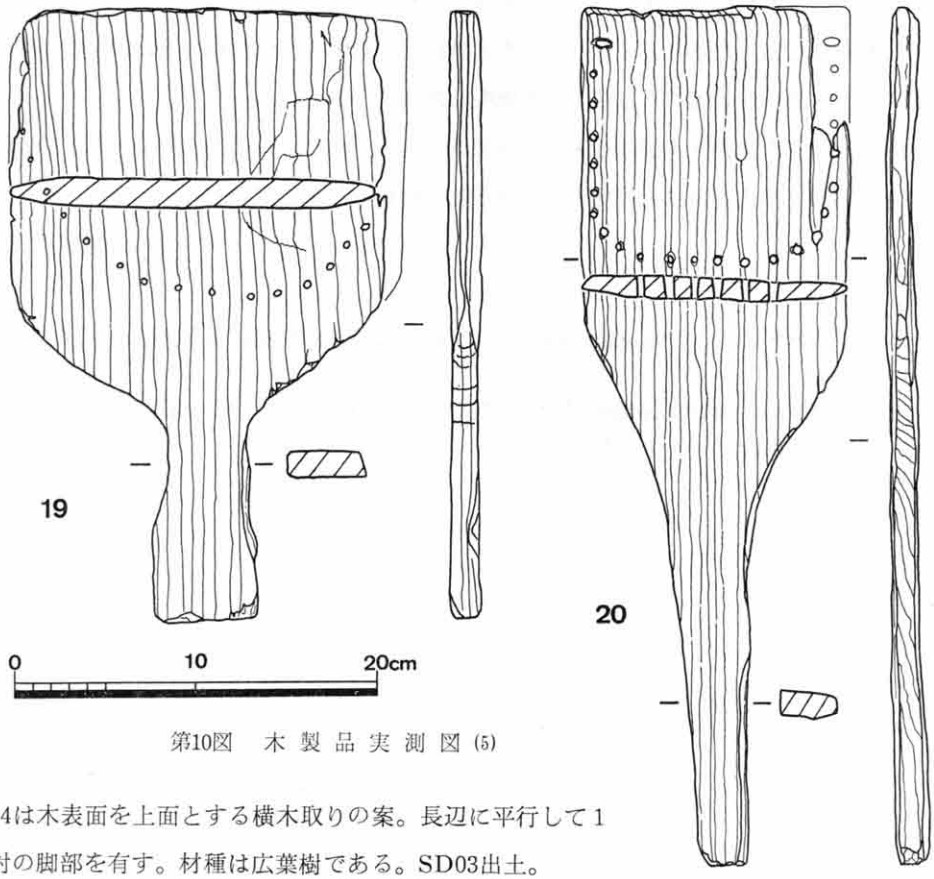
第7図　木製品実測図(2)



第8図　木製品実測図(3)



第9図　木製品実測図(4)



第10図　木製品実測図(5)

14は木表面を上面とする横木取りの案。長辺に平行して１対の脚部を有す。材種は広葉樹である。SD03出土。

祭祀具　16は鏃の模造木製品。長さ13.1cm・幅2.2cm・厚さ0.7cmと小型であるが，仕上げは丁寧で精巧な造りである。SD03出土。17は心をはずし，木裏面を上面にする横木取りの舟形木製品。船首には左右から穿たれ貫通した孔がある。外面は，はつり面をよくとどめている。Ｃ８地区出土。18は心をはずし木裏面を上面にする横木取りの舟形木製品。非常に丁寧な仕上げで，外面は，ゆるやかな曲線で構成されている。Ｃ６地区出土。

その他　19はラケット状，20は羽子板状の木製品。いずれも柾目の割板材を加工したもので，板面にはU字状に小孔が穿たれている。用途は不明。19はSD03，20はSX01出土。

5.　おわりに

今回の調査成果を以下簡略にまとめる。

①弥生時代末～古墳時代後期，及び平安時代の各時期の溝を検出した。これらはいずれも，北東→南西もしくは北→南の方向へ流れを持つ比較的小規模なもので，逐次上流からの土砂の流入によって埋没し，現地形を形成した。

② 遺物の出土量では，弥生時代末～古墳時代前期のものがもっとも多く，集落としての一つの最盛期であったと考えられる。土木工事により整備されたSD02・SD03はこの時期にあたり，集落内を貫流する水路として機能したものと推定される。

③大量に出土した土器・木製品とも，遺存状態が良好であり，特に弥生時代末から古墳時代前期にかけての土器群は丹後地方における基準資料となるものである。

（鍋田　勇＝当センター調査課調査員）

注1　平良泰久他「古殿遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概要』京都府教育委員会）1978

注2　戸原和人「古殿遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概要』第6冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983

注3　注1に同じ。

舞鶴市志高遺跡第７次の発掘調査

（A・B地区下層）

三　好　博　喜・肥　後　弘　幸

1.　はじめに

志高遺跡は由良川の自然堤防上に立地する複合集落遺跡である。今年度の調査は第７次調査にあたり，A・B地区(小字舟戸)とC地区(小字岡安)で調査を行っている。今回は，A地区の下層で検出した縄文時代の包含層及び遺物とB地区の下層で検出した弥生時代の遺構・遺物について紹介する。なお，本稿は，前号に掲載した分の補足である。(注1)

2.　A地区下層の調査

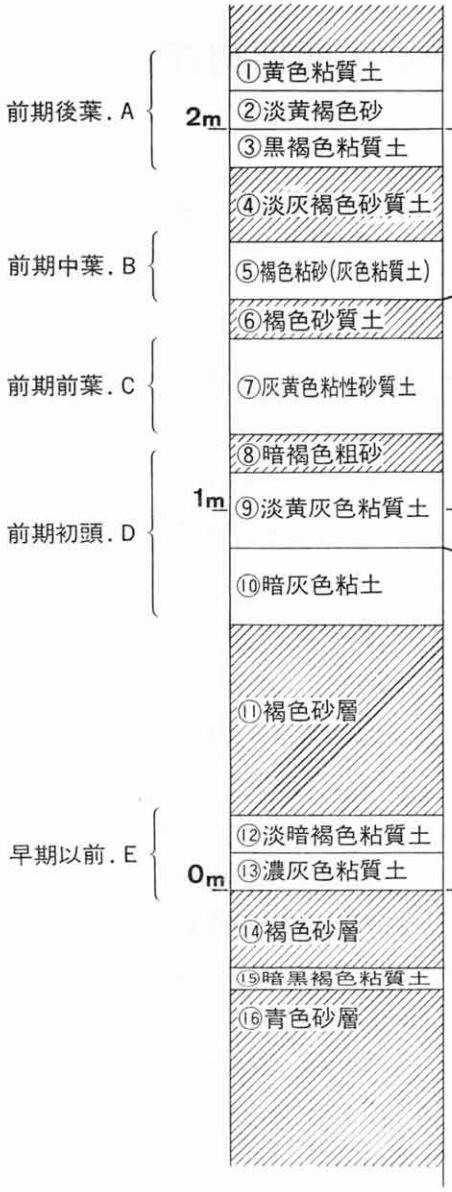
(1)はじめに　A地区に縄文時代の包含層の存在が確認されたのは，昭和60年度の春から夏にかけての時期に，付近の崖面で縄文時代前期の土器片が多数採集されたことによる。(注2)

由良川下流域では，河底の浚渫作業に伴い，早くから縄文土器が採集されていたものの，遺跡の実態は，長い間把握されずにきた。その後，舞鶴市桑飼下遺跡・加佐郡大江町三河宮の下遺跡の発掘調査が相次いで行われるに及んで，漸く縄文時代の集落立地の状況が明らかにされたのである。これらの遺跡は，いずれも後期を主体とする遺跡であった。これに対して，志高遺跡は，前期を主体とする遺跡という点で，注意すべき遺跡である。

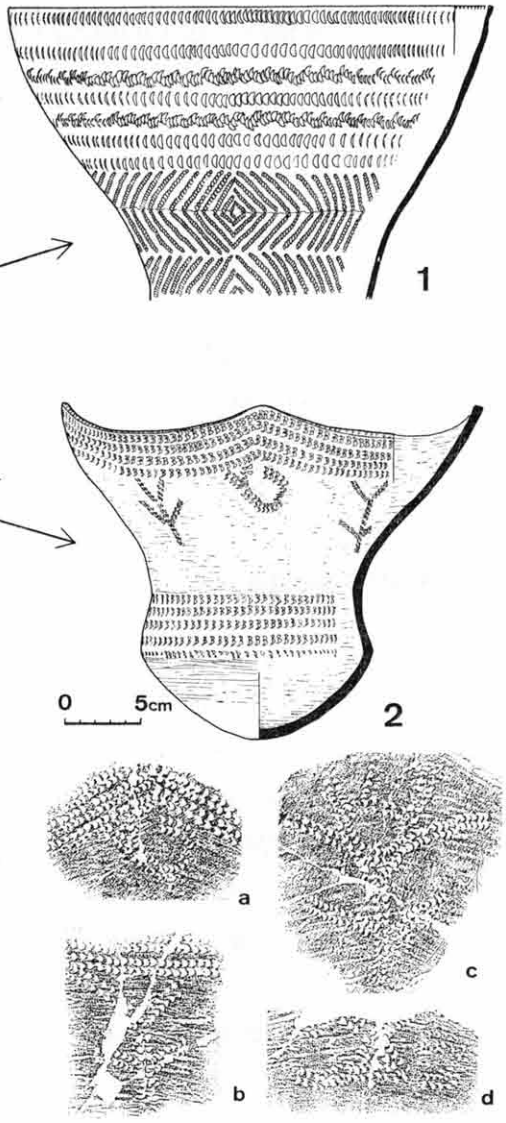
(2)層位(第１図)　弥生時代の包含層から２m近い無遺物層を挟んで，縄文時代の包含層となる。縄文時代の遺物を確認できた包含層は，標高2.2～０mの幅で，その間は13層に分層できる。粘性の強い砂質土が主体となっており，遺物の包含量の少ない粗い砂層の存在によって，大きく５層に大別される。この大別各層は，そのまま遺物の時期差を示す。

大別A層は，特殊凸帯文が付加された土器群が主体となる包含層で，前期後葉に位置づけられる。大別B層は，縄文を地文として爪形文を付加した土器群を包含する層で，前期中葉に比定される。大別C層は，条痕文を地文として爪形文が付加された土器群が主体となる包含層で，前期前葉に位置づけられる。大別D層は，条痕文を地文として３字状刺突文で加飾した土器群を包含する層で，前期初頭に比定できる。大別E層には，爪型文土器片が認められるため，早期以前の包含層と考えられ，草創期にまで遡る可能性もある。

(3)出土遺物(第２図)　今回の調査によって出土した縄文時代の遺物は，整理箱80箱に



第1図　土 層 柱 状 図



第2図　出 土 遺 物

のぼる。これらの遺物は，現在整理途上で，多くを語ることはできない。ここでは，個体として把握できたもののうち，特徴的な2点を紹介し，詳細は後の報告に譲ることとする。

1は，褐色粘砂層の上面に，伏位で置かれていた平口縁の深鉢形土器である。器形は，朝顔形を呈している。口縁部から胴部上半までは，右開きのC字形爪形文帯を7列巡らしている。このうち2列は波状に配したもので，文様帯を上下対称となるように構成してい

る。胴部下半には横位に羽状縄文を施している。口縁部内側には刻みをもつ。

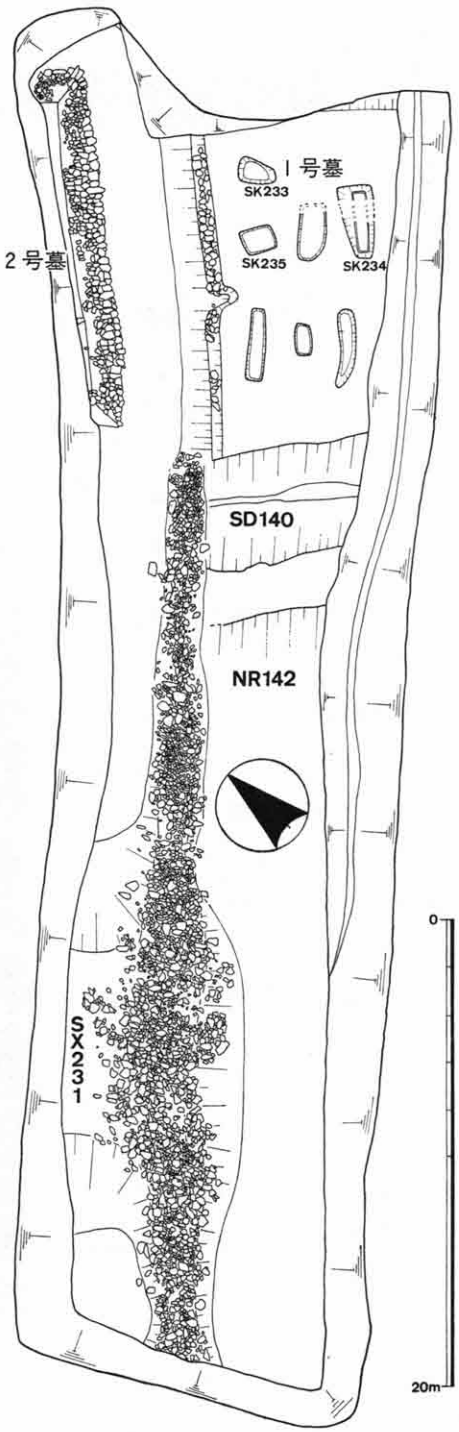
２は，暗灰色粘土層の上面から出土した鉢形土器である。器形は，やや尖りぎみの底から，張った胴部下半を経て，中央でくびれたのち，大きく外反する口縁部をもつ。口縁は波状を呈している。内外面に貝殻腹縁による条痕調整をもち，口縁部に４段，胴部下半に５段の３字状刺突が施文されている。口縁端部には刺突が加えられている。この土器に特徴的なのは，口縁部内外面に付加されたモチーフである。胴部外面の波頂部直下にはａパターンの，波頂部間の下にはｂパターンのモチーフを，それぞれ４か所ずつ付加している。口縁部内側には４か所のみにモチーフがみられ，向き合う波頂部ごとにｃパターン・ｄパターンのモチーフが付加されている。

（４）おわりに　Ａ地区下層の調査では，縄文時代前期の包含層を層位的におさえることができた。整理の進展に伴い，由良川下流域における前期土器群の様相が明確にされていくことと思われる。

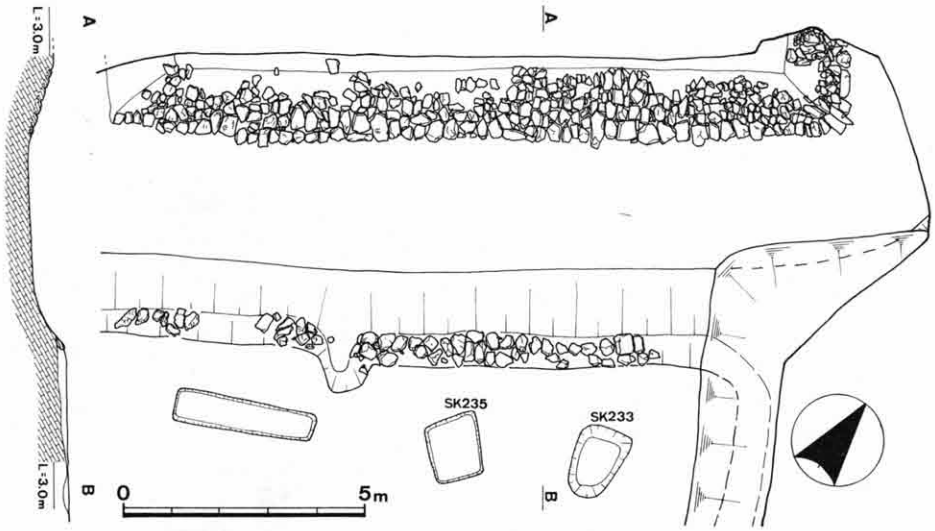
3.　Ｂ地区下層の調査

（１）はじめに　今回報告するのは，Ｂ地区下層で検出した弥生時代の貼り石墓を中心とする遺構及び遺物である。なお，写真等は前号を参照いただきたい。

（２）検出遺構（第３図・第４図）　検出した遺構は，溝状遺構（SD140）・自然流路跡（NR142）・貼り石のある方形周溝墓（１号墓



第３図　Ｂ地区弥生時代検出遺構



第4図　1号墓・2号墓貼り石部

・2号墓)・性格不明遺構(SX231)である。

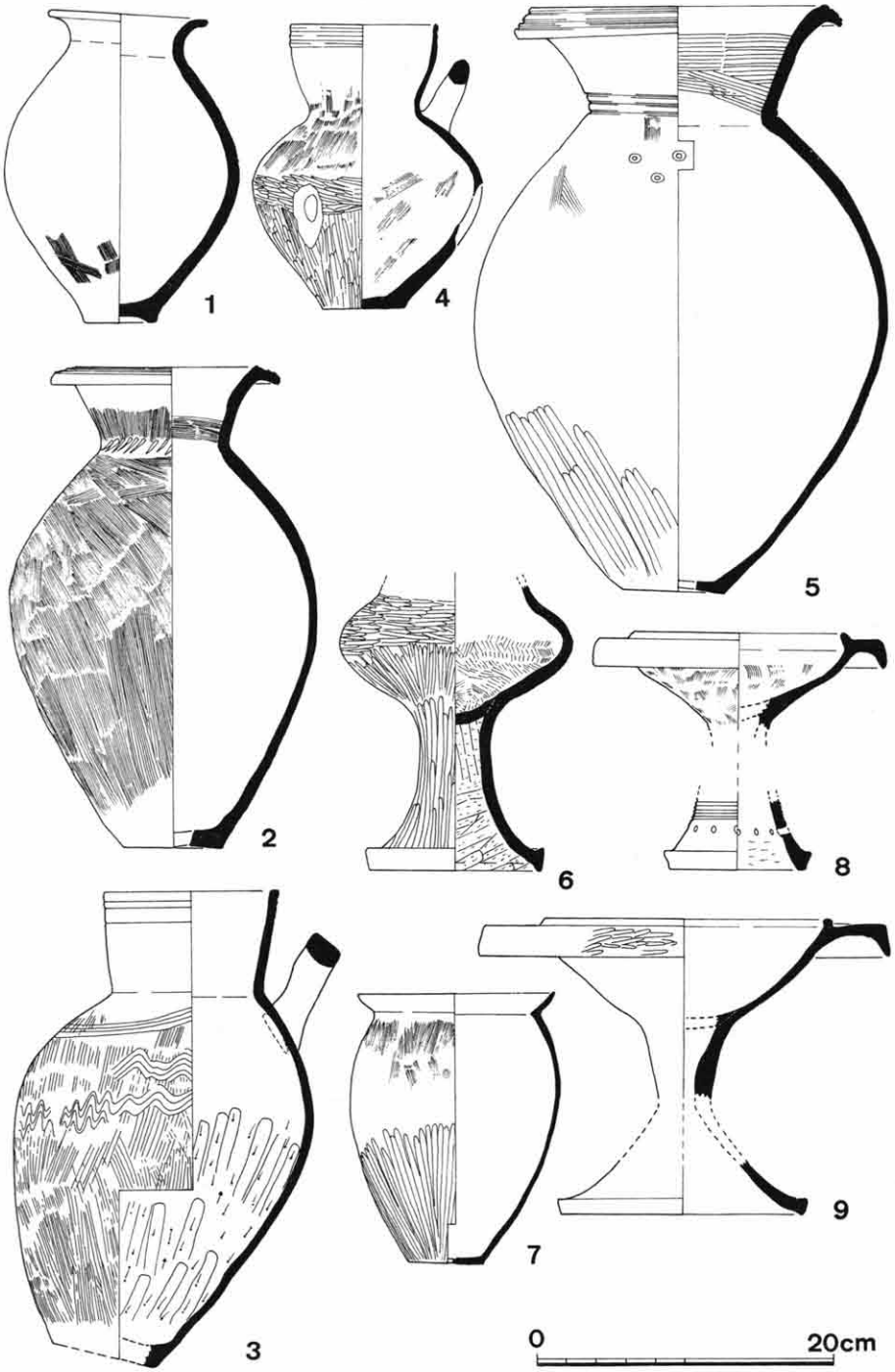
溝状遺構(SD140)は，幅5m・深さ1mを測るもので，その最下層から縄文時代後期の遺物と弥生時代中期後半の遺物が出土した。

なお，この遺構は第5次調査で検出されたSD40と同一のものである。

自然流路跡は，弥生時代中期後半から古墳時代前期にわたって機能していたもので，第6次調査で検出された旧河道の対岸部分にあたる。当時の由良川の分流か氾濫原である。

第5図　SX231

1号墓は北西側に6m以上を測る貼り石を持つ方形周溝墓で，貼り石の西隅は屈曲して終わる。南西側では墓域を区画する遺構は検出できなかった。トレンチ外に墳丘の続く様子は認められず，墳丘はトレンチ内に設けた排水溝内で終わるものと思われる。墳丘の規模は6m以上×約9mほどであったと思われる。墳丘には厚さ20cmほどの盛り土があり，4基の土坑が営ま



第６図　１　号　墓　出　土　遺　物

1•2•5；広口壺，3•4；水差し形土器，6；台付壺，7；甕，8•9；高杯
SK233；3•6•8•9　SK234；2•7　SK235；1　１号墓付近；4•5

れていた。SK234は埋葬施設である可能性が高い。SK233は浅い土坑で4個体の土器が供献されていた。

2号墓は南東辺と2隅及び周溝を検出した。南東辺の長さは，15.5mを測る。墳丘は盛り土を持たず，周溝を穿つだけである。貼り石は，主に人頭大の花崗岩を用い，平らな面を表にして，5～7段に敷き詰められている。貼り石が認められるのは，南東辺と北東辺で，南西辺では検出できなかった。貼り石の高さは，80cmを測る。

SX231は自然流路に向かって張り出す長い石組遺構である(第3図)。全長は，38m以上を測る。中央部と思われる幅広い部分は，当時の基盤層である灰色粘土を成形して，表面に石を貼って営まれたもので，さらにトレンチの西南側に広がる様子である。中央部の高さはその裾から1.2mを測る。

(3)出土遺物(第6図)　ここでは1号墓から出土した遺物について報告する。

出土した遺物はすべて弥生土器である。墳丘に伴う土坑および墳丘斜面から出土した。前者から出土した遺物は，すべてほぼ完形に復元できるものである。また，調査前に設置した排水溝からも1号墓に伴うと思われる完形の土器が出土している。墳丘盛り土内からも中期の弥生土器片が出土した。

1号墓に供献されていた土器は，壺6点・甕2点・高杯2点の10点である。壺には，広口壺3点と水差し形土器2点と台付き壺1点がある。口縁部・頸部に凹線文が施されたものがある。2と5は底部に，4は胴部に穿孔が見られる。ただし，4は注口土器の注口部の可能性もある。甕は，「く」の字口縁をもち，胴部上半にハケを下半に粗いヘラミガキを施すものである。7は底部に穿孔が見られる。高杯は，水平な口縁部に垂下した端部を持つものである。これらの土器群は，畿内第Ⅳ様式に並行するものと思われる。

(4)おわりに　B地区下層の調査では，丹後地域における墓制を考える上で貴重な資料を得た。貼り石墓の性格は，現在の段階では，資料の増加や2号墓の調査を待たざるを得ない。しかし，この時期は，畿内や東海において，爪生堂遺跡・加美遺跡・玉津田中遺跡や朝日遺跡で，多埋葬の大型の方形周溝墓が存在する。また，山陰においては，四隅突出墓の初現形態の多埋葬の台状墓が存在する。志高遺跡の貼り石墓もこれらと性格を同じくして出現するものであろう。

(三好博喜・肥後弘幸＝当センター調査課調査員)

注1　肥後弘幸「舞鶴市志高遺跡第7次の発掘調査(A・B地区)」(『京都府埋蔵文化財情報』第22号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986.12

注2　三好博喜「由良川下流域における縄文時代前期の土器群」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

栗ケ丘古墳群の発掘調査

引　原　茂　治

1. はじめに

綾部市街地がある由良川沿いの平地部から，久田山の低い丘陵地をへだてた北側に，吉美盆地と呼ばれる小さい盆地がある。栗ケ丘古墳群は，この盆地の北側の丘陵地に位置している。丘陵の上部縁辺・端部・頂部に，12基の古墳が散在している。

この丘陵地が，綾部工業団地の用地として造成されることになり，昭和60年度から古墳群の発掘調査を，当調査研究センターが実施している。昭和60年度には，1・3・5号墳の調査を行った。その結果，1号墳が古墳でないことがわかり，また3号墳の北西側に13号墳を確認した。

昭和61年度の調査は，7月2日から開始した。今年度は，2・4・6・7・8・9・11・12・13号墳および栗ケ丘東古墳の発掘調査，周辺部の試掘調査を行った。また，3号墳の墳丘断ち割り段階で確認された埋葬主体部についても発掘調査することとした。

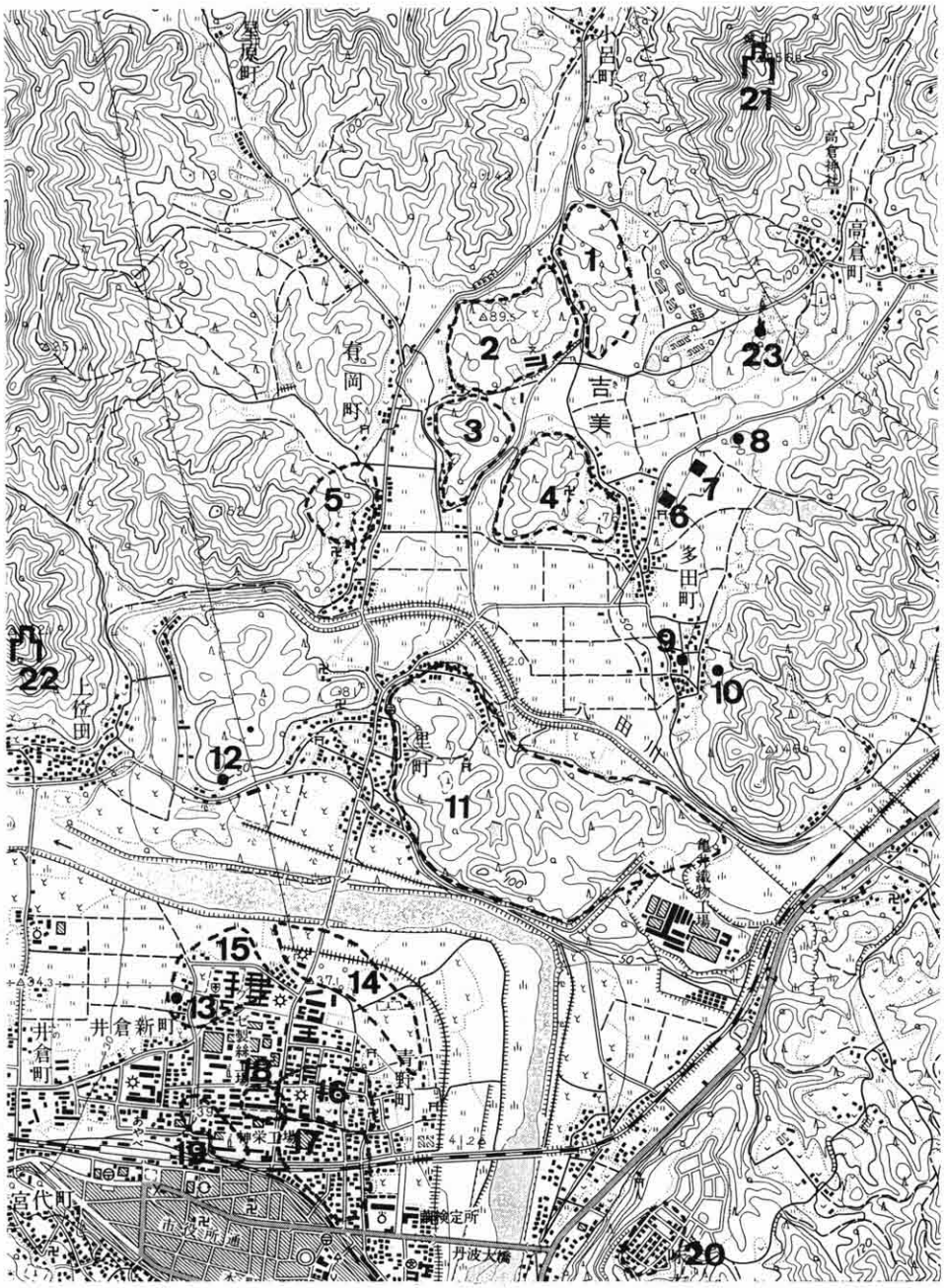
2. 調査概要

栗ケ丘古墳群を構成する古墳は，いずれも木棺直葬の円墳である。今年度調査した古墳の掘削前の墳丘径や主体部の規模については，付表のとおりである。以下，各古墳について，若干の説明を加えるにとどめる。なお，副葬品は須恵器・土師器などの土器類と，刀・鏃・刀子などの鉄製品が主たるものである。

2号墳は，丘陵稜部から南西側斜面にかけて墳丘が築かれており，稜部側に墳丘をほぼ半周する周溝をもつ。副葬品としては，主体部掘形上部西隅付近から須恵器提瓶・土師器杯各1点が出土したのみで，棺内の副葬品は無い。6世紀中葉頃の築造か。

4号墳は，丘陵先端部に位置する。深い掘り切りによって，墳丘を尾根から切り離している。墳頂部は，盗掘で攪乱され，現時点では主体部は確認できていない。墳頂周辺部から供献用とみられる多くの土器が出土した。6世紀前半頃の築造とみられる。

6号墳は，他の古墳よりやや小規模である。墳丘をほぼ半周する浅い周溝をもつ。棺底部から碧玉製管玉5点が出土した。この古墳群のなかで，管玉を副葬しているのは，この古墳だけである。古墳築造時期は，須恵器杯蓋の形式から，6世紀後半頃とみられる。



第1図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

1. 栗ケ丘古墳群　2. 田坂野古墳群　3. 石井根古墳群　4. 坊主山古墳群　5. 二ノ宮古墳群　6. 聖塚古墳　7. 菖蒲塚古墳　8. 上多田古墳　9. 後路古墳　10. キツネ塚古墳　11. 久田山古墳群・久田山遺跡　12. 里古墳　13. 青野大塚古墳　14. 青野遺跡　15. 青野西遺跡　16. 青野南遺跡　17. 綾中遺跡・綾中廃寺　18. 西町北大坪遺跡　19. 西町遺跡　20. 味方平古墳群　21. 高倉城跡　22. 位田城跡　23. 栗ケ丘東古墳

付表　栗ケ丘古墳群一覧表

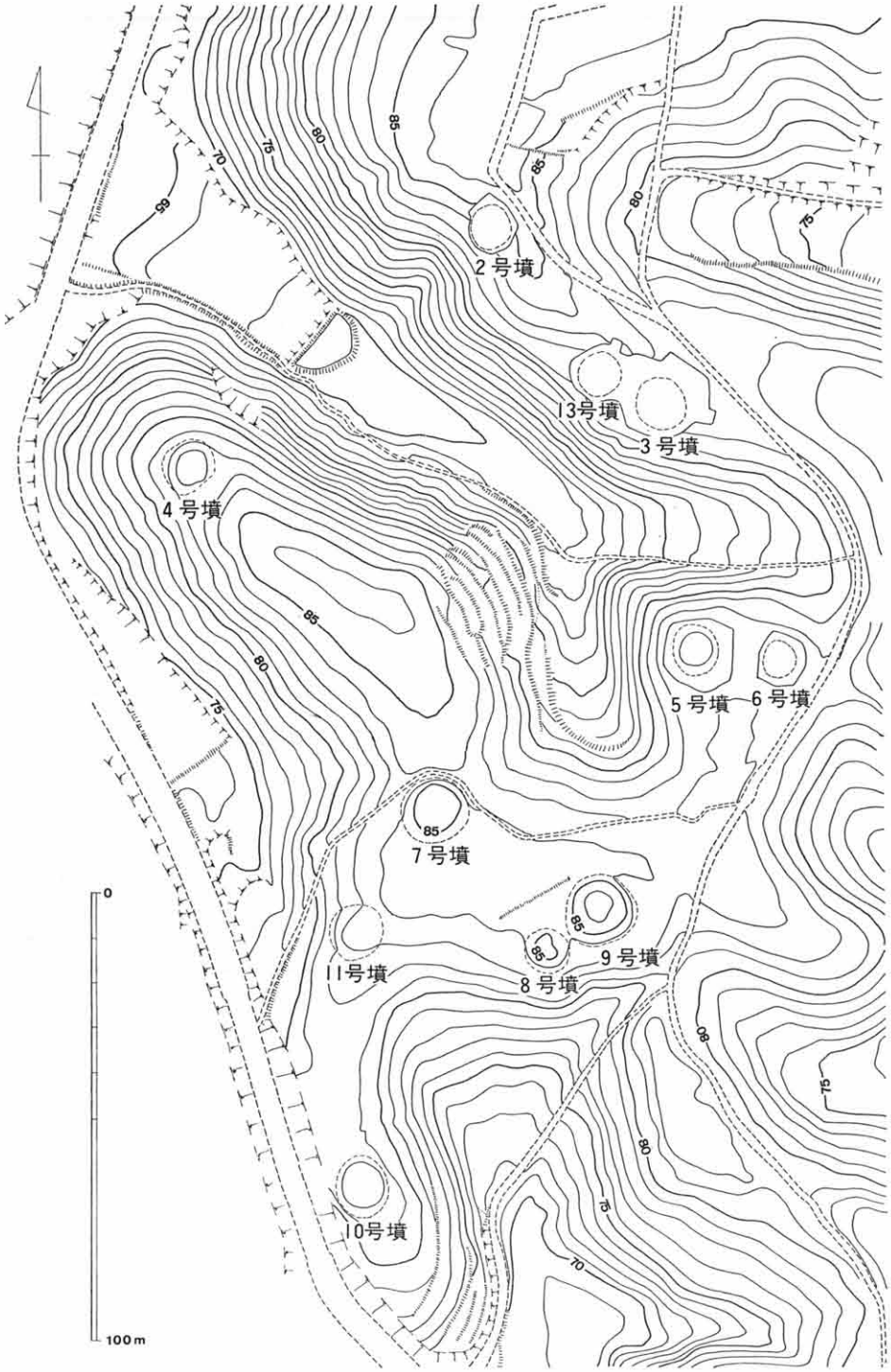
号	墳形	墳丘径(m)	主体部	主体部数	主体部規模(m) 墓坑	主体部規模(m) 棺
2号墳	円	9	木棺直葬	1	3.5×1.5	2.3×0.6
3号墳	円	13	木棺直葬	3	(第3主体部) 3.1×1.8	(第3主体部) 2.1×0.7
4号墳	円	13	木棺直葬			
6号墳	円	8.5	木棺直葬	1	3.5×1.6	2.6×0.9
7号墳	円	15	木棺直葬	2	(第1主体部) 5.2×1.8 (第2主体部) 3.8×1.6	(第1主体部) 3.5×0.6 (第2主体部) 2.7×0.8
8号墳	円	10	木棺直葬	1	3.2×2	2.5×0.7
9号墳	円	16	木棺直葬	2	(第1主体部) 5.8×2 (第2主体部) 3.8×1.4	(第1主体部) 3.6×0.9 (第2主体部) 2.5×0.6
11号墳	円	11	木棺直葬	2	(第1主体部) 4.7×1.6 (第2主体部) 5.5×1.2	(第1主体部) 3.9×0.8 (第2主体部) 不明
12号墳	円	13	木棺直葬	1	5.5×1.9	3.5×0.8
13号墳	円	9	木棺直葬	2	(第1主体部) 2.8×2.1 (第2主体部)	(第1主体部) 1.8×0.7 (第2主体部)

7号墳は，比較的大規模な古墳である。墳丘を完周する周溝をもつ。周溝南側底部から供献用とみられる須恵器杯蓋・杯身・瑞・甕が並んだ状態で出土した。6世紀前半頃の築造とみられる。

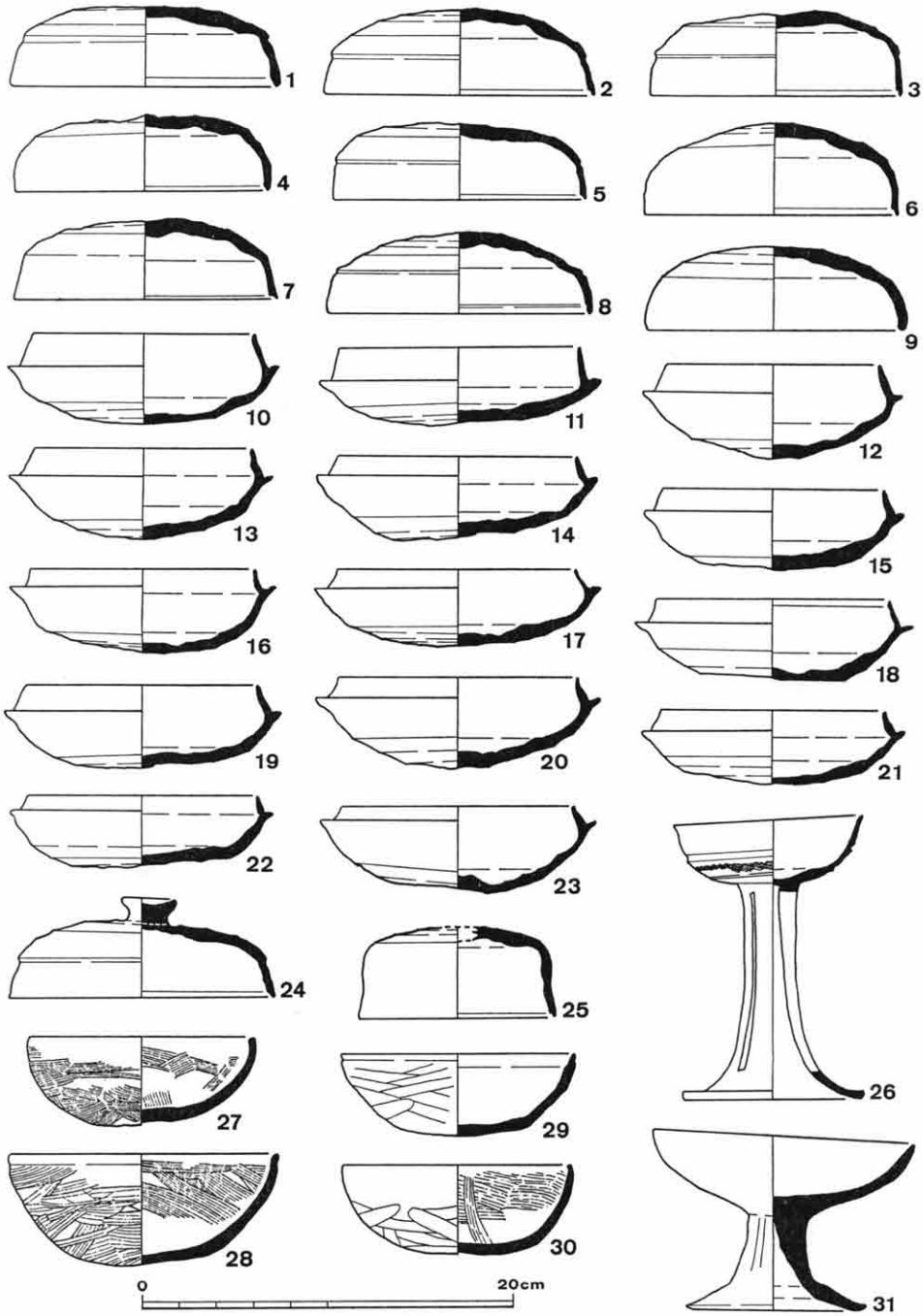
8号墳は，9号墳に隣接して築かれている。墳丘を半周する周溝をもつ。棺上に置かれていたとみられる鐔付の鉄刀が出土している。6世紀中葉頃の築造とみられる。

9号墳は，古墳群中最大規模をもつ。墳丘をほぼ完周する周溝をもつ。南側に設けられた第2主体部には，棺に塗られていたとみられる赤色顔料が残り，土製丸玉が251点以上出土した。6世紀前半頃の築造とみられる。

11号墳は，墳丘を半周する周溝をもつ。主体部からは副葬品が比較的多く出土した。ま



第2図　地　形　図



第3図　出 土 遺 物 実 測 図

30；2号墳，7•19•20•21•22•24；3号墳，9；6号墳，3•4•5•6•12•13•14•15•16•17•18•25•27•28•31；7号墳，1•2•10•11•26•29；9号墳，8•23；13号墳

た，2基の主体部からは，鉄斧がそれぞれ1点ずつ出土した。6世紀前半頃の築造とみられる。

12号墳は，古墳群の南端に位置する。墳丘をほぼ完周する周溝をもつ。主体部上から，供献用とみられる土器が，割れた状態で出土した。棺内の副葬品はない。6世紀前半から中葉にかけての頃の築造とみられる。

13号墳は，3号墳の北西側に位置する。墳丘を半周する周溝をもつ。2基の主体部をもつが，2基目の主体部を設けるときに墳丘を拡張したことがうかがえる。6世紀中葉頃の築造とみられる。

栗ケ丘東古墳は，栗ケ丘古墳群の南東側約600mの丘陵部に位置する。顕著な墳丘状の盛り上りは認められない。トレンチを設定し掘削したが，主体部・周溝などはなく，遺物も出土しなかった。従って，古墳ではないものと判断する。

また，栗ケ丘古墳群周辺の丘陵稜部にもトレンチを設定して掘削したが，古墳やその他の遺構はなかった。

3. ま と め

この古墳群を構成する古墳は，すべて6世紀のうちに築造されている。また，埋葬主体部はすべて木棺直葬である。綾部市館町の高谷古墳群では，5世紀末頃に木棺直葬墳がつくられはじめ，6世紀中葉以降，横穴式石室を埋葬主体部とする古墳が出現し，7世紀に至るまで古墳が造り続けられる。このような例に較べると，栗ケ丘古墳群は，比較的短期間に形成された古墳群といえる。また，何故6世紀後半段階で古墳築造が終わるのか，横穴式石室が採用されないのかなど，さまざまな問題点がある。

まだ，これから検討しなければならない問題点を残しているが，一応，本稿の筆を置きたい。

（引原茂治＝当センター調査課調査員）

＜参考文献＞

『綾部市文化財調査報告書-1』綾部市教育委員会　1973

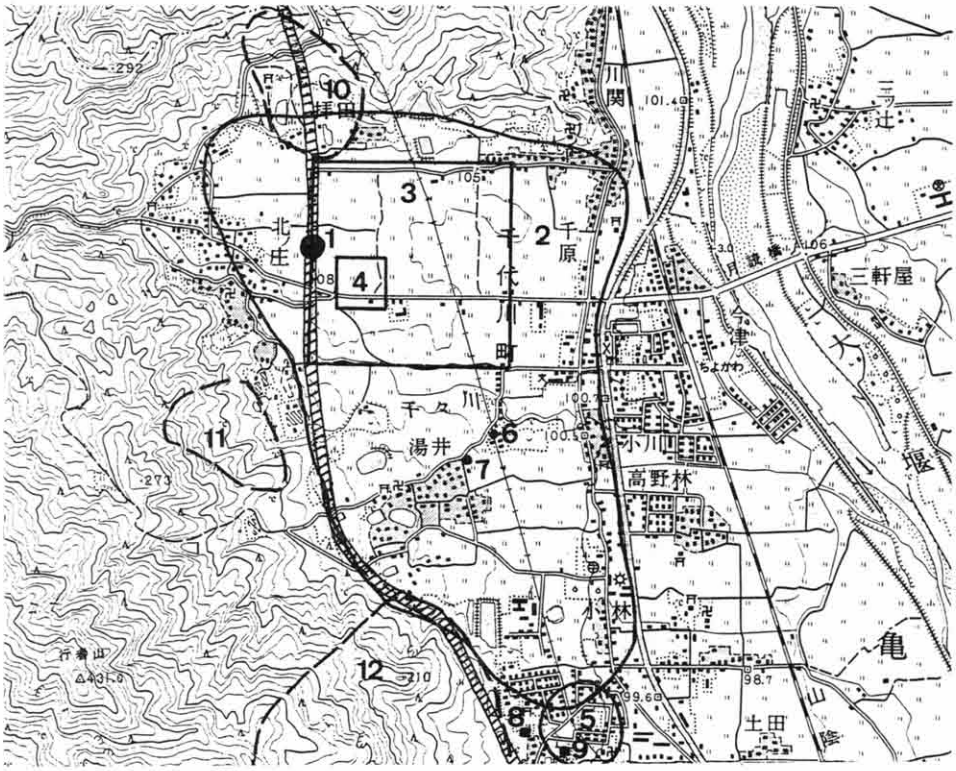
伊野近富「27. 栗ケ丘古墳群」（『京都府埋蔵文化財情報』　第20号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1986

千代川遺跡第12次の発掘調査

森下　衛

1. はじめに

千代川遺跡は，亀岡市千代川町に所在し，亀岡盆地を南北に貫流する大堰川の西岸，行者山の北東麓に形成された扇状地上に立地する。過去に実施された調査成果によると，縄文時代後期から中・近世にわたる遺構・遺物が検出され，その範囲も東西約1.2km・南北約1.6kmという広大なものであることが確認されている。また，歴史地理学[注1]や近年の発掘調査の成果などからは，その北半部に丹波国府推定地や桑寺廃寺を含み込んでいる可能性



第1図　調査地位置図

1. 調査地　2. 千代川遺跡　3. 丹波国府推定地　4. 桑寺廃寺　5. 馬場ケ崎遺跡　6. 丸塚古墳　7. 丸塚西古墳　8・9. 馬場ケ崎1・2号墳　10. 拝田古墳群　11. 北ノ庄古墳群　12. 小金岐古墳群

斜線部はバイパス路線

が指摘されている。

さて，今回の発掘調査は国道９号バイパスの建設に先立って実施したものである。バイパス予定路線は，亀岡盆地の西辺部をなす龍ケ尾山～行者山の東麓を北上して千代川町に至る。そして，千代川遺跡の広がる水田地帯の西寄りの部分を南北に縦断し，拝田丘陵をぬけて八木・園部町方面へ向かうように計画されている。そのため，京都府教育委員会や当調査研究センターでは，国道９号バイパス関係遺跡の一つとして，ここ数年来千代川遺跡の発掘調査を継続して行ってきた。特に，昭和59年度以降は，国府推定域の西辺部を調査の対象としており，国府跡に関する何等かの遺構・遺物が出土するものと大きな期待がかけられてきた。

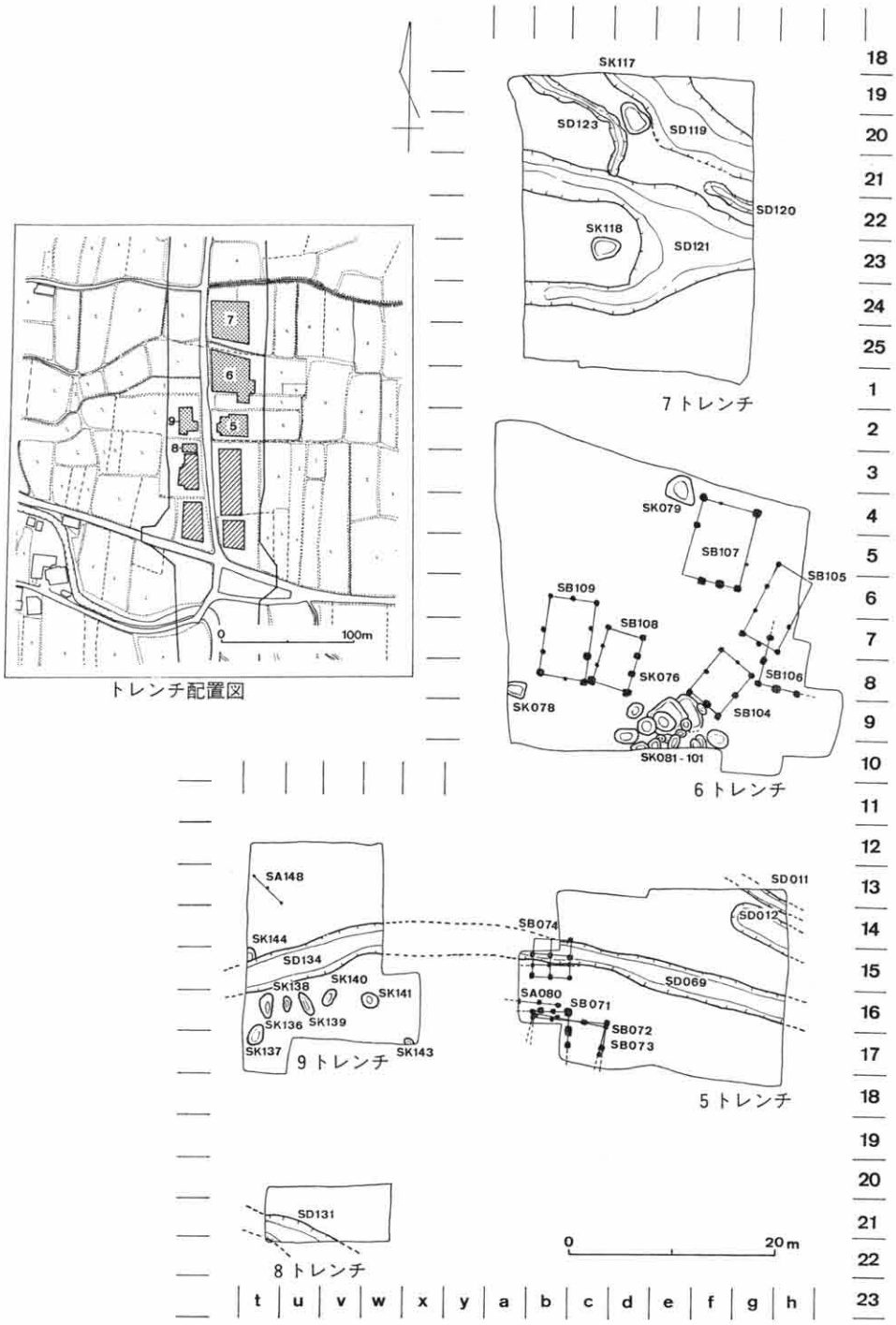
2.　調査の概要

（１）調査経過　調査は，９号バイパス予定路線のうち，約4,000m²を対象として行った。対象地内に５～９の５か所のトレンチを入れ，約2,400m²を掘削した。なお，調査には，昭和61年５月19日から昭和62年１月26日までの期間を要した。

調査地内の基本的な層序は，耕作土・淡灰色砂質土・灰褐色土・黒褐色土・黄灰色ないしは黄褐色土の順に認められた。ただ，各トレンチ間では，地形の凹凸による土地利用の相異や土層の堆積状況の違いが顕著に認められた。特に，ここでは６トレンチ部分が西から東へ向かってのびる舌状の微高地状を呈し，その南・北両側の５・７トレンチ部分が凹地状をなしているため，両者では明らかに土層の堆積状況が異なっていた。

（２）検出遺構　検出遺構には，縄文時代後期から中世・近世に属すと考えられるものが認められた。以下，これらを便宜上，古墳時代以前・奈良～平安時代・中世以降の３時期に分け，その概要を報告したい。(注2)

①古墳時代以前　この時期の遺構には，溝(SD069・SD119～SD121・SD123・SD131・SD134)，土坑(SK081～SK101・SK117・SK118・SK136～SK143)などがある。大まかに見て，調査地の南半部に弥生時代後期に属するもの，北半部には古墳時代に属するものが分布する。南半部の弥生時代後期の遺構は，幅2.0～3.0m・深さ約0.7mを測る溝２条(SD069；SD134と同一の遺構と考えている・SD131)と土坑(SK136～SK143)である。昨年度の第10次調査では，同時期の竪穴式住居跡を本調査区の南側で確認しており，これらがその住居跡に代表される集落跡の北限部分に位置する遺構と考えられる。(注3)北半部の古墳時代の遺構には，布留式並行期の土器が出土した自然流路(SD121)，後期の溝(SD119・SD120)・土坑(SK117・SK118・SK081～SK101)がある。６トレンチの後期の土坑群(SK081～SK101)は，規模・形態は様々であったが，ほぼ同一地点に約20基が重複してい


トレンチ配置図
7
6
5
9
8
0
100m
7トレンチ
SK117
SD123
SD119
SD120
SK118
SD121
6トレンチ
SK079
SB107
SB105
SB109
SB108
SK076
SB106
SK078
SB104
SK081-101
9トレンチ
SA148
SK144
SD134
SK138
SK140
SK141
SK136
SK139
SK137
SK143
5トレンチ
SD011
SD012
SB074
SD069
SA080
SB071
SB072
SB073
8トレンチ
SD131
0
20m
18
19
20
21
22
23
24
25
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
t
u
v
w
x
y
a
b
c
d
e
f
g
h

第2図　遺構配置図

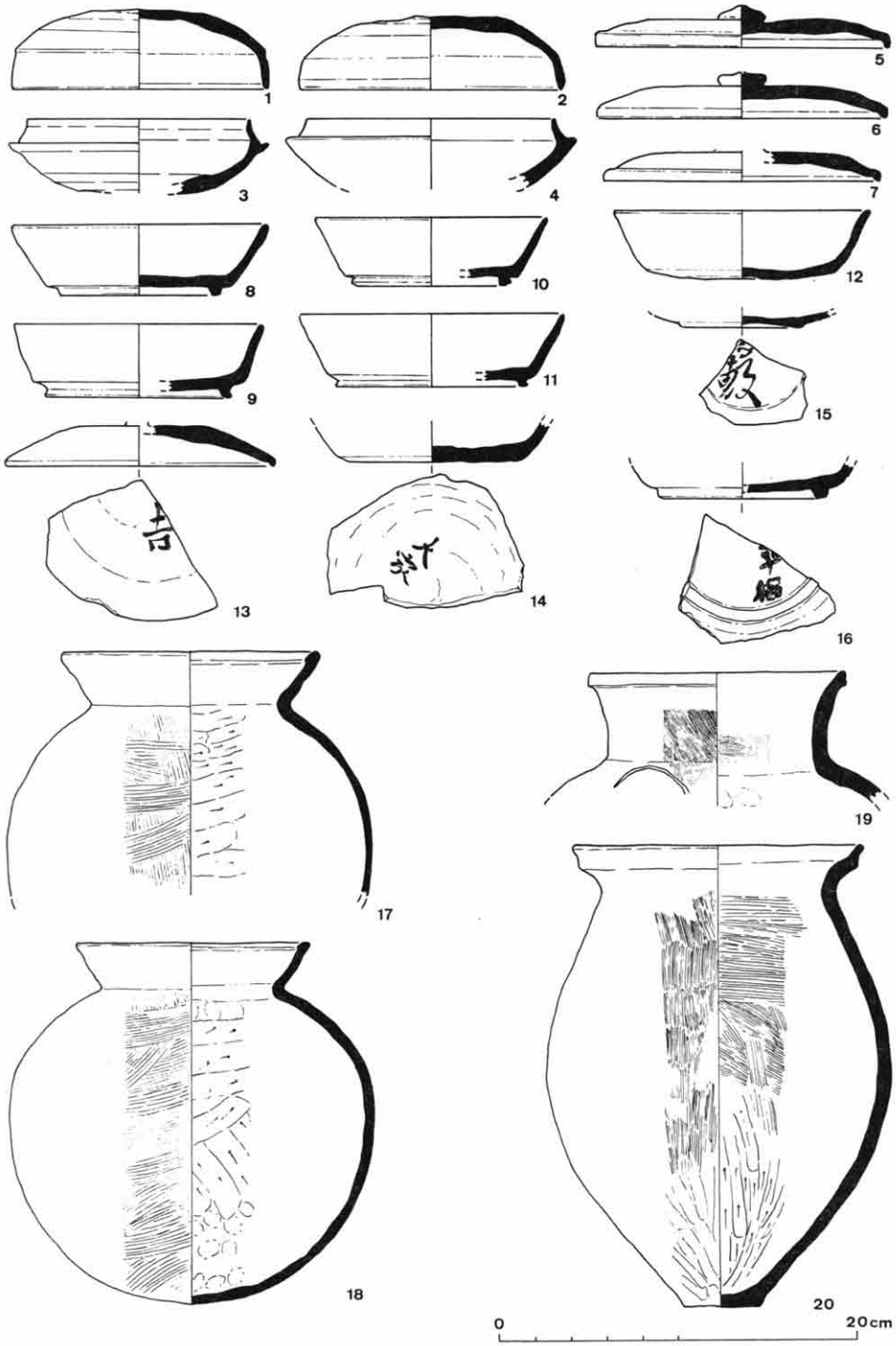
た。各土坑内からは多くの土器が出土し，中には滑石製の双孔円板や大型の須恵器杯身が認められたことから，祭祀的な色彩が濃い遺構ではないかと考えている。なお，これら遺構の分布状況から，当時の集落跡の存在する部分として地形的に安定した6トレンチ部分が推測されたが，住居跡を検出することはできなかった。しかし，各遺構から出土した多くの土器に加え，SD119・SD121からは建築材と考えられる木製品も出土しており，近傍に当時の集落跡が存在することは確実であろうと思われた。以上のほか，SD123内からは，縄文時代後期の土器片が出土している。

②奈良・平安時代　この時代の遺構には，掘立柱建物跡・柵列・素掘り溝・土坑がある。うち，掘立柱建物跡は，その主軸の方向から大きく4～5時期に分けうる。主軸が真北から東へ約25°～35°振るもの(第1段階)，同じく約10°振るもの(第2段階)，約5°振るもの(第3段階)，ほぼ真北を向くもの(第4段階)である。各時期については，出土遺物の細かな検討は行えていないが，いずれもおおよそ8世紀前半頃から9世紀初め頃の範囲内で把握できると考えている。とすれば，これら遺跡の方向の変化は，旧地形の傾斜に沿った遺構の示す方向から，現在の水田畦畔にみる条里地割り(国府推定説では条坊地割り)の示す方向への変化といえ，それが奈良時代頃まで遡る可能性の高いことを示していると思われる。すなわち，国府推定説に従うならば，その推定域内で地割りの施行を示す可能性の高い遺構を検出したのである。しかし，これら遺構が，どの程度国府推定域内の他の諸遺構を反映しているのか，また，規模などの面から考えて実際国府に関連するものなのかという点など，今後充分検討すべき問題は多い。特に，掘立柱建物跡に加え，その周囲では同時期のものと考えられる素掘り溝群を検出している。これが耕作に伴う遺構とすれば，今回検出の掘立柱建物跡を中心とする遺構群は一般集落の様相を呈してくるのである。

③中・近世　今回は図示しえなかったが，以上の遺構のほかに，中・近世に属すと思われる遺構(素掘り溝・柱穴など)も確認している。主に，水田耕作に伴うと考えられる素掘り溝が多く，幅約30cm・深さ約10cmを測る小規模なものである。本調査区一帯は，中世以

掘立柱建物跡(奈良時代)一覧表

遺構番号	規　　模(東西×南北)	段階
SB071	2間(2.6m)以上×2間(3.5m)以上	4
SB072	3間(7.3m)以上×1間(2.8m)以上	2
SB073	3間(6.9m)以上×1間(2.4m)以上	3
SB074	2間(3.8m)×2間(3.8m)	4
SB104	2間(3.7m)×2間(5.2m)	1
SB105	2間(3.9m)×3間(7.6m)	1
SB106	2間(4.0m)以上×2間(4.7m)以上	2
SB107	3間(5.5m)×3間(7.6m)	2
SB108	1間(3.6m)×3間(5.6m)	2
SB109	2間(4.6m)×3間(7.9m)	3



第3図　出土遺物実測図

降には耕作地化され，現在に至ったものと考えられた。

（3）出土遺物　出土遺物は，全体で整理箱約120箱に及んだ。弥生時代後期の遺物は，SD069・SD131を中心として後期後葉に属すものが整理箱約10箱分出土した。古墳時代の遺物は，SD121を中心に布留式併行期の遺物が整理箱約35箱，6トレンチの土坑群を中心に後期に属す遺物が約25箱分出土した。特に，SD121内からは，建築材を含む多くの木製品が出土している。また，6トレンチの土坑群出土品には，6世紀中葉～6世紀末頃の須恵器・土師器をはじめ滑石製の双孔円板などが認められた。奈良・平安時代の遺物は，遺構に伴うものは少ないものの，主に調査区西半部（5～7トレンチ）の包含層（黒褐色土）中から須恵器・土師器片が整理箱約40箱分出土した。中には，「大家」・「平福」・「吉」・「敷」などと書かれた墨書土器が10点，緑釉陶器が5点認められた。8世紀中葉～後半に属すと考えられるものが主体を占める。中・近世に属す遺物は，整理箱約5箱分出土した。瓦器椀・瓦質羽釜・土師皿などが主体を占め，細片となったものが多い。以上のほか，縄文時代後期の土器片が5・7トレンチの古墳時代～平安時代の遺物包含層（黒灰色土・黒褐色土）中から10数点出土している。

3. ま と め

以上が今回の調査成果の概要である。うち，最も大きな成果といえるのは，やはり掘立柱建物跡をはじめとする奈良・平安時代の諸遺構を検出したことであろう。掘立柱建物跡については，規模や素掘り溝群の存在などの点から，当地域に推定されている国府跡に関連する施設とするにはやや疑問が残る。しかし，周囲から出土した墨書土器や緑釉陶器などの出土遺物は，これらを単なる集落跡とするより官衙的な色彩が濃いものであることを示しているとも考えられた。また，建物跡などの方向の変化も，国府に伴う地割りの施行を示す可能性が高いものと把握しうる。この点，今後の充分な検討が必要と思われ，今回の調査は，非常に貴重な成果を得るとともに，今後に大きな課題を残したといえるだろう。また，遺物の出土状況や各遺構の性格などからみて，縄文時代後期・弥生時代後期・古墳時代それぞれの時期の集落跡も近傍に存在するであろうことが推察された。うち，弥生時代後期の集落跡は，昨年度の第10次調査の成果と考え合わせ，本調査区の西南方向に展開していることは確実と思われる。

（森下　衛＝当センター調査課調査員）

注1　木下　良「丹波国府址」（『古代文化』16-2）1966

注2　遺構番号については，調査終了時に整理したため中間報告資料とは一致していない。

注3　森下　衛・西岸秀文「千代川遺跡第10次の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第19号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1986

瓦谷遺跡の発掘調査

（瓦谷20番地地区）

戸原和人・伊賀高弘

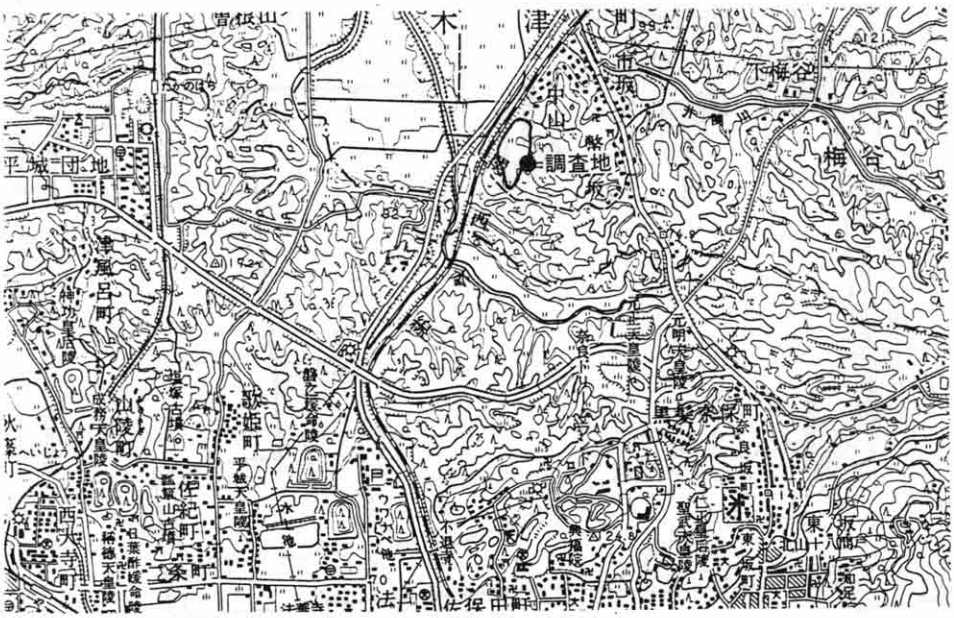
1. はじめに

この調査は，関西・文化学術研究都市の開発に先立つ木津東部地区での事前調査である。

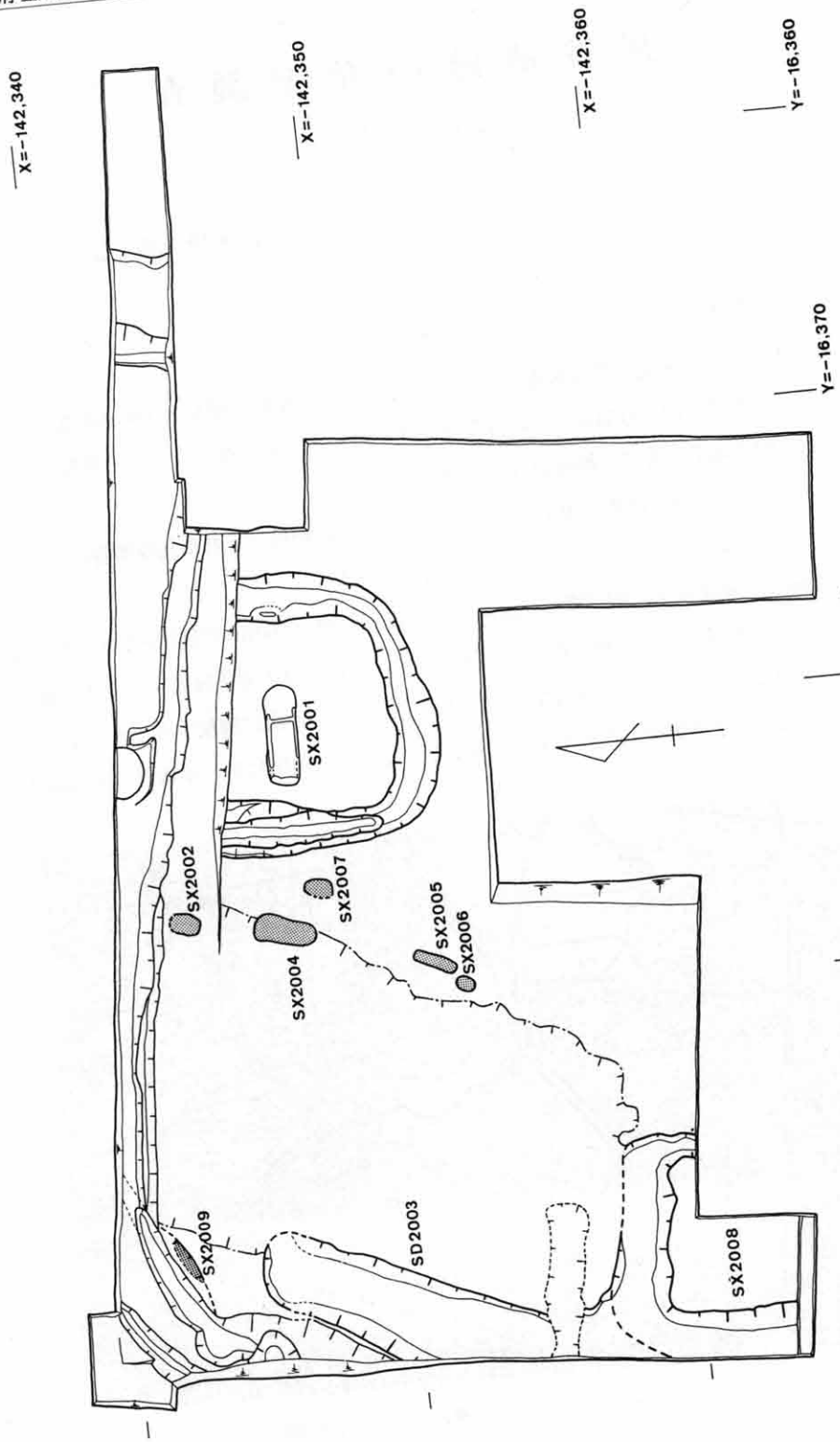
調査は，昭和59年度より開始され，今年度は３年目にあたる。現在までに遺物散布地８か所と古墳推定地７か所での調査を行っている。

ここでは，瓦谷遺跡の調査の中で，まとまりのある遺跡が確認された瓦谷20番地での調査について報告したい。

瓦谷遺跡は，相楽郡木津町の東部丘陵南西に位置し，標高100mの丘陵から西に開く谷部と小丘陵の先端付近，その裾に広がる扇状地にあたり，これまで土師器・須恵器の散布が知られていた。周辺には，瓦谷古墳や西山塚古墳が所在し，南に隣接する上人ケ平の台地上には，上人ケ平遺跡や上人ケ平１～５号墳が，さらにその南には，平城宮の大膳職所



第１図　瓦谷遺跡位置図（●調査地点）1/50,000



第2図　瓦谷20番地トレンチ遺構配置図（1/250）

用瓦窯と考えられる市坂瓦窯が所在する遺跡の密集地域である。

瓦谷20番地は，瓦谷古墳の南東に隣接し，東から西にむかって伸びる丘陵上に立地している。調査によって古墳２基，埴輪棺４基，土器埋納遺構１基などを検出した。

2. 遺構の概要

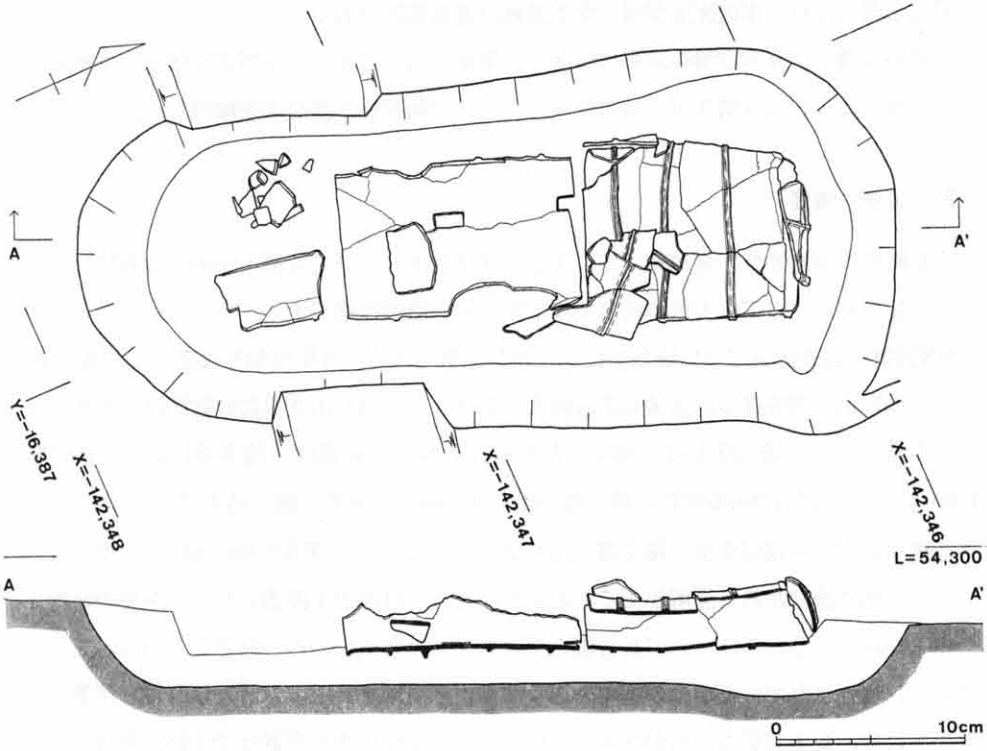
古墳時代の方墳２基，埴輪棺４基，土器埋納遺構１基，貼石遺構１か所，奈良時代の溝１条を検出した。以下，古墳時代の遺構に限りその概要を略記する。

SX2001　調査区東寄りで検出した小規模な方墳である。近年の地形改変により北辺部を失うがほぼ原形を保つ。周溝により隅丸方形プランに削り出された台状部は，東西約７mの規模を測る。墳丘盛土は，削平のため残存しない。周溝は，検出面において概ね幅1.0～2.0m・深さ0.3mを測り，地山面を緩やかに開くU字形に掘り込んでいる。西溝は，南西隅屈曲部から溝底を更に深く掘り込む２段構造をとり，深さ0.6mを測る。東溝においても一部を掘り窪めた箇所がある。周溝内，とりわけ西辺下段溝において多量の埴輪片の出土をみた。これらは，いずれも溝底より若干高い埋土中にみられることから，元来低墳丘上に樹立されていた埴輪が削平とともに溝内に崩落したものと考えられる。西溝からは土師器甕，碧玉製管玉１点が伴出している。台状部中央やや西寄りで主軸を東西にもつ主体部１基を検出した。墓坑は，長辺3.5m・短辺1.0mの隅丸長方形で，検出面からの深さ0.2mを測る。坑底に内法長1.9m・幅0.8mの組み合わせ式木棺の痕跡が残る。副葬品は，棺内・墓坑内ともに検出されなかった。

埴輪棺は，SX2001西方で南北に縦列するごとく４基検出された。本稿では，最も規模の大きなSX2004をとりあげ，他は，観察表を掲載するにとどめる。

SX2004　SX2001の西溝から2.0m西方に位置する。検出時の状況は，他例に洩れず後世の削平を被り，とりわけ棺南半の遺存が悪い。墓坑は，平面長円形で，墓坑の長軸2.2m・短軸1.0m・検出面からの最大深0.3mの規模を有す。棺は，基底部を打ち欠いた２個体の円筒埴輪を連繋した複棺式の本体で，内法長125cmを測る。主軸の示す方位は，SX2001のそれとは異なり，他の埴輪棺と同様に北で東に振れている。北小口は１個の鰭付円筒埴輪片を横位に当てがってこれを塞ぎ，連繋部は，口径の比較的小さな円筒埴輪の半截したものを用いてその上面を被覆している。南小口の閉塞は，本体南棺上半部とともに欠失するので不明である。遺骸は，棺内に土砂が充塡していたこともあって，全く遺存しない。副葬品は，棺内外ともに検出されなかった。

その他の遺構　既述の遺構以外に，調査区内で素掘りの浅い溝がコ字形に巡り，伴出遺物はないが形態からSX2001と同様の小規模方墳と推定されるSX2008や，埴輪棺SX2005

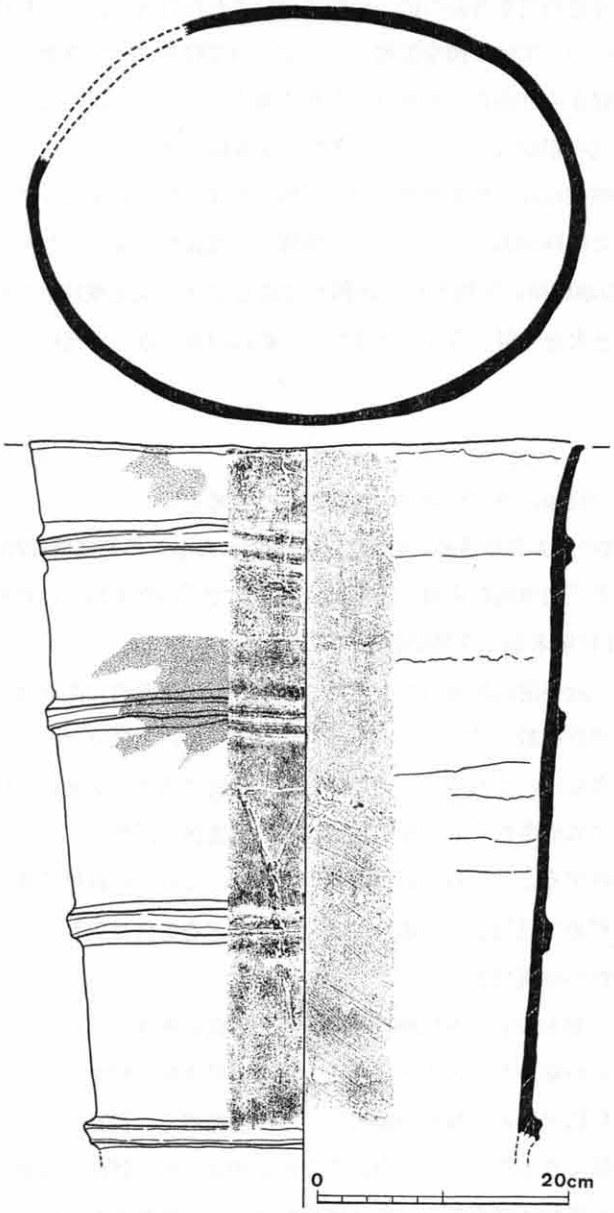


第3図　SX2004 実 測 図

埴　輪　棺　観　察　表

遺構名	墓　　坑	棺の全長	棺本体の形式	閉　塞　方　法	出土遺物
SX2002	隅丸長方形、一段墓坑　残存長80㌢、最大幅70㌢、残存深さ約25㌢（遺存深さは、遺存埴輪の最上位から墓坑底までの高さを示す。以下同）。主軸北北東。	81㌢（内法70㌢）。	単棺式…底部を打ち欠いた普通円筒埴輪（長56㌢）を本体とする。南端が北端より6㌢高い（南枕）。北端部埴輪片を敷いて棺底の不足分を補う。	北小口‥約1/3 に截断した円筒埴輪片を立てて塞ぐ。南小口‥小口正面は円筒埴輪片を横位に当てがう。また別に小口から側面に回り込むように円筒埴輪口縁部を立てる。	碧玉製管玉1点（墓坑掘形内）。
SX2005	隅丸長方形、一段墓坑　全長160㌢、最大幅45㌢、残存深さ13㌢。主軸北北東。	135㌢（南小口痕跡より棺本体北端まで）。	複棺式…2個体の円筒埴輪を継ぎ合わせて本体とする南端が北端よりも5㌢高い（南枕）。	北小口‥不明 南小口‥平面U字形・幅2～3㌢の土質の異なる部分から判断して有機物による閉塞が考えられる	無　し
SX2007	長円形、一段墓坑、長軸105㌢、短軸約60㌢　残存深さ18㌢。主軸北北東。	97㌢。	単棺式…円筒埴輪1個体（長65㌢）を本体とする。南端が北端よりも4㌢高い（南枕）。	両小口とも約1/4 に截断した口径の比較的大きな円筒埴輪片を立てて塞ぐ	無　し

の南に隣接し，円形掘形内に底部を打ち欠いた土師器を埋納する土器棺SX2006等を検出した。一方，拳大の自然石を緩やかな斜面に設けたSX2008は，後世の攪乱により旧状がかなり失われているものの，瓦谷古墳との位置関係，及びその施設状況から同古墳の周濠の内傾斜面に施された葺石の可能性が指摘できる。



第4図　円筒埴輪実測図・拓影

3. 出土遺物

調査区内で出土した遺物は，その大部分が古墳時代に属し，中でも埴輪類の出土が目立つ。ここでは埴輪棺SX2004に使用された埴輪を中心にその特質を簡単に触れてみたい。

SX2004棺本体に使用された埴輪は，いずれも円筒埴輪の転用で，底部を打ち欠いて棺の内法を調整しているため，基底段の状況及び器高は明らかにし得ない。

北側使用埴輪(第4図)は，断面楕円形を呈するもので，透孔がない等通例の普通円筒埴輪と異なる要素をもつ。成形に際しては，幅3cm前後の粘土帯を輪積み技法によって円筒状に造形し，これに縦方向の丁寧なユビナデを加えて粘土帯間を接合し，全体を平滑に仕上げる。一次調整は，外面ではタテハケ，内面は，口縁に近づくほど傾度を強める左上がりの断続的なタテハケを用い，両面とも間断なく施す。タガ貼付後の二次調整は，外面ではタテハケを施した後部分的に断続的な板ナデ状ヨコハケを用い，内面は，口縁段を除いて左上がりタテハケを施す。ハケ原体の条線密度は1cm当り6本と11本が認められる。タガは，残存個体中4条確認された。その形態は側面が指腹による押圧によって窪むいわゆるM形を呈し，幅が相対的に広い分，突出度はそれほど大きくない。焼成は，土師質で，黒斑が外面の対向する

位置に縦長にみられる。また，赤色顔料が外面の広い範囲に塗付された痕跡が認められる。

棺本体南側に使用された埴輪については，図を掲載していないので簡単にその特徴だけ記す。タガは，４条巡るが，口縁から２条目のタガは，大きく突出し，その先端が上方に屈曲する特異な形態をとる。透孔の形状は，縦長の長方形で，タガ間に２孔，１段おき，同方位に穿孔される。成形・調整技法は，器表磨耗のため判然としないが，外面にタテハケ後に断続的なヨコハケを施した痕跡がある。焼成は，土師質で，黒斑が広くみられる。

この他，SX2001周溝内や他の埴輪棺に使用された埴輪類に関しては，現在整理中であるが，その特質は，上記の埴輪と大きく隔たるものではなく，概ね同期とみて大過ない。

4. おわりに

以下，瓦谷20番地地区の調査の成果，及び問題点を列記し，まとめとしたい。

(1)SX2001・2008は，弥生時代の「方形周溝墓」の形態を伝統的に残した埋葬遺構(段築・埴輪列・葺石を備えたいわゆる「典型的な古墳」と区別する意味で「小型方墳」の呼称を用いる)で，周溝内遺物から４世紀末から５世紀前半に築造されたものである。

このような小型方墳の類例は，近年南山城圏内でも増えつつあり，木津町内に限れば，内田山古墳群の２例を含めて４例目を数えるに至る。小型方墳は，一般に単独では存在せず，群在するのが通例である。さらに，これらは，典型的古墳に付随するタイプと付近に典型的古墳がみられないタイプに大別される。瓦谷遺跡の場合，調査区に近接して典型的な高塚古墳である瓦谷古墳が存在することから，前者の類型に入る。これらの低墳丘墓は，その構造から発掘調査によって初めて発見される場合が多いことなどを考慮に入れると，付近になお数基が存在する可能性が指摘できる。

(2)SX2004を始めとする４基の埴輪棺は，SX2007を除き南北方向に縦列する配置をとり，使用埴輪(ほとんどが転用)の時期差がほとんどないことから，計画的に営まれたことが看取される。このような明確な状況での埴輪棺の検出は，木津町地内では初見であり，４世紀代に遡上する可能性が指摘できることから，今回を含めて20余の検出例がある南山城地域の埴輪棺の中では，最古の部類に属する。一般に埴輪棺は，その埋葬される地点が古墳の墳丘内と古墳の周辺に大別されるが，いずれの場合も古墳に付随するのが通例である。また，同一古墳の内外に複数検出される場合も多い。瓦谷遺跡の場合，古墳の周辺に分布する類型に入るが，帰属する古墳については，瓦谷古墳が有力である。ただし，小型方墳でありながら埴輪の樹立が想定される希有な部類のSX2001も埴輪棺との位置関係から可能性が残る。今後，両者の埴輪を厳密に検討し，この点を明らかにしていきたい。

(戸原和人・伊賀高弘＝当センター調査課調査員)

昭和61年度発掘調査略報

12. 西 小 田 古 墳 群

所 在 地　竹野郡丹後町西小田913・弥栄町国久291

調査期間　昭和61年11月20日～昭和62年1月22日

調査面積　約200 m²

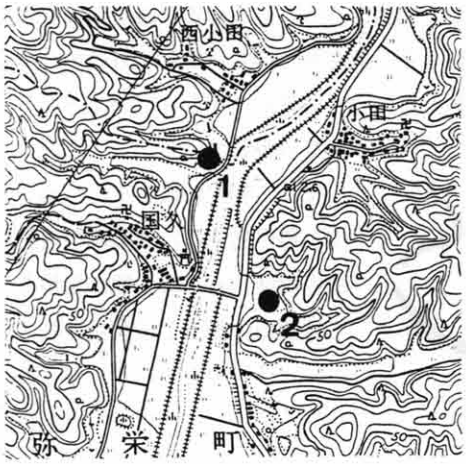
はじめに　今回の調査は，府道間人・大宮線道路改良工事に伴い実施したものである。

西小田古墳群は，竹野川左岸に迫る標高26m程度の低位丘陵上に位置している。眼下に望む竹野川との比高は，約20mを測る。対岸には丹後地域で4番目という偉容を誇る全長105mの前方後円墳・黒部銚子山古墳が存在している。

5基からなる古墳群のうち，丘陵の先端にあった1号墳は，すでに消滅している。2号墳および3号墳は，明確な墳丘をもつ円墳で，3号墳には横穴式石室の石材を抜き取った痕跡と思われる攪乱がある。今回調査した4号墳および5号墳は，1号墳と2号墳との間に位置し，調査前の段階ではいずれも墳丘の存在は顕著ではなかった。

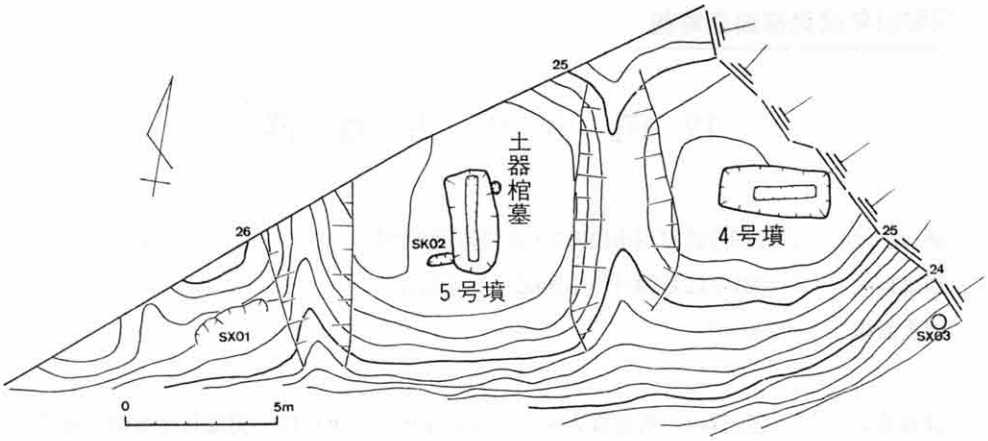
調査概要　調査の結果，4号墳および5号墳は，尾根に直交する溝を掘って地山を整形した方墳であることが判明した。盛土はほとんど認められなかった。いずれも木棺直葬墳で，主体部はそれぞれ1基ずつを検出している。

（1）　西小田4号墳　4号墳は，東側が削り取られているものの，一辺9m・高さ1m程度の規模になるものと考えられる。墳頂部のほぼ中央部で東西方向に掘られた長さ3.6m×幅1.6mの墓坑を検出した。木棺相当部の大きさは，長さ2m×幅0.4mである。木棺の上部から須恵器の杯身が1点出土した。この須恵器の時期から，4号墳は6世紀末頃に築造されたものと考えられる。



第1図　調査地位置図（1/50,000）
1．調査地　2．黒部銚子山古墳

（2）西小田5号墳　5号墳は，一辺11m・高さ1.5mという規模を有する。墳頂部のほぼ中央部で南北方向に掘られた長さ3.5m×幅1.5mの墓坑を検出した。木棺相当部の大きさは，長さ2.8m×幅0.4mである。墓坑上の土坑内からは須恵器の甕が大小セ



第2図　墳丘掘削後地形測量図

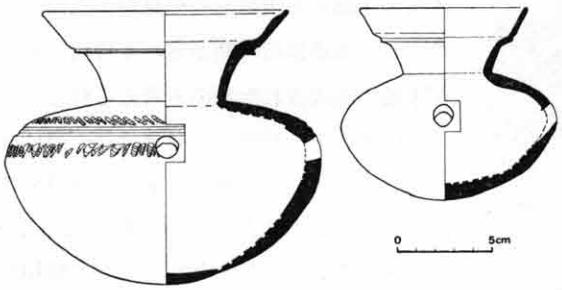
ットで出土した。また，木棺の直上から滑石製の扁平な勾玉1点と，木棺内から長さ50cmの鉄製剣1点とが出土した。須恵器の時期から，5号墳は5世紀末頃の築造と考えられる。

(3)土器棺墓　調査地内からは弥生土器も数多く出土している。特に5号墳の主体部の北東脇では，弥生時代末の土器棺墓を検出した。土坑内に甕形土器と鉢形土器とを合せ口にして，主容器の口縁部が南向きとなるように横位で埋納したものである。主容器となる甕形土器は，口縁部に擬凹線をめぐらすもので，口径24cm・高さ24.3cmを測る。蓋として転用されていた鉢形土器は，口径27.8cm・高さ16.3cmを測るものである。

このほか，土器溜りSX01や土坑SK02・土器溜りSX03から多くの弥生土器が出土した。

まとめ　今回の調査により，西小田古墳群の造営は，5世紀から6世紀にかけての時期が中心となることが知られた。殊に5号墳から出土した鏡2点は，丹後地域では最も古い時期の中に位置づけられる須恵器であり，しかも優品である。付近にこの時期の須恵器窯の存在が知られていないことから，これらはおそらく畿内から持ち込まれたものであろう。このことは，西小田5号墳の被葬者が畿内の勢力と何らかの繋がりをもっていたということを示唆している。

また，弥生時代の土器棺墓や弥生土器の出土は，古墳群の造営以前の段階から，この地が墓地もしくは祭祀の場として利用されてきたことを物語っているものと考えられる。　(三好　博喜)



第3図　5号墳主体部内出土鏡

13. 平 山 東 城 館 跡

所 在 地　綾部市七百石町平山

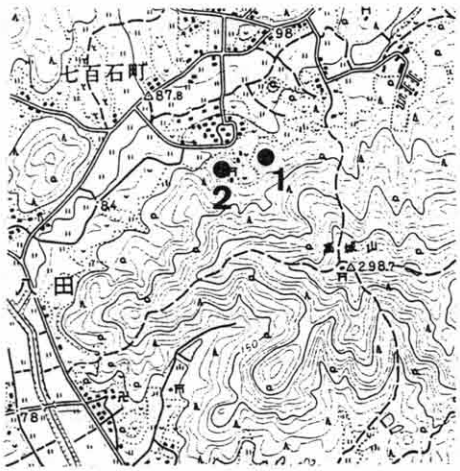
調査期間　昭和61年9月17日～昭和62年3月20日

調査面積　約1,000m^2

はじめに　この調査は，近畿自動車道舞鶴線第8次区間建設工事に伴う事前の発掘調査である。綾部市は，山城跡の分布調査がこれまでに精力的に行われている所であるが，この平山東城館跡は，第8次区間における事前の踏査ではじめて明らかになったものである。当地は，南側に八田盆地を東西に二分する山塊があり，そこから北へ派生する支丘陵上にある。その山塊には高城城という山城があり，谷を挟んで西側の同様な支丘陵上には，平山城館がある。これは，高城城の支城と考えられていた。なお，この城館名は，中城館と称していたが，名称が混乱をまねくということで，平山東城館と改称することになった。

調査概要　この城館は，これまで全く知られていなかったが，非常に遺存状態のよいものであった。城の形態は，東西30m・南北40mを測る長方形をした単郭のものである。この郭の南側には，土塁と空堀が巡る。空堀のさらに南がわには背後からのびてくる丘陵を切断する形で掘り切りがある。

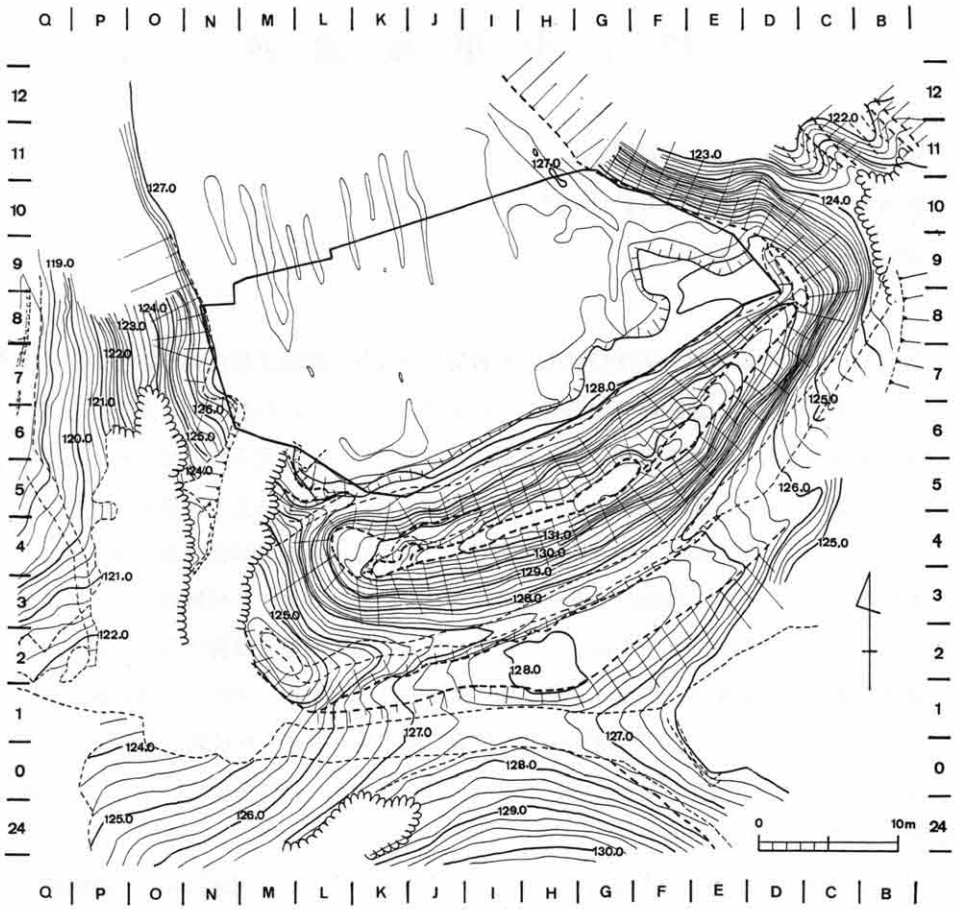
土塁は，平面形が南側から北へのびるコの字形をしており，上部幅3m・下部幅9mを測り，高さは郭から4mである。空堀は，平面形が南側から北へ曲がるL字を呈し，断面形は逆台形を呈する。肩から土塁までの幅は3.7m・底部の幅は1.5mである。肩から底までの深さは1.4mであり，土塁の頂部から空堀の底部までの深さは5.4mである。これらの土塁と空堀は，南側に比較して東西は郭の一部にしか設けられていない。従って，これらは，背後の丘陵からの侵入に対しての防禦のためのものと考えられる。



第1図　調査地位置図（1/50,000）
1．平山東城館跡　2．平山城館跡

郭部の調査は，郭部の南側，南北20mの範囲を実施した。調査の結果，掘立柱建物2棟ほか土坑やピットを検出した。

掘立柱建物は，郭中央部に東西3間×南



第2図　平山東城館跡地形測量図

北1間以上の南北棟の建物と郭南東部に3間×3間と考えられる建物がある。前者の建物は他のピットに比べて深く，掘形も大きく，位置的にも郭の中央部であることから，この城館の中心的な建物と考えられる。

出土遺物は，室町時代の陶磁器類・土師器類などがある。陶磁器類には，瀬戸美濃焼，丹波焼，備前焼，越前焼，染め付け，青磁などがある。その他，銅銭も出土している。

まとめ　この城館は，西隣の平山城館と同様に背後の高城城の支城であると考えられる。特に，この三者の関係を重視してみると，一際高く，広い面積の郭の確認されていない高城城を見張りの城と考え，平山城館と平山東城館が居住空間であったとも推定できる。いずれにせよ，綾部市においてこれまで多くの城跡が見つかっているが，実際発掘調査が行われたものはほんのわずかであり，同時に調査を行っている平山城館と合わせて今回の成果は貴重なものと思われ，より詳細な検討を加える必要があろう。　（藤原　敏晃）

14. カ ジ ヤ 谷 古 墓

所 在 地　綾部市七百石町カジヤ谷

調査期間　昭和62年１月29日～同年２月14日

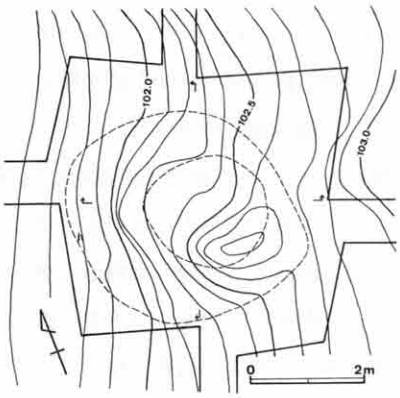
調査面積　約40m²

はじめに　当遺跡は，近畿自動車道舞鶴線の建設予定路線内における分布調査において新たに発見されたものである。今回の調査は，この道路建設工事に先立って実施した。遺跡は，平野部との比高50m前後の低位丘陵に南北を画された谷状地形の中に派生する丘陵の端部に立地する。調査前の現状では，径3mの範囲に自然礫が散布し，積石塚状を呈していた。調査は，トレンチによる礫の分布範囲の確認から始め，最終的に集石遺構を構成する礫石をすべて除去し，下部構造の把握に務めた。

調査の概要　集石遺構は，北側の一部が山道により破壊されているものの，ほぼ完存していた。5～50cm大の自然礫を無造作に積み上げたものであり，南北3.3m・東西3.8m・高さ0.4mを測り，ほぼ円形を呈する。集石遺構の下部には，南へやや片寄った位置で土坑１基を検出した。土坑は，地山から掘り込まれ，主軸をN54°Eに置く。平面形は，隅丸長方形状に近く，断面形はU字状であるが不整形である。長辺1.3m・短辺0.7m・深さ0.7mを測る。土坑掘形北隅部に接して，径0.2mのピット１基が付設されている。

出土遺物は，陶磁器片数点が礫石中から出土した。主なものとして，瀬戸美濃系天目茶椀・丹波焼擂鉢・伊万里系染付椀・土師皿などがある。土坑内からの出土遺物は，ピット埋土中からの土師器細片１点のみである。

まとめ　当初，積石を伴う古墓としての見通しを立て調査を行ったが，今回の調査では，「墓」と断定し得る資料は得られなかった。しかし，土坑の形状は不整形ながらも埋葬可能な空間を有していることから，なお墳墓として構築された可能性も残しておきたい。最後に，構築年代は特定できないが，礫石中に混入していた遺物から，江戸時代宝暦・天明期以降築造と推定される。　（細川　康晴）



第１図　集石遺構測量図

15. 尊　勝　寺　跡

所 在 地　京都市左京区岡崎西天王町

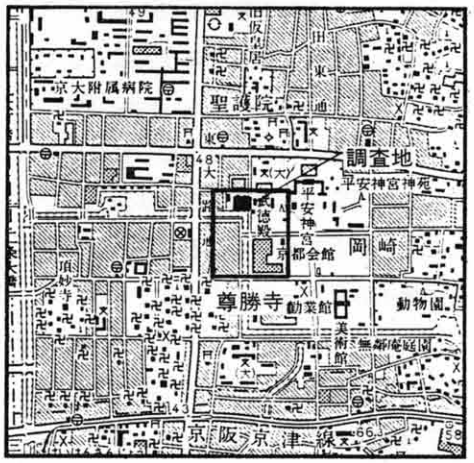
調査期間　昭和61年7月10日～同年12月6日

調査面積　約850m²

はじめに　今回の発掘調査は，府営住宅西天王町団地改築工事に伴う調査である。平安京の東側，鴨川を隔てた岡崎一帯は，院政期を通じて上皇・天皇・貴族により多くの御堂や寺院が建立された。承保2(1075)年，白河天皇を願主とする法勝寺建立に続き，堀川天皇の尊勝寺・鳥羽天皇の最勝寺・待賢門院の円勝寺・崇徳天皇の成勝寺・近衛天皇の延勝寺が建立され，その六大寺を総称して「六勝寺」と呼ばれた。保元の乱(1156年)以降，六勝寺は戦火・地震・大風等にみまわれ多くの御堂が廃絶し，遂には承久の変(1221年)でほぼ壊滅状態になったとみられる。

調査対象地は，康和4(1102)年建立の尊勝寺跡西北域に位置し，観音堂跡と推定されていた地点である。今回の調査は，新たに建築される2棟の建物相当部分で全面発掘を実施した。調査の結果，尊勝寺の主要伽藍の1つとみられる東西棟の建物跡を検出した。検出した建物跡は身舎部分が調査地外に位置したことから，調査地の一部拡張による身舎部分の調査も実施した。

検出遺構　検出した建物跡は，桁行10間(110尺)・梁間6間(64尺)の規模をもつことが判明した。建物は，桁行6間(12尺等間)・梁間2間(13尺等間)の身舎の周囲に廂(12尺)・縁(7尺)を巡らせている。今回の調査では礎石据え付け跡30か所を検出した。検出した礎石据え付け跡は，身舎・廂では直径約2～2.5m・回縁では直径約1.2m程度の掘形をもち，掘形内には根石を詰め込んでいた。南面する回縁の中央から東へ2間分までの掘形上には花コウ岩製の礎石を原位置に据えたままの状態で検出した。建物基壇は亀腹基壇であり，基壇の下縁は回縁の中軸線上に乗っている。回縁から12尺離



第1図　調査地位置図(1/25,000)

第2図　観音堂跡検出状況（東南から）

れて雨落ち溝（幅40cm）が設けられ，溝の両肩部には扁平な河原石が敷かれていた。雨落ち溝は建物の南面中央部分で，長さ9.6m・南へ90cm程度の規模で張り出している。この張り出し部分は建物に伴う階段付設部分と考えられる。建物の北面に階段は設けられていない。

まとめ　今回検出した建物跡の身舎桁行は6間の偶数間であった。多くの寺院建物は奇数間を取る例が大多数を占めることから，今回検出の偶数間建物は希な例といえよう。

『中右記』康和4年6月29日条によれば，観音堂には「丈六六観音像，去寛治七年於法勝寺薬師堂供養先了，今日被安置，」とあり，尊勝寺の観音堂には丈六の六観音像が安置されていたようである。『阿沙縛抄』六観音合行によれば，尊勝寺観音堂には南向きに東から如意輪・不空羂索・十一面・馬頭・聖・千手の六観音像が並べられていたとある。

この文献史料の記載は，今回の発掘調査の結果とほぼ一致することから，検出した建物跡は尊勝寺観音堂跡とみることができる。

出土遺物は整理ケース約400箱分が出土し，大部分は瓦である。尊勝寺出土瓦の特色としては瓦当文様の数が極めて豊富な点があげられる。軒丸瓦42種104点，軒平瓦43種71点が今回の調査で出土している。創建時の瓦は瓦当でみるかぎりその数は少なく，12世紀後半代とみられる瓦当が大部分を占める。瓦溜り内から出土した土師皿・瓦器椀の年代観から，建物の廃絶はほぼ12世紀末～13世紀初頭頃とみられる。　（竹原　一彦）

16. 長岡京跡左京第160次（7ＡＮＤＴＤ地区）

所 在 地　向日市森本町佃

調査期間　昭和61年10月18日～同年11月30日

調査面積　約50m²

はじめに　今回の調査は，府道伏見向日線の拡幅工事に伴う発掘調査である。調査地は標高15m前後の平坦地を呈し，長岡京の復原研究によれば左京一条三坊一町・八町および東二坊大路・東三坊第一小路にあたり，また鶏冠井遺跡の北辺に位置している。調査は，これら長岡京及び弥生時代の遺構・遺物の検出，確認を目的として実施した。

トレンチは上述の大路，小路が予想される地点を中心に設定した。Ａトレンチは長さ約18m・幅1.2m，Ｂトレンチは長さ約18m・幅1.5mであり，遺構面の深さは1.4mである。

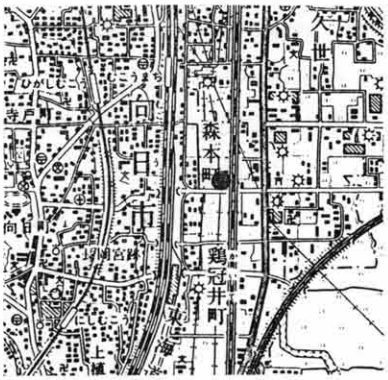
調査概要　今回の調査では３条の溝(SD01・02・03)と落ち込み状の遺構(SX04・05)を検出した。

SD01　幅約1m・深さ0.15mの南北溝である。溝の埋土は黒灰色粘質土であるが，砂層が間層として堆積していることから，水の流れがあったと思われる。

SD02　幅0.9m・深さ0.1mの南北溝である。溝の堆積土は茶褐色粘質土であり，土器片，炭化物が含まれている。溝の位置は，東三坊第一小路西側溝の推定ラインより東へ約2mずれている。

SD03　SD02の下層で検出した北西から南東方向に流れる溝である。北肩のみ確認できたものの，その規模は不明である。灰色砂層が厚く堆積しており，自然流路かと思われる。

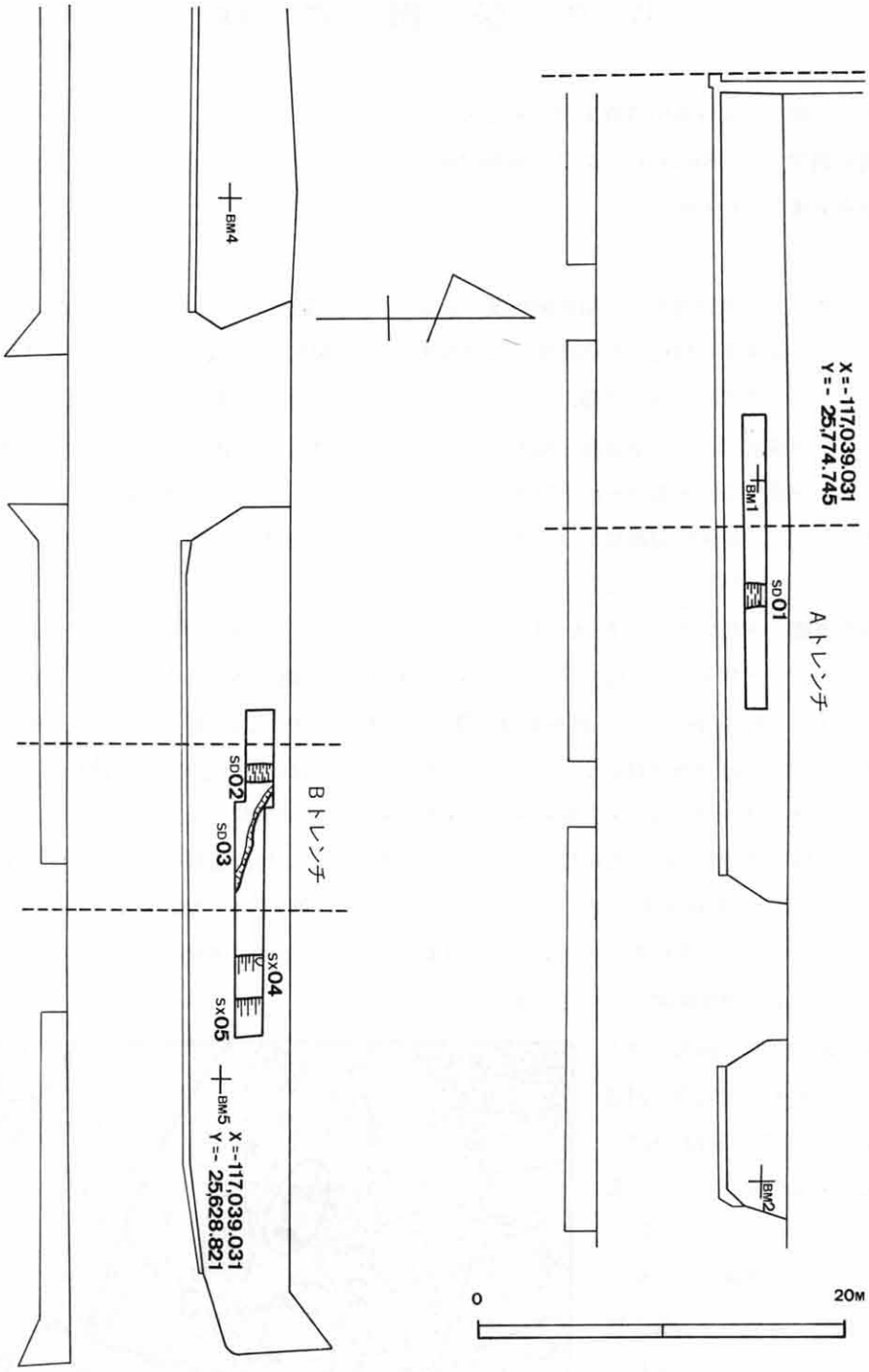
SX04　東へ向かって緩やかに落ち込むテラス状の遺構である。



第１図　調査地位置図（1/50,000）

SX05　SX04の東に接する同じ形態のテラス状遺構である。

まとめ　SD01・02，SX04・05は，条坊推定位置とは少し異なっており，長岡京期の遺構とするには今後の検討が必要である。特に，SX04・05については，「犬走り」のような遺構であると想定しても，溝・築地といった他の諸施設との関連を通して考えられるものであるから，将来の調査成果を待って考察していきたい。　（竹井　治雄）


X=-117,039.031
Y=- 25,774.745
BM1
SD01
Aトレンチ
BM2
0
20M
BM4
Bトレンチ
SD02
SD03
SX04
SX05
BM5
X=-117,039.031
Y=- 25,628.821

第2図　調 査 地 平 面 図

17. 久　保　田　遺　跡

所 在 地　綴喜郡田辺町大住字久保田

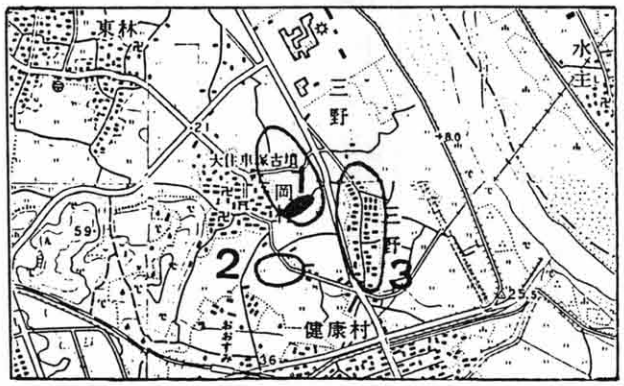
調査期間　昭和61年11月７日～昭和62年２月６日

調査面積　約400m²

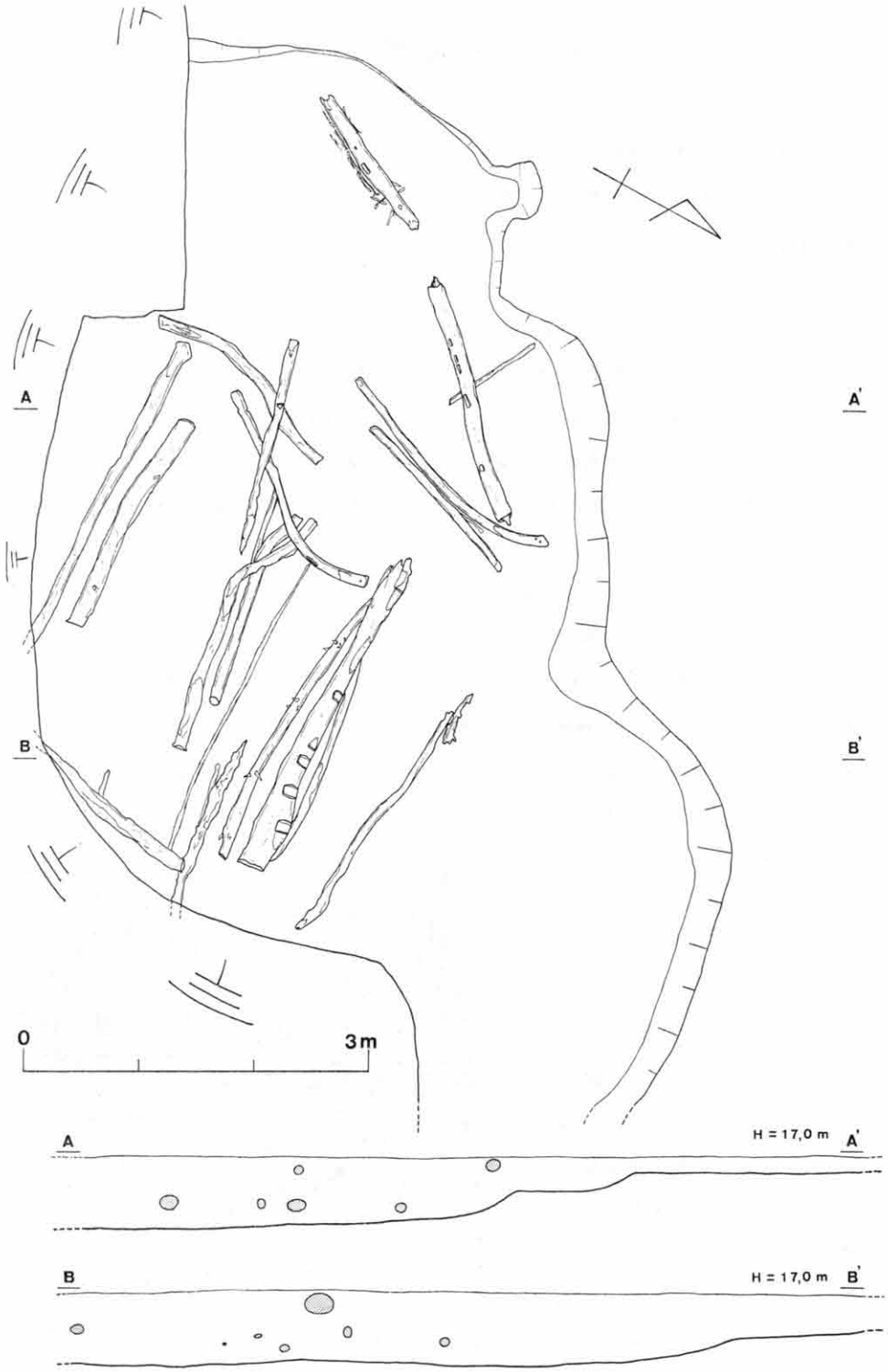
はじめに　久保田遺跡は，昭和60年度に調査した野上遺跡の北東に広がり，西部に連なる山地から盆地部に移行した扇状地内に立地する(第１図)。野上遺跡では中世の包含層を検出したが，生活跡の存在は確認し得なかった。今回の久保田遺跡も立地条件は同じで，土層の堆積状況など，野上遺跡と類似していた。しかしながら，出土遺物の内容は，縄文・古墳・奈良・平安・鎌倉～江戸時代に該当するものを含んで多種多様である。これらは，木津川に注ぐ小河川の氾濫によって運ばれたものと思われるが，当地域の遺跡の多さと内容の豊富さを裏付けたと言える。

調査概要　細長いトレンチ(A～D)を農道に沿って設定し，掘削を開始した。最も遺物が多く出土したBトレンチについてみると，まず西側では鎌倉時代を中心とする遺物包含層を地表下約1mで検出した。暗茶褐色粘質土で，厚さは20cm弱を測る。この包含層から下層は青灰色砂礫の無遺物層であるが，包含層の上層では軒平瓦(室町時代初期)・墨書木札・皇宋通宝(1039年初鋳)・瓦器椀・須恵器甕・杯片・円筒埴輪片などが出土した。Bトレンチ東側では流れの淀んだ沼地が広がり，ここからは江戸時代後期の陶器類・桟瓦・寛永通宝・軒丸瓦(奈良時代)，さらに加工木材が出土した(第２図)。なお，Aトレンチでは扇状地の砂礫の厚い堆積を，CトレンチではBトレンチと同様に中世の包含層を，Dトレンチでは三条の畑地畦溝をそれぞれ検出した。

まとめ　今回の調査では中世の包含層・近世以降の沼地を検出し，多くの遺物を得た。歴史的環境を考える上で重要なものが多い。「三十一受」，「二月七日」と墨書された中世の木札や，おそらく木製農機具の材と思われる加工木材は注目される。（黒坪　一樹）



第１図　調査地位置図（2. 野上遺跡 3. 三野遺跡）1/25,000



第2図　加工木材出土状況（Bトレンチ・東側部）

18. 八ケ坪遺跡第2次

所在地　相楽郡木津町相楽字八ケ坪その他

調査期間　昭和61年8月20日～同年12月12日

調査面積　約670m²

はじめに　この調査は，一般国道163号線バイパス建設工事に伴う八ケ坪遺跡の発掘調査である。本遺跡は，北に木津川，南に奈良山丘陵，東に東部丘陵，西に相楽山丘陵に挟まれた沖積平野のほぼ西端部に位置する。式内社である相楽神社が北方に鎮座し，遺跡中央部を歌姫街道が縦走する。平野部には条里制を留める碁盤目状に区画された水田面が拡がり，歴史的・地理的に恵まれた環境下に所在する。昭和56年に町道東西幹線建設に先立つ試掘調査で奈良時代の掘立柱建物跡が確認されたことによって「八ケ坪遺跡」の一部が初めて明確化されるとともに，径約200mの範囲に拡がることも推定されるに至った。今回の調査は，その推定範囲内の東端に当たることも相俟って，まず試掘調査によって遺構・遺物の有無の確認に努め，その結果に依拠して本調査を実施する，二段階方式を採用した。

調査概要　調査対象地約3,500m²内に，幅3m・南北長計135mにわたるトレンチを4本，さらに東西方向に長さ8m・幅2mのトレンチを5本設定し，4調査地区にわけて調査を行った。その結果，北半部の2調査区内で東西・南北走ないし斜走する素掘り溝10数条及び土坑1件を検出し，南半部では地山面が南方に向かって徐々に下降し粘土化がよりおびただしくなって低湿地化するとともに顕著な遺構が存在しないことも判明した。調査地東側は，すでに早い段階で原面を平坦に大きく削平され，近世～現代の幅広い素掘り溝を検出するに止まった。第3・4調査区で検出した最長の南北走する素掘り溝は，第3調査区では約20m，第4調査区では約40mを測る。ともに並走する同規模程度の素掘り

調査地位置図（1/50,000）

溝1条を有する。この溝は改築によるものかあるいは意図的に補助的機能を与えたものかは判断できなかった。この両調査区での南北走するこれら素掘り溝の中心軸線は真北を指し，第3調査区で一旦途絶するものの一条の関連する溝と把握できる。溝内の水は南流するように溝底部の高さが北→南に下がる。溝内からはごく少量の小破片と化した土師器片・瓦器片・中国製陶磁器片が出土した。これらの遺物からみて，遅くとも14世紀前半以前には構築され，その後間髪を入れず埋没したものと考えている。また第4調査区で確認した南北溝を直角に横断する東西溝は，二回にわたる構築が推定できるが，溝自体が機能した時期は前出の南北溝と併行する。このほかに第3調査区では北西→南東に流れる幅0.8～0.9m・長さ約12mの素掘り溝を発掘した。溝内からは須恵器杯身1点(完形)，甕肩部片，土師器片などが出土した。いずれも古墳時代後期に属する。第4調査区北端で確認された長さ約7m・幅3m・深さ約1.2mの隅丸長方形状の土坑は内部に暗褐色粘土を充填していたのみで，何らの遺物も出土しなかった。構築時期や性格などは一切不明である。調査期間中に出土した遺物は，須恵器杯身1点と金属製品3点以外はすべて破片であり，弥生時代以降の各時代・各種類に及んでいる。大略列挙すれば，弥生土器片・スクレイパー，既述した古墳時代後期の須恵器類・土師器片，奈良時代の土師器片・須恵器片，中世(鎌倉～室町時代)の須恵器片・陶器片・瓦質土器片・瓦片・中国製陶磁器片などがあり，また唐銭の開元通宝・北宋銭の治平元宝各一枚もある。さらに赤銅で製作された笄も1点含まれる。

まとめ　今回の調査で最も注視すべき遺構として第3・4両調査区で検出した東西・南北走する素掘り溝である。南北溝は推定延長100mにも及ぶ。この遺構が本遺跡の所在する沖積平野に留める条里の坪界線と大概一致しその軸線が真北を指すこと，溝の左右両側上面が堅くしまっており今日で言う農道を想起させるものであること，第4調査区の東西溝は坪一辺長のほぼ中間部に当たりこの地域の条里の基本が半折型であると言う歴史地理学的指摘を裏付けていることなどから，相楽条里と深く関連するものと思われる。それは反面，相楽条里の成立，あるいは歌姫街道や恭仁京作り道の造築をも考える上で重要な意義を有している。　(松井　忠春)

第4調査区の素掘り溝検出状況（南から）

19. 木 津 川 河 床 遺 跡

所 在 地　八幡市八幡一丁畑・焼木ほか

調査期間　昭和61年5月23日～昭和62年2月24日

調査面積　重力式濃縮槽　約300m²

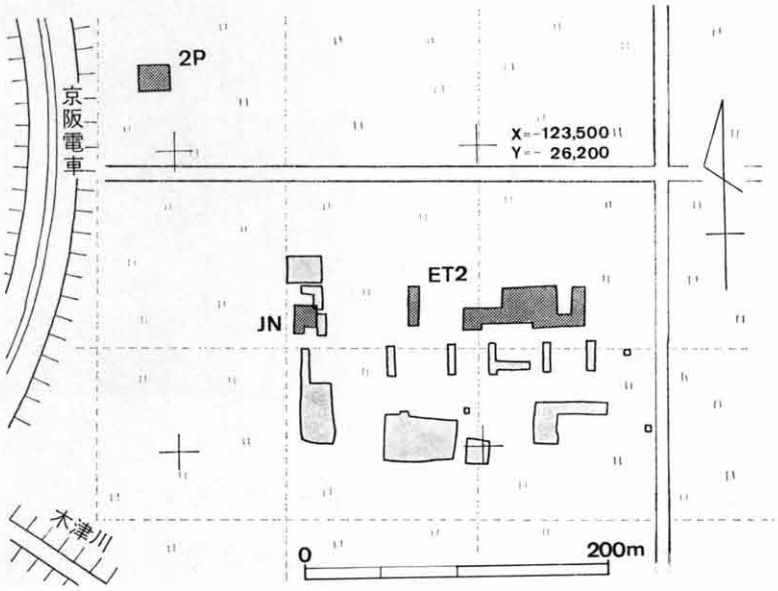
第2ポンプ棟　約325m²

エアレーション・タンク棟　約1,350m²

はじめに　木津川河床遺跡は，八幡市・京都市域の木津川河床を中心に分布しており，同遺跡内での洛南浄化センター建設に伴い，昭和57年度から発掘調査が行われている。今までの調査では，古墳時代後期の集落跡・中世の素掘り溝・弥生時代以降の各時代にわたる遺物が確認されている。今年度は，重力式濃縮槽(JNと略記)，第2ポンプ棟(2Pと略記)，エアレーション・タンク棟(ET2と略記)の建設予定地内の発掘調査を行った。

調査概要　以下，各調査地の概要を記す。

JN地区の調査　この調査区では，今まで確認されている古墳時代の集落の北西部にあたり，それに関連する遺構・遺物が確認されることが期待された。ここでは三面にわたって調査を行ったが，南北走する中世の素掘り溝が確認されたのみで，顕著な遺構・遺物は



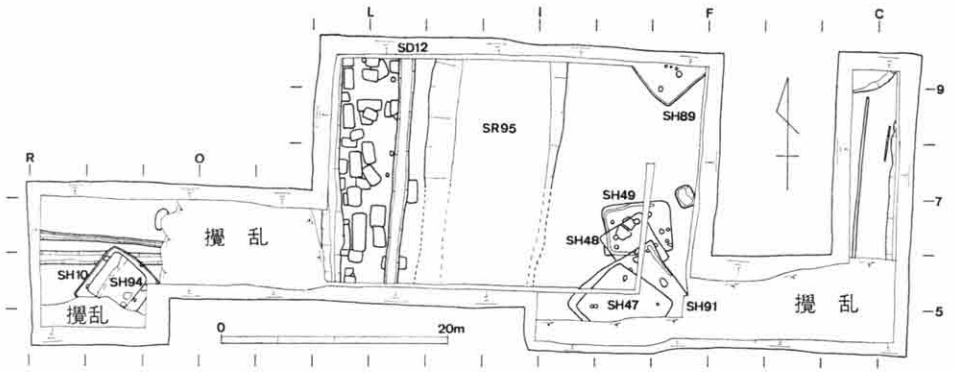
第1図　調 査 地 位 置 図

検出されなかった。

2P地区の調査　2P地区は，JN地区の北西約200mに位置しており，今までほとんど調査がなされていない所である。ここでは6時期の文化面を調査し，無遺物層まで掘り下げた。検出した遺構は，中世～近世の東西・南北走する素掘り溝，柱穴，人や牛の足跡などである。出土土器はJN地区と同様，細片で磨耗が著しい。

ET2地区の調査　この調査区では，二面にわたって調査を行った。検出した遺構は，弥生時代後期を中心とする竪穴式住居跡7棟，土坑(墓？)群，掘立柱建物跡，東西・南北走する中世素掘り溝，流路(第2図)。SH10は調査地の西南部で検出したもので，埋土内に多量の土器片が「投棄」された状況で検出された。規模は5.0m×5.8mで，中央付近に炉跡と推定される土坑があった。主柱穴は4基(3基か？)検出できたが，すべて床面から数10cm程度の深さしかない。また，床面に小土坑を穿ち，調理用の「まな板」として用いた平石(30cm×30cm×15cm)を据えていた。出土土器から，弥生時代後期のものといえる。SH94はSH10の下層で検出した竪穴式住居跡で，住居の軸はSH10と一致している。西辺に「ベッド状遺構」が設けられている。埋土からの出土土器は少ないが，そのうち弥生時代中期の土器が一点出土した。SH47・48・49・91は調査地の東南部で検出した。これらの住居群は重複関係を有し，その切り合い関係より先後関係をみると，SH47→91→48→49の順に新→古となる。SH47の埋土から多量の土器片が出土したが，床面より「浮いた」状態であったため，住居廃絶後の「投げ込み」と考える。床面の中央で，灰白色の粘土を検出した。SH49は，壁に沿って壁溝が巡っているのを検出した。すべて弥生時代後期のものである。

SR95は調査地の中央部で南北方向に幅約10mで落ち込む流路跡である。最深部で約70cmの深さを測る。溝中より弥生時代後期の土器片が出土した。



第2図　ET2地区主要遺構配置図

土坑(墓)群はSD12より西側，5～9-M・L地区で検出した。0.5m×1mから1.5m×2.5mの大型のものまでが，複雑に重複して存在しており，土坑墓と推定される。平安時代。

まとめ　概述のように，JN地区・2P地区では顕著な成果は得られなかったが，ET2地区では，予想を大きく上回る遺構・遺物を検出した。ここでは，ET2地区の成果を中心にして，以下，若干のまとめを行いたい。

(1)　今回の木津川河床遺跡の調査によって，弥生時代の集落遺構が初めて確認されたが，これは南山城地域の低湿地遺跡の調査においても初めてのことである。

(2)　住居跡は3群に分布し，この一群が「一家族」とすると，今後の調査の進展により，集落構造の復元が可能になるものと思われる。

(3)　今回初めて弥生時代中期の土器片が出土したことにより，同時代の集落跡が近辺に包蔵されていることが推定される。

(4)　出土土器を概観すると，河内地方(生駒西麓)から持ち運ばれた土器が目立つ。従来，この地域は「近江型土器」の分布範囲として考えられていたが，それに類する土器は皆無である。地域の中における「集落差」を検討する必要があろう。

(5)　ベッド状遺構・「まな板」・粘土塊が住居跡床面で検出され，当時の生活を推定する資料が得られた。

(6)　従来，木津川河床遺跡からは，中国製陶磁器が比較的多く出土していたが，今回の調査で，それらと直接結びつくと思われる掘立柱建物跡が検出された。

(岩松　保＝当センター調査課調査員)

資　料　紹　介

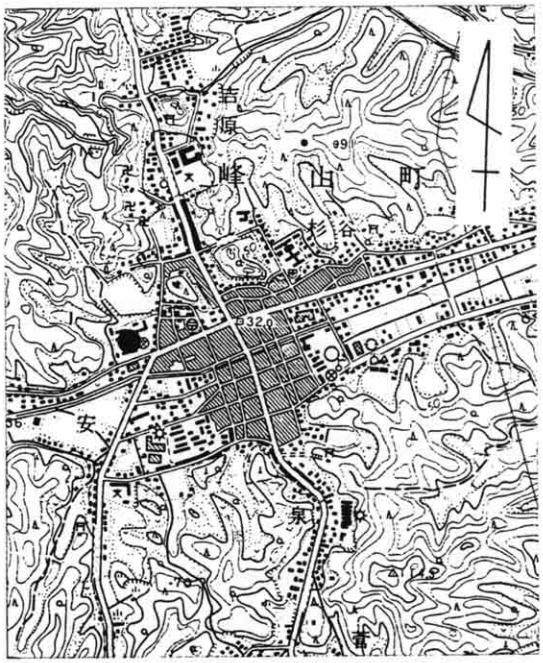
古殿遺跡出土の梯子状組合せ木製品

鍋　田　　勇

1. はじめに

京都府中郡峰山町字古殿に所在する古殿遺跡は，過去，多量の木製品が出土し，弥生時代末～古墳時代前期及び平安時代の貴重な資料を提供している。

ここに紹介する木製品は，この古殿遺跡の第３次調査(注1)にて出土したもののうち，その形状から梯子状組合せ木製品と仮称しているものである。古殿遺跡で初見であるだけでなく(注2)，全国的にも類例を見ないと思われ，かつ用途に関しては，特定できていないことからここに報告しておきたく思う。



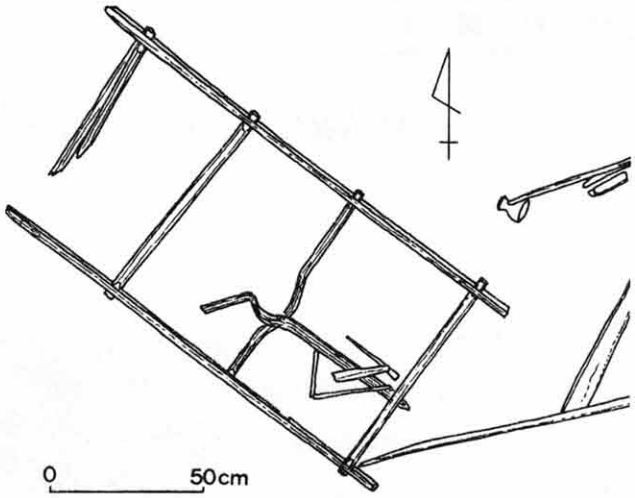
第１図　古殿遺跡位置図（1/25,000）

2. 遺物の出土状況

この木製品は，梯子で言えば，支柱に当たるもの２本，横木にあたるもの２本一組で四組の計８本，その他１本の総合計11本で構成されている。出土時には，第２図のように組合わさった状態であり，原型を保ったまま埋没したものと思われる。３～10(実測図番号，以下同じ)は，２本ずつ上下で対をなしており，両端が１及び２の枘穴に差し込まれていた。また，11は先端が９と10の間にはさまっていた。なお，７・８・11は峰山高等学校の校舎造営時における基礎杭によって破損を受けている。

出土した位置は，明確な遺構内ではなく，古墳時代前期の遺物包含層で，地表下約1.9mの地点である。この層は，広範囲にわたり多量の木製品を含む黒色粘質土であり，これよ

り上層では，遺物の量は際だって減少する傾向を示す。従って，この層は，遺跡の最盛期から衰退期へと向かう過程で形成されたものといえよう。



第2図　遺物の出土状況

3. 遺物について

1，2は全体の支えとなる支柱に当たる。1は板目の，2は柾目の割板材で，長さの割に幅が狭い。1は一端を破損しているが，2は完存である。いずれにも長方形の枘穴（約3.5×5.0cm）が4個穿たれており，枘穴間の長さは，約40cmを測る。さらに2については小さな円形の穴（直径約1.9cm）が，両端の枘穴のやや内側に1個ずつ計2個穿たれていて，この点のみ1とは異なっている。2は，長さ164.9cm・幅7.6～8.3cm・厚さ1.8～2.4cmを測る。

3～10は，割板材を加工した棒状の木製品で，基本的な形はすべて共通している。長さ約74cmで，幅，厚さとも約2～3cmを測り，両端は，一方の側面から切り込まれ，先端がわずかに突起状に残されている。ただし，6と8は中央部の幅が広く，約3×1cmの穴が穿たれている。11は，割板材を加工した棒状木製品。他と異なり先端が細く扁平である。

1・2の枘穴は，2本の横木を合わせた端部よりもかなり大きく，3～10は，枘穴に固定はされていない。従って，1～11を組み合わせた状態でも全体はぐらついており，何等かの方法で1・2を固定して使用したものと考えられる。

4. まとめにかえて

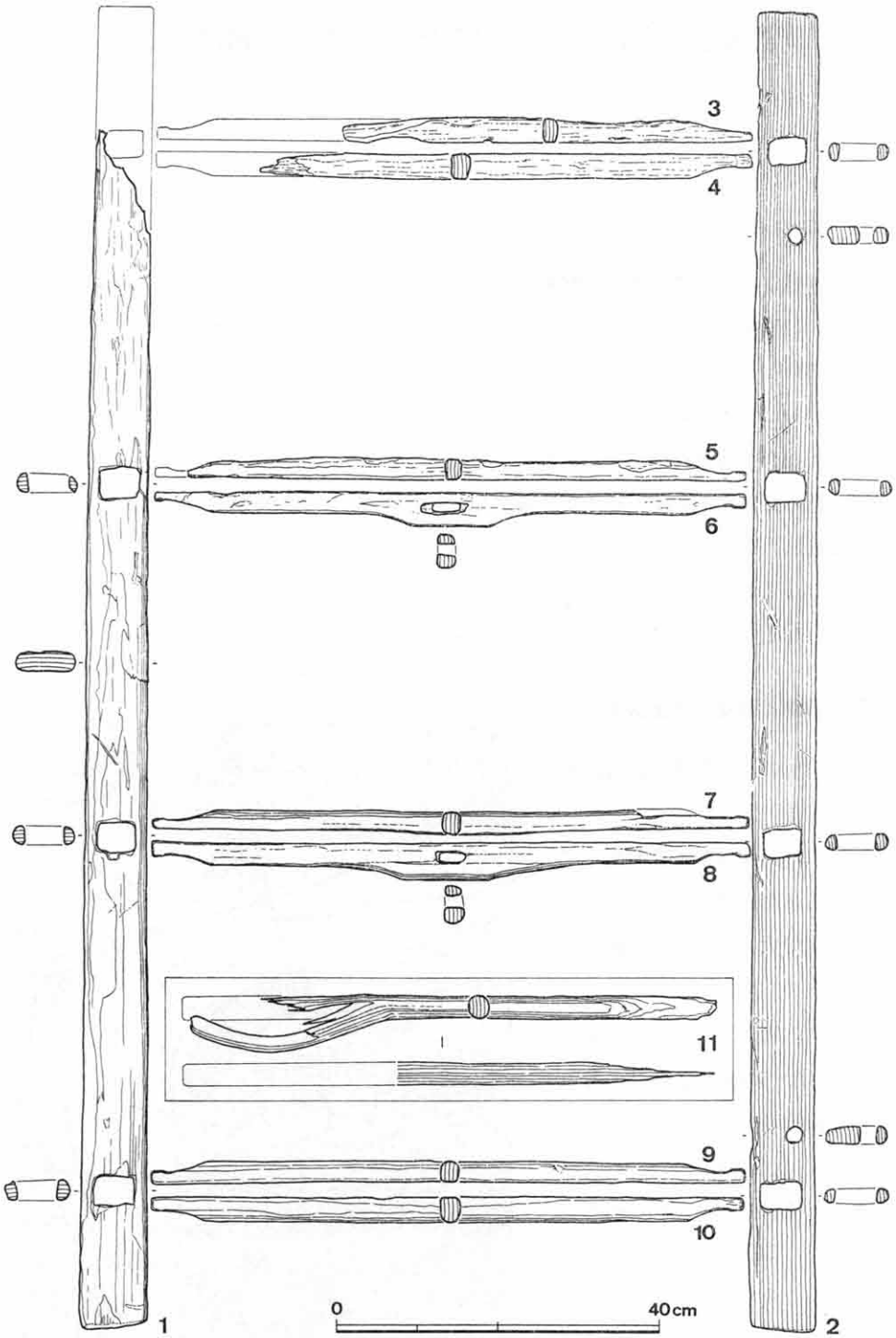
当初，この木製品の用途について，3～10が機織り具のちきりと考えうることから，織機の一種ではないかと推定したが，角山幸洋関西大学教授の鑑定により，3～10を1・2に差し込んだ状態で織ることは不可能であろうとのご教示を賜った。記して謝意を表したい。

なお，その後も用途は不明のままである。さらに検討を続けていきたいと思う。

（鍋田　勇＝当センター調査課調査員）

注1　鍋田　勇「峰山町古殿遺跡の第3次調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第23号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987.4　P.20～P.30

注2　構造物としての初見であり，各部材については単独で出土しているものもある。



第3図　遺 物 実 測 図

青野遺跡第6次調査で出土した磨製石剣について

田代　弘

1. はじめに

青野遺跡からは，これまでに磨製石剣が5点発見されている。(注1) これらはいずれも破片化しており，形態は「鉄剣型」に属するものに限られている。集落の周縁に作られた土坑群中，あるいはその付近で見つかる場合が多く，土坑内出土のもののなかには既に破損しているものや，実用に耐えない粗製のものを意図的に埋納したと思われる例などがある。

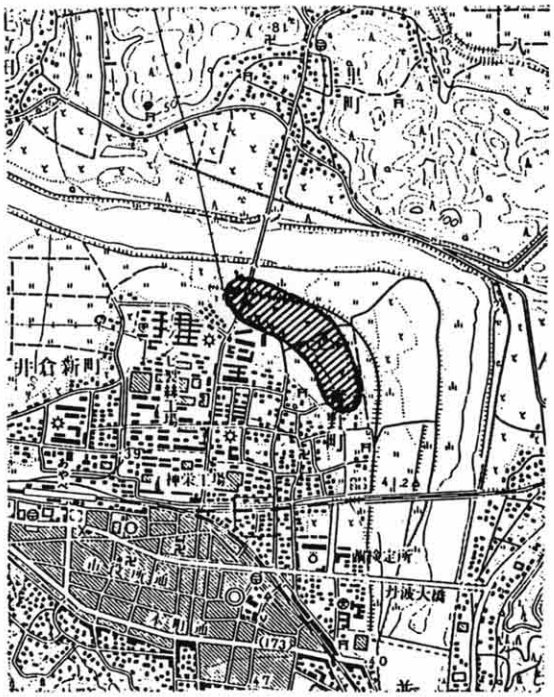
ここに紹介する資料は，この5資料のなかのひとつで，当調査研究センターが第6次調査を実施した際に土坑埋土の中から検出したものである。この資料については，概要報告書で概述したとおりであるが，(注2) 土坑群やそこから出土する磨製石剣の性格を考えてゆく手掛りになると思われるので，改めて取りあげてみることにしたい。観察所見を中心に報告するが，出土状況や遺構についても，あわせて考えてみたいと思う。

2. 遺跡と遺物の出土状況

青野遺跡は，綾部市青野町にある集落遺跡である。

遺跡は，丹波高原に源を発して北流してきた由良川が，綾部市街地の北部で大きく西方に流路を変える地点の左岸に位置している(第1図)。自然堤防を中心に東西200m，南北500mの広がりをもつものと推定されている。

これまでに，綾部市教育委員会・当調査研究センターがそれぞれ主体となり，11次の発掘調査を実施してきた。その結果，弥生時代中期から奈良時代にかけての各時期，各種の遺構や遺物が多量に見つか



第1図　青野遺跡位置図(斜線部分)　1/25,000

り，由良川中流域における有数の複合集落遺跡としての姿が次第に明らかになりつつある。(注3)

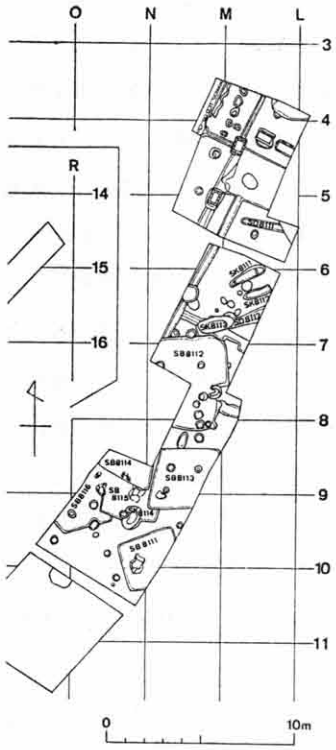
第６次調査地区は，第１次調査地区（Ａ地点）の東に隣接し，第７次調査地区のやや南方にある。第１次調査では，弥生時代中期から古墳時代にかけての遺跡がまとまって検出されているが，(注4) 第６次調査でもこれと同種の遺構や遺物が数多くみつかった（第２図）。位置・内容からみて，第６次調査地区と第１次調査地区の遺構群は，１連のものと考えることができる。

磨製石剣は，SK8112と名付けた長楕円形の土坑の中から，少量の弥生土器片と共に出土している。

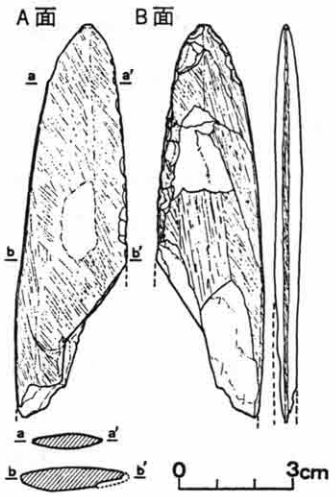
この土坑の規模は，長径1.6m，短径0.5m，検出面からの深さ約30cmである。内部は暗褐色土によって埋められており，底部付近には拳大の河原石が４～５個置かれていた。土器片が小さいため，遺物のうえから時期を決定することは難しいが，SK8113や第１次調査で検出した土坑などと比較して，当例も弥生時代中期に属するものと考えられている。(注5) したがって，この石剣についても同時期に比定することができる。

磨製石剣は，土坑埋土の中位から，石材の節理面に沿って割れ，４枚になった状態で出土した。(注6) 土中で風化が進行して割れたものと思われるが，石材が赤変して器表に火はぜのような剝離の跡が認められるので，二次的に火を受けたために割れやすくなっていた可能性も考慮しておく必要があるだろう。(注7) これを接合して復元したものが第３図である。

それでは，復元図にもとづいて，形状やその特徴について観察結果を記すことにしたい。(注8)



第２図　第６次調査検出遺構図
（注２文献より転載・部分）



第３図　磨製石剣実測図

3. 遺物について

当資料は，鉄剣形石剣の峰の部分だけが残ったも

ので，基部ほか全体の形状は明らかでない(第３図)。残存長約10.3cm，最大幅約2.8cm，重量約20ｇを測る。石材は，やや風化した砂質のホルンフェルスを用いているようである。

刃縁は，通常の製品にみるような鋭さはなく，刃部としての機能を持たされていない。鎬も明瞭でなく，剣身中央部には不規則な弱い稜が認められる程度である。この点が当資料の最大の特徴である。A面側の図を用いて，細部について説明する。

左側縁は，切先部分の小剥離痕を除いて，一辺全体を丁寧に面取りしている。切先側は，明瞭な面をなし，基部側へ向かうにつれて丸みを帯びるようになる。面取りは，当初，節理面に直交して粗い研磨を施し，次いで，面を明瞭なものとするために主軸に直交する研磨を施しているようである。右側縁には，小剥離痕が連続して認められる。剥離は交互に施され，顕著である。左側縁のような研磨の跡はほとんど観察することができない。この剥離痕は，剥離面の侵入状況から，器表の調整後に施されたものと判断することができ，刃部成形に先立つ敲打痕とは考えにくい。

このように，両側縁は形骸的なものとして作られており，刃部としての機能は全く意識されていないことがわかる。

器面は，A・B両面とも主軸に斜行する粗い研磨痕を最終調整としている。B面側には，大剥離面が残っており，器形に大きな影響を与えている。剥片素材を加工する際に生じたものか，器体を敲打整形する際に生じたものかは明らかでないが，後述するように当資料を折損品の再利用したものと考える場合，古い折損部位を示しているとみることもできるので注意しておきたいと思う。

上記の諸点をまとめると以下のようになる。

①　当該資料は，青野遺跡で発見されたほかの石剣同様，弥生時代中期に属する可能性が高い。また，墓坑と考えられる土坑中から破片となって発見されており，出土状況にも類似する点が認められる。

②　平面観は石剣としての体裁を保っているものの，刃縁には面取りや交互剥離を施すなど，剣としての機能は意図されていない。このことから，実用的な利器として用いられたものではないことが明らかであり，儀器として，刺突機能よりも平面形態が重視されたものとみることができよう。(注9)

③　左側縁の面取りの形状とB面側に残る剥離面から，同器種の折損したものを再加工した可能性も考えられる(折損部位は基部であろう)。再加工途上の未製品であるかもしれないが，この場合でも②で指摘した性格は変わらない。

④　したがって，土坑から当資料が出土した理由は，石剣によって負傷した遺体を埋葬した際に持ち込まれたのではなく，意識的に埋納した結果であると推定することができる。(注10)

4. おわりに

磨製石剣には，有樋式(銅剣形)，有柄式，鉄剣形などがある。この中で，最も出土例が多く，分布する範囲も広いのが，鉄剣形石剣である。

鉄剣形石剣は，身の中央部に鎬があり，断面が菱形で明確な茎を持つものが代表的なものである。茎を持たないものや，大きさに大小があって，形態はほかの石剣に比べて変化に富む。

性格に関しては，破損品や再加工品が多い点や切先が人骨に刺さった状態で出土した例のあることなどから，武器として機能したものが多く，実用性の高い器種と考えられている。しかし，実際には，大型で儀器として用いられたと考えられるものや，墳墓から出土する例のように，副葬あるいは供献とみられるものなどがあり，その性格は多岐にわたっている。(注11)

小稿で取り上げた資料は，これらの性格のうち，副葬ないしは供献といった性格(注12)を具体的に示すものと言うことができるのではないだろうか。

当例は，これまでに当遺跡で確認されている石剣や同様の遺構から出土した磨製石鏃の性格などを総合的に考えていくうえで　欠かすことのできない重要な資料であると思われる。(注13)〈62. 2. 28〉

(田代　弘＝当センター調査課調査員)

小稿の作成にあたっては，綾部市教育委員会社会教育課中村孝行技師に事実関係について教示を得た。記して謝意を表する。

注1　第1次調査で2点，第6次調査で1点，第11次調査で2点，合計5点が確認されている。第10・11次調査は本年度に実施した。第11次調査は現在継続中である。
　また，青野遺跡に隣接する青野南遺跡からも小形の磨製石剣が1点みつかっている。これは，耕作土層中から出土したので帰属時期は明らかでない。

注2　増田孝彦・小山雅人「青野遺跡第6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』 第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

注3　第1～5・10次調査を綾部市教育委員会，第6～9・11次調査を当調査研究センターが実施した。詳細については，綾部市教育委員会・当調査研究センターの青野遺跡に関する各調査報告書を参照されたい。

注4　「青野遺跡A地点発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告書』 第2集　青野遺跡調査報告書刊行会) 1976. 7

注5　注2と同じ

注6　当調査研究センター増田孝彦調査員の教示による。

注7　第11次調査では，このSK8112と同様の遺構がいくつか確認されている。この中には焼土と炭が顕著に認められるものがあり，そのうち一基(SK86101)からは磨製石剣片がみつかっている。この石剣は火を受けた痕跡はないが，遺構の検出状況に注目しておきたい。(当調査研究センター西岸秀文調査員の教示による。)

注８　注２文献の図版第23の１を参照されたい。

注９　このような例は，当遺跡第10次調査で検出した土坑出土の磨製石鏃（綾部市教育委員会中村孝行氏の御教示による），亀岡市太田遺跡の溝から出土した小型の磨製石剣などに認めることができる。

注10　橋口達也「犠牲者」（『弥生文化の研究９　弥生人の世界』雄山閣出版）　1986.９

注11　長沼　孝「磨製石剣・石戈」（『弥生文化の研究９　弥生人の世界』雄山閣出版）　1986.９
『古代のまつりとくらし』　京都府立丹後郷土資料館　1979.７

注12　切先副葬の一種と考えたい。

注13　青野遺跡では，これまでのところ，弥生時代中期に属する住居跡は見つかっておらず，該期の遺構としては土坑群が卓越する傾向にある。この土坑群は，集落に付属する外縁施設と思われ，上述したように墓坑の集合と考えて誤りない。将来，隣接地点での調査の進展に伴って住居群がまとまって検出されることが期待されるが，その時点で集落領域の中での土坑群の位置が鮮明になるだろう。

私は，これまでに当遺跡の土坑から確認されている磨製石剣・磨製石鏃類はすべて切先副葬に属するものとして理解している。

府下遺跡紹介

35. 元稲荷古墳

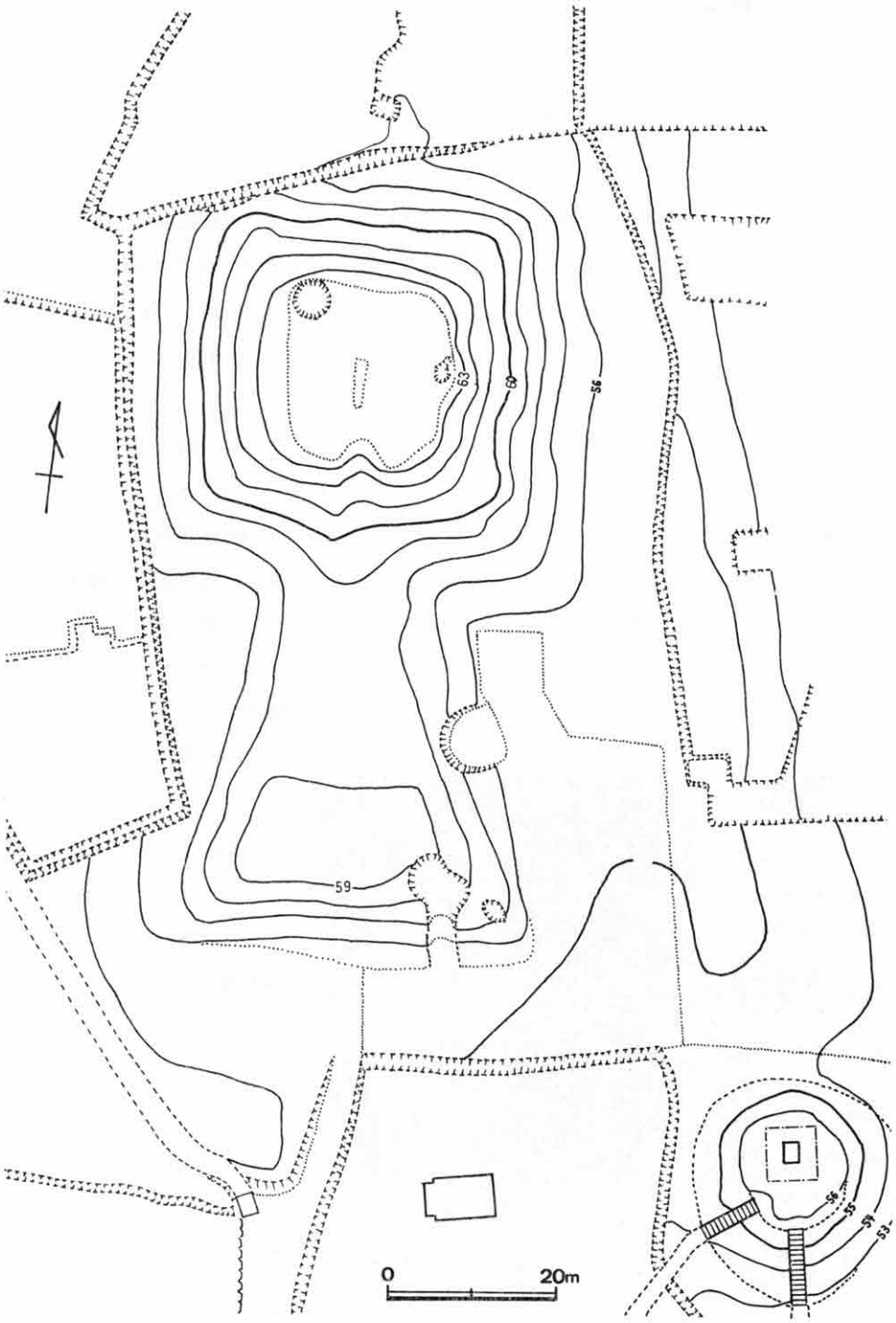
元稲荷古墳は，京都盆地の西側を北西から南東方向に走る向日丘陵のもっとも南側に位置する。この地域には，百々池古墳・一本松古墳・寺戸大塚古墳・妙見山古墳といった多くの古墳が存在する。そのなかでも，この古墳は，延喜式内社の向日神社(延喜式では向神社)の境内に接してあり，古くから知られていた。発掘調査は，過去，1960年と1970年に京都大学によって行われている。

この古墳の墳形は，前方後円墳と呼ばれるもので，乙訓地域では長岡京市の南原古墳がその形であることが知られている程度で，この地域では珍しいものである。

古墳の規模は，過去の調査によれば，全長94m・後方部の一辺52m・後方部高7m・前方部幅46m・前方部高3mを測るという。墳丘は，前方部が二段築成，後方部が三段築成であって，前方部の墳丘の大部分は人工の盛土によって造られており，後方部の方も約半分までが盛土によって造られていることが確認されている。墳丘の表面は，葺石といって，礫によって覆われている。後方部の方の葺石は，一重に扁平な礫を張りつけただけで，前方部の小さな円礫をすえたのとは異なっている。墳丘を築造し，整形する際の工程に違いがあったようである。

第1図　遺跡所在地(1/50,000)

内部主体は，竪穴式石室で，後方部にあり，墳丘の主軸と並行に，ほぼ南北の方向に築かれていた。石室の規模は，全長5.6m・北端幅1.3m・南端幅1.0m・高さ1.9mを測り，なかでも石室の高さが比較的大きいことで注目されている。石室の床は，いわゆる粘土床で，三回に分けて造られており，その都度粘土の上面には



第2図　元稲荷古墳外形実測図
（西谷眞治『元稲荷古墳』図版第8より再トレース）

酸化鉄の朱が塗られている。墓坑の内部にはこの粘土床の高さまで拳程度の砂利がつめられていた。石室の構造は，向日市周辺でとれる粘板岩を小口積みにして四壁をつくり，天井には同じ粘板岩を11枚使うというものである。

副葬品は，盗掘にあったためか少なく，完形のものは銅鏃が1点あるにすぎず，ほとんどのものは破片であったと報告されている。それでも，鉄刀3片・鉄剣2片・鉄鏃7個・鉄槍1片・土師器壺1点などが残っていた。副葬品以外の出土遺物としては，前方部墳頂の中央部にかためて立てられていた埴輪がある。この埴輪は，円筒埴輪と壺形埴輪の両方あり，そのうち円筒埴輪は，高さが1.03mもある大型品である。一方，壺形埴輪の方は，底に穴があいており，円筒埴輪の上にのせていたのではないかと推定されている。

以上のように，この古墳は，葺石のようすや埴輪の復原状況から，前期でも比較的古い時期のものであると考えられている。前方後方墳という形態も乙訓地方では珍しいものであり，山城地域の最初の頃の首長の墓であると推測されているのも，充分にありうることである。

（土橋　誠）

＜参考文献＞

梅原末治「乙訓郡向日町向神社附近ノ古墳」(『京都府史蹟調査會報告』第二冊　京都府)　1920

『向日市史』上巻　向日市　1983

西谷眞治『元稲荷古墳』　西谷眞治先生還暦祝賀会　1985

長岡京跡調査だより

年度末を迎え，いずこの機関もあわただしい毎日を送っています。この12月から2月にかけての3か月間に行われた長岡京跡の調査は，宮域5件・右京域7件・左京域8件の計20件あります。これらの調査では，長岡京の道路側溝や，長岡京期の礎石建物跡・掘立柱建物跡等が検出されました。また，大山崎町教育委員会では遺跡範囲確認第10次調査が行われ，平安時代中期の井戸等が検出されています。

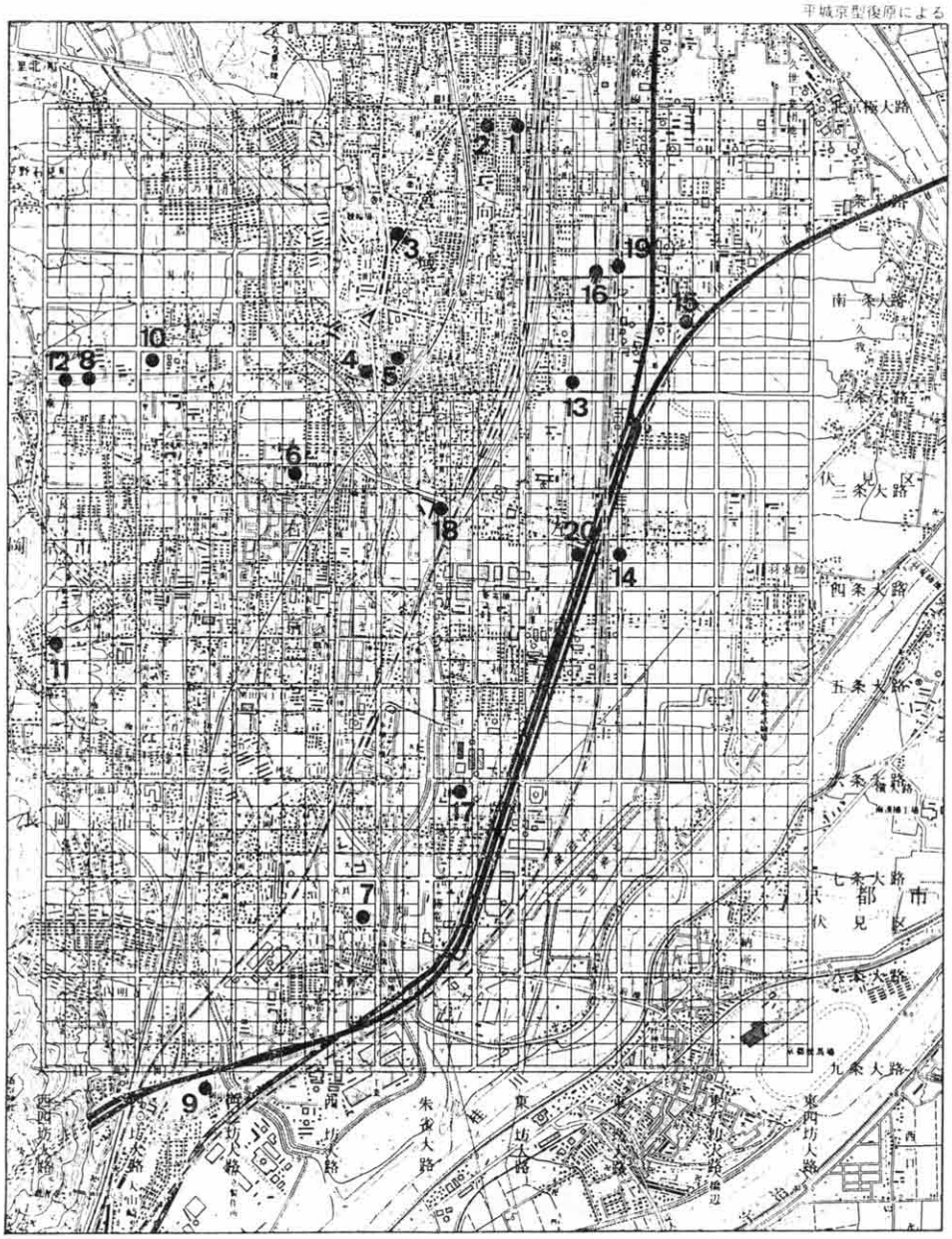
それでは以下に，12月24日・1月28日・2月25日の長岡京連絡協議会で報告された主要な調査成果について，簡単に概要を記します。

調査地一覧表

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第182次	7AN1D	向日市寺戸町渋川22-5	向日市教委	61.12.13～62. 1.12
2	宮内第183次	7AN6H	向日市寺戸町渋川10-5	向日市教委	62. 1.12～ 1.17
3	宮内第184次	7AN13H	向日市寺戸町坂ノ段1-1	向日市教委	62. 1.12～ 2. 3
4	宮内第185次	7AN20E	向日市上植野町馬立6-1	(財)京都府埋	62. 1.26～
5	宮内第186次	7AN15O	向日市上植野町御塔道13-10	向日市教委	62. 1.26～ 2. 9
6	右京第249次	7ANINE-4	長岡京市野添一丁目47-5	(財)長岡京市埋	61.11.25～12.24
7	右京第250次	7ANQUD-5	長岡京市久貝二丁目207	(財)長岡京市埋	61.11.28～12. 8
8	右京第251次	7ANHKB	長岡京市粟生川久保	(財)京都府埋	61.12. 9～
9	右京第252次	7ANSSN-2	大山崎町円明寺算用田	大山崎町教委	61.12.13～12.18
10	右京第253次	7ANGYT-5	長岡京市井ノ内横ケ端1-1	(財)長岡京市埋	62. 1.26～ 2.13
11	右京第254次	7ANPHO-3	長岡京市天神三丁目202	(財)長岡京市埋	62. 1.28～ 1.30
12	右京第255次	7ANHKB-2	長岡京市粟生川久保	(財)京都府埋	62. 2. 6～
13	左京第163次	7ANEYN-2	向日市鶏冠井町山科地内	向日市教委	61.12.11～12.26
14	左京第164次	7ANXWD	京都市伏見区羽束師菱川町	(財)京都市埋	61.12. 1～
15	左京第165次	7ANVKN	京都市南区久我西出町	(財)京都市埋	61.12.10～62. 2. 7
16	左京第166次	7ANEJS-6	向日市鶏冠井町十相地内	向日市教委	61.12.23～62. 1.13
17	左京第167次	7ANMKC	長岡京市神足木寺町	(財)長岡京市埋	62. 1.28～ 2.20
18	左京第168次	7ANFDE	向日市上植野町堂ノ前	向日市教委	62. 2. 8～ 3. 7
19	左京第169次	7ANEJS-7	向日市鶏冠井町十相	向日市教委	62. 2.13～
20	左京第170次	7ANFMI	向日市上植野町南淀井	向日市教委	62. 2.23～

長岡京条坊復原図

平城京型復原による



数字は本文（　）内と対応

宮内第182次（1）　向日市教育委員会

この調査地は，長岡宮の北東隅辺りに位置する。ここでは，長岡京期以降に造られた土坑と，弥生時代の自然流路が検出されている。

宮内第183次（2）　向日市教育委員会

長岡宮の北辺官衙域に当り，長岡京期の南北溝1条，縄文時代の土坑2基等が検出されている。長岡京期の南北溝は，幅3m近くを測る。縄文時代の土坑は，径1m前後の円形の土坑である。

宮内第184次（3）　向日市教育委員会

調査地は，長岡宮の朝堂院北西官衙域に位置し，総柱の礎石建物跡が検出された宮内第137次調査地(私立西山高等学校内)から南へ250m程の場所に当る。

この調査では，東西方向の総柱の礎石建物跡が検出された。南北2間・東西5間分の根石が確認されている。柱間は，東西・南北とも約2.7mを測る。また，北側の柱列から約4.5m離れて，東西方向の溝が検出された。この建物は，西一坊第1小路の計画線から西へ約6m，南一条第1小路計画線から南へ約15mのところに位置している。その性格については，倉庫・門・回廊等の可能性が検討されている。

宮内第185次（4）　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は，長岡宮の西南隅辺りに位置し，近傍を小畑川が流れている。近隣の調査では，小畑川の氾濫等による砂礫層が検出され，長岡宮に関する遺構は確認されていない。

この調査地でも近世以降の小溝のほかは検出されず，その下は，小畑川の氾濫等による砂礫層が堆積している。砂礫層中からは，古墳時代から鎌倉・室町時代にかけての，須恵器・土師器・緑釉陶器・陶磁器等が出土した。

右京第249次（6）　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査では，長岡京の三条第2小路の南側溝，長岡京期の掘立柱建物跡2棟，弥生時代の自然流路4条等が検出された。三条第2小路南側溝は，幅約1.5mを測り，溝底には足跡状のくぼみがみられた。掘立柱建物跡は，南北3間・東西1間以上の南北棟

と思われる建物と，南北２間・東西１間以上の規模で東西棟と思われる建物の２棟である。前者の棟方向は，ほぼ真北方向をとるが，後者はやや北に対し東へ振れている。弥生時代の自然流路は，北から南へ流れている。

遺物としては，土師器・須恵器・弥生土器等のほか，重圏文の軒丸瓦が出土している。

右京第250次（７）　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中世の自然流路・溝・土坑等が検出され，土師器・須恵器・瓦器・黒色土器・青磁・白磁・陶器・瓦・曲物等が出土している。

右京第251次（８）　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は，右京二条四坊五町・十二町と西四坊坊間小路の推定地に当る。ただこの調査では，平安時代以降のピット列・溝，古墳時代後期の土坑等を検出したが，長岡京に関係する顕著な遺構は検出されなかった。また，焼土･炭が存在し，壁面の立ち上がりも緩やかではあるが，竪穴式住居の可能性もある土坑状遺構を検出している。坑内からは，古墳時代後期の須恵器が出土している。

遺物は，須恵器・土師器・緑釉陶器・黒色土器・弥生土器・石鏃等が出土し，須恵器には器台等が含まれている。

右京第253次（10）　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

弥生時代後期の自然流路，最下層に長岡京期の遺物が堆積し，最上層上面で鎌倉時代の遺構が検出された自然流路，鎌倉から江戸時代のピット群，室町時代の井戸，室町から江戸時代の堀状遺構等が検出され，弥生土器・土師器・瓦器・陶器・磁器等が出土している。

左京第163次（13）　向日市教育委員会

この調査では，二条第２小路の側溝や，古墳時代の畦畔状遺構等が検出された。畦畔状遺構は，北西から南東方向へのび，地形に沿った形で検出されている。遺物としては，墨書人面土器の出土も見られた。

左京第164次（14）　(財)京都市埋蔵文化財研究所

平安時代後期の自然流路・掘立柱建物跡・井戸・溝・木棺墓等が検出され，その下層の長岡京期から平安時代前期にかけての面

では，東二坊大路の東西両側溝，長岡京期の掘立柱建物跡・柵列跡・溝・自然流路等が検出されている。また，さらに下層からは，畦畔状遺構が検出されている。平安時代後期の木棺墓は，坑内から完形の瓦器椀・土師器皿が出土している。東二坊大路東西両側溝は，溝心で24m余りを測る。

遺物としては，土師器・須恵器等のほか，和同開珎・神功開寶・銅製丸鞆・木簡・人形等が出土している。

左京第165次（15）

(財)京都市埋蔵文化財研究所

長岡京期や平安時代の溝・土坑等が検出されている。遺物としては，土師器・須恵器・瓦・獣骨・馬歯・白磁等が出土し，下層から縄文時代後期の土器が検出された。

左京第166次（16）

向日市教育委員会

この調査地は，東二坊坊間小路の推定地に当り，東二坊坊間小路の側溝が検出され，溝内からは，土師器・須恵器のほか木簡が出土している。また，弥生時代後期の土器を含む溝や，中世以降の溝等も検出されている。

左京第167次（17）

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

近世の包含層，中世の包含層，長岡京期の包含層がそれぞれ検出され，ひらがなで書かれた木簡・墨書土器・和同開珎・木製品・軒平瓦等が出土している。

左京第168次（18）

向日市教育委員会

幅３ｍ・深さ0.8m程の東西方向の自然の旧流路が検出された。流路内からは，鎌倉時代の瓦器椀の破片が数点出土している。

遺跡範囲確認調査第10次

大山崎町教育委員会

平安時代中期の井戸・溝・ピット等が検出され，須恵器・土師器・帯金具・鉄釘・曲物・黒色土器・緑釉陶器等が出土している。また，古墳時代の紡錘車が検出された。

（山口　博）

センターの動向（61.12～62.2）

1. できごと

12. 2　千代川遺跡（亀岡市）発掘調査関係者説明会実施
古殿遺跡（峰山町）発掘調査終了
8.4～

12. 3　青野遺跡（綾部市）発掘調査開始
長岡京跡左京第160次（向日市）発掘調査終了　10.18～

12. 4　八ケ坪遺跡（木津町）発掘調査関係者説明会実施

12. 5　第17回役員会・理事会一於：平安会館一福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，中沢圭二・藤井　学・足利健亮・原口正三・藤田价浩・武田　浩・堤圭三郎の各理事，荒木昭太郎常務理事出席

12. 6　尊勝寺跡（京都市）発掘調査終了
9.1～

12. 9　長岡京跡右京第251次（長岡京市）発掘調査開始

12. 10　八ケ坪遺跡発掘調査終了　8.25～

12. 11　上人ケ平遺跡（木津町）発掘調査開始

12. 13　第38回研修会開催（別掲）

12. 15　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議（大津市）出席（安田主任・安達主事・杉江嘱託）

12. 19　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議（奈良市）出席（杉原課長補佐・田代調査員・中西嘱託）

12. 20・21　親睦会旅行（館山寺温泉）

12. 24　長岡京連絡協議会開催

12. 27　仕事納め

1. 5　仕事始め
新規採用職員辞令交付式

1. 14　西小田古墳群（弥栄町・丹後町）発掘調査関係者説明会実施

1. 22　西小田古墳群発掘調査終了
11.20～

1. 26　長岡宮跡第185次（向日市）発掘調査開始

1. 27　福山敏男理事長第5回京都府文化賞特別功労賞受賞祝賀会開催

1. 28　長岡京連絡協議会開催

1. 29　カジヤ谷古墓（綾部市）発掘調査開始

2. 2　久保田遺跡（田辺町）発掘調査関係者説明会実施

2. 5　京奈バイパス建設工事起工式出席（中谷課長・辻本主任調査員）

2. 9　長岡京跡右京第251次発掘調査関係者説明会実施

2. 10　木津川河床遺跡（八幡市）発掘調査関係者説明会実施

2. 14　カジヤ谷古墓発掘調査終了

2. 14・15　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議（滋賀県）出席（荒木事務局長・中西課長）

2. 17　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研修（埋蔵文化財情報課程）に

三好博喜調査員を派遣（～3.3）

2. 21　瓦谷・上人ケ平遺跡(木津町)発掘調査現地説明会実施

2. 24　木津川河床遺跡発掘調査終了 5.23～

2. 25　長岡京連絡協議会開催

2. 28　第39回研修会・第5回講演会開催（別掲）

2. 普及啓発事業

12. 13　第38回研修会一於・京都堀川会館：京都北部の古墳の調査一崎山正人「寺ノ段古墳群・広峯古墳群」，三好博喜「弥栄町ゲンギョウの山古墳群の調査」，岡田晃治「大宮町大田鼻横穴群の調査」

62. 2. 28　第39回研修会一於・京都教育文化センター：丹後地方の最近の古墳の調査一増田孝彦「丹後町高山古墳群発掘調査」，奥村清一郎「大宮町大谷古墳の発掘調査」

第5回講演会一於・同上一和田晴吾「古墳文化一北陸と丹後一」

3. 人事異動

62. 1. 1　細川康晴調査員，採用

1. 22　岸　俊男理事死亡退任

受贈図書一覧（61. 12～62. 2）

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	下触牛伏遺跡身体障害者スポーツセンター建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書，荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡，昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書，公共道路(一般県道前橋安中線)交通安全対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書三ツ寺Ⅰ遺跡，三ツ木越戸遺跡国道345号(境バイパス)地域内埋蔵文化財発掘調査報告書，下之城条里遺構の調査，新保遺跡Ⅰ弥生・古墳時代大溝編一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
(財)印旛郡市文化財センター	財団法人印旛郡市文化財センター研究紀要1，昭和60年度財団法人印旛郡市文化財センター年報2，千葉県印旛郡印旛村印旛村村道瀬戸師戸線発掘調査報告書
神奈川県立埋蔵文化財センター	神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 13～14
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第13・15・18集，古代甲斐国と畿内王権 第4回特別企画展図録
佐久埋蔵文化財調査センター	長野県佐久市栗毛坂遺跡群芝間遺跡
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	大谷川Ⅰ昭和58年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元原川遺跡)，茶木畑遺跡田方学校新設高校敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書，宮下遺跡(遺構編)昭和59年度静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査報告書，神明原・元宮川遺跡大谷川放水路建設に伴う発掘調査概報，能島遺跡昭和60年度発掘調査概報
三重県斎宮跡調査事務所	三重県斎宮跡調査事務所年報1985史跡斎宮跡―発掘調査概報―
(財)滋賀県文化財保護協会	石田遺跡発掘調査報告書，湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書赤野井湾遺跡，志那漁港区発掘調査概要報告書，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅻ-2，同Ⅻ-2，葉山川改修工事に伴う栗東町久徳家墓地遺跡発掘調査報告書，滋賀県の民謡―昭和五十九・六十年度民謡緊急調査報告―，一般国道161号(西大津バイパス)建設工事に伴う大津市大伴遺跡発掘調査報告書
守山市立埋蔵文化財センター	守山市文化財調査報告書 第20冊
(財)大阪文化財センター	大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第15回)資料
(財)枚方市文化財研究調査会	枚方市文化財調査報告 第19集 出屋敷遺跡Ⅱ調査概要報告，枚方市民俗文化財調査報告 3 尊延寺
奈良国立文化財研究所	平城宮木簡四 奈良国立文化財研究所史料 第28冊

奈良県立橿原考古学研究所	奈良県遺跡調査概報1984年度，奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第48～49冊，斑鳩藤ノ木古墳，奈良県北葛城郡當麻町首子遺跡群，(特別展図録第26冊)弥生人のメッセージ絵画と記号
(財)鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター	鳥取県教育文化財団報告書 22
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	広島県埋蔵文化財調査センター 調査報告書 第47～53集，加茂学園都市開発整備事業地(西高屋地区)内遺跡群Ⅰ
山形県教育庁文化課	山形県埋蔵文化財調査報告書 第96～103・105～106集
米沢市教育委員会	左沢遺跡，法将寺遺跡，白旗遺跡，上浅川遺跡，米沢市埋蔵文化財調査報告書 第15～16集，米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書 第Ⅲ集
志木市教育委員会	志木市の文化財 第11集
小平市教育委員会	鈴木遺跡範囲確認調査報告―昭和61年度―
川崎市教育委員会	川崎市文化財調査集録 第21～22集，金程向原遺跡Ⅰ―第Ⅰ地点・第Ⅱ地点発掘調査報告―
掛川市教育委員会	高田上ノ段遺跡発掘調査報告書
五個荘町教育委員会	五個荘町文化財調査報告書８，五個荘町埋蔵文化財発掘調査年報Ⅳ
和泉市教育委員会	和泉市春木・久井地区埋蔵文化財分布調査概要
阪南町教育委員会	阪南町埋蔵文化財報告 Ⅲ
兵庫県教育委員会	丁・柳ケ瀬遺跡発掘調査報告書，展示会図録 3
明石市教育委員会	鴨谷池遺跡
日高町教育委員会	日高町文化財調査報告書 第７集
香川県教育委員会	瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅲ，同 Ⅶ，語りかける埋蔵文化財備讃瀬戸の島々
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第11号
君津市立久留里城址資料館	君津市立久留里城址資料館年報(昭和60年度版)
東京国立博物館	特別展観 経塚―関東とその周辺―
出光美術館	出光美術館館報 第55号
福井県立若狭歴史民俗資料館	岩の鼻遺跡―1985年調査概報―，若狭考古学研究会研究報告 6，御意見有用アンケートのまとめ
浜松市博物館	蜆塚遺跡 Ⅴ・Ⅵ，富塚地蔵平１号墳発掘調査報告書，浜松市山の神遺跡発掘調査報告書―範囲確認調査―，浜松市大山町本村遺跡発掘調査報告書
柏原市歴史資料館	田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要

(財)辰馬考古資料館	展観の栞 14
洲本市立淡路文化史料館	淡路島の文化財
鳥取県立博物館	郷土と博物館 通巻63号
東北学院大学東北文化研究所	東北学院大学東北文化研究所紀要 第18号
早稲田大学考古学会	古代 第82号
早稲田大学図書館	古代 第82号
法政大学多摩校地遺跡調査団	法政大学多摩校地遺跡群 Ⅰ-A地区，同Ⅱ-G地区
滋賀史学会	滋賀史学会誌 第5号
天理大学附属天理参考館	資料案内シリーズ 20～21
別府大学附属博物館	駒方古屋遺跡―第2次・第3次発掘調査報告書―
山武考古学研究所	開泉樋南遺跡，成井寺ノ下Ⅰ遺跡
(株)名著出版	歴史手帖 第161号
玉川文化財研究所	八王子市子安3丁目遺跡発掘調査報告書，川崎市内における横穴墓群の調査，横浜市花田園遺跡発掘調査報告書
(財)古代學協會	古代文化 通巻335～337号，兵庫県三田市溝口遺跡―北摂工業地区―
(財)黒川古文化研究所	黒川古文化研究所収蔵品目録 13
帝塚山考古学研究所	古代の瓦を考える―年代・生産・流通―
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 通巻第22号
韓国国立中央博物館	松菊里Ⅱ
(財)京都市埋蔵文化財研究所	平安京跡発掘資料選(二)，昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要
山城町教育委員会	椿井大塚山古墳
(財)京都府文化財保護基金	事業概要(昭和40年3月～61年3月)
京都市歴史資料館	昭和60年度京都市歴史資料館年報
福知山市文化資料館	福知山市文化資料館資料収蔵目録 第3集
京都大学考古学研究会	第38トレンチ
大谷大学構内遺跡調査会	大谷大学構内遺跡発掘調査報告
龍谷大学考古学研究会	口丹波の遺跡―大堰川右岸の古墳群を中心に―
足利健亮	日本古代地理研究，中近世都市の歴史地理，歴史がつくった景観
伊野近富	歴史手帖 第157号
井上定清	丁・柳ケ瀬遺跡発掘調査報告書
岡本正太郎	古代文化を考える 第11～15号

置田雅昭	TENRI UNIVERSITY SANKOKAN MUSEUM
梶山彦太郎	大阪平野のおいたち
清水　尚	国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和60年度）高島バイパス
	新旭町内遺跡発掘調査概要―針江川北遺跡―
関口功一	古代史研究 第5号
土橋　誠	鄂城汉三国六朝銅鏡
福山敏男	飛鳥の石造物

—編集後記—

今年度も終わりに近づき，何かと気ぜわになってまいりましたが，情報23号ができましたのでお届けします。

本号では，当調査研究センターの調査した峰山町古殿遺跡，舞鶴市志高遺跡，綾部市栗ケ丘古墳群，亀岡市千代川遺跡，木津町瓦谷遺跡のほかに，投稿原稿が３本と，大変盛りだくさんになりました。小泉氏の論考は，出土駒から将棋の成立時期を考察した力作です。また，樋口氏，八木氏・杉本氏には，近年の調査の中で，注目すべき遺物について御紹介いただいております。資料紹介についても２本掲載できるなど，本号も充実した内容になっています。よろしく御味読下さい。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第23号

昭和62年３月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の３
℡（075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
℡（075)441-3155（代）